
とある世界の異世界目録

とある異世界の管理人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある世界の異世界目録

【Nコード】

N75570

【作者名】

とある異世界の管理人

【あらすじ】

神に殺され異世界へ逝く事になった少年、神崎十夜^{かんざきじゅうや}。彼は神のおかげで第二の人生を送れる事になった。（ぶっちゃけ殺されたのだから当たり前だ！！）少年が逝くのはとある世界。彼はとある世界でどんな冒険を織り成すのか！！乞う御期待！！

プロローグ

おつす、オラ悟　！！じゃなくて神崎十夜かみやまじゅうやピッチピチの大学3年生だ！！

・・・・自分で言つてて気持ち悪くなった

まあなんで俺がこんなに現実逃避じみた事をしているのかと言うと俺の目の前にいる幼女に「ごめんなさい、間違えて貴方を殺してしまいました」って言われたんだよ？

現実逃避した俺は悪くないって！

まあ、過ぎちまったことは仕方ないんだけど・・・

俺が幼女に慰めの言葉をかけたら、どうやら転生させてくれるらしい。

転生つてあの二次元創作で良くある奴だよな！！俺実は隠れヲタクだったから今めっちゃテンションがハイなんですよ。それで今は、自称神様が付加してくれるって言う能力を考え中なんだよ。

まず外せないのは

・瞬時に分析をしたりする高度な頭脳。ぶっちゃけ答えを出すもの
・俺の知ってる漫画やゲーム小説、アニメなどの技を全て使えるようにする

・身体能力を最強。自分で強弱を付けられるように

・幸運度アップ

・魔力や気を無限に

・創造する力。これは二番目の能力に入るけど、それじゃ制限かかるからね

まあこれぐらいかな？

「これくらいだが、大丈夫か？」

「ええ、大丈夫ですよ。それで行く世界はどうしますか？」

そりゃあ決まってるだろ。不幸少年や電撃姫に会いたいもの

「もちろんとある世界だ」

「分かりました。時期はどうしますか？」

ふむ……

「原作が始まる前なら何時でもいいな。あつそうだ。戸籍とか作つ
といてくれ。家と金もな」

「分かってます。その所はぬかりありません」

「……間違いで俺を殺した奴が言っても説得力が無いのだが？

まあそれはおいておくか。

「それではお送りいたします。」

「おう」

さて、何はともあれ準備完了か

「それでは第二の人生をお楽しみください」

「おう」

俺の下に魔法陣が敷かれ俺の意識はブラックアウトした。

第一話 まさかのこの時代！？

おつす、オラ神崎十夜。今日が覚めたところだ。

でもここは……何故木によりかかって寝てたんだ？

普通ここは「知らない天井だ……」とか言っただけじゃないの？

……オホン。まあそれはいいでしょう。ポケットに家の住所が書かれた紙が入っていた。

でもなんか前とは違う感じがするんだよね……なんか目線が低いって言うか……

俺は気になったので近くの店のガラスを覗きこんで驚いた。

「な、なんじゃこりやああああ！！」

周りに居た人が少し引いてるよ……

まあ気を取り直して状況説明

身長は180cmくらい

目の色が透き通るような薄いオレンジ

髪の色は普通のオレンジ色

そして整った顔立ち……俺じゃねええええええ！！

くそっあの自称神め、次会ったらぶっ殺してやる！！

もう会わないだろうけど……

これじゃフラグ乱「誰か助けてください！！」……？この声どこかで……

「お願いします！助けてください！中で風紀委員が強盗に襲われて

っ・・・・・・・・!!」

泣きじゃくる女の子が通りかかる人に言っているが、通りかかる人は全て困ったような顔をして通り過ぎてしまう

・・・・・・・・あれって初春さん？

まさかこの時代に飛ばされるとは・・・・・・・・

やっぱりぶつ殺さないでおこう。ナイスだ自称神!!

俺は初春さんに近寄り訪ねる。一応聞いておいたほうがいいだろう。間違いかもしれないし

「君、どうしたの？」

「助けてください!!」中で風紀委員が・・・・・・・・白井さんがああああ・・・・・・・・うえええええん!!」

「まあまあ、泣かないで今君のお友達を助けてやるから」

「ふえ？ほ、本当ですか!？」

「ああ」

まずは能力を試してみるか

俺は右手に魔力をため雷を起こす。

そして・・・・・・・・

「はああああサnderナックル!!」

防犯シャッターを破壊する。

ドガアアアン

俺はそのまま中に侵入する。

「何だデメエは!!」

「はあ、いい年こいた男がなに女の子泣かせてんだよ」

「俺の質問に答えろ!!」

ふん、こいつどうやって潰そうか？能力を試してみるか・・・・・・・・

「答える必要は無いな拘束」バインド

「なっ!!くそっ!!後少しだったのに・・・・・・・・」

はあ、やっぱり能力は後でいいか・・・・・・・・早く治してやらないといけないしな・・・・・・・・

「さて、大丈夫か？」

「危ないところを助けていただき、ありがとうございます。」

「まあ礼なら外の子に言ってくれ。泣きながら頼み込んでたんだぞ？」

「初春が？」

「ああベホマ」

「ッ！！足の痛みが消えていきますわ……………」

「後は彼女だけか」

俺はえっと…………えっと…………名前は忘れたが鉄の破片が背中に刺さっている女性に近づく

「うわあ、痛々しい。ベホマ」

鉄の破片は傷ごと消えて、怪我の無い背中に戻る

「う、ううん」

「固法先輩！！」

「ん…………白井さん？奴らは？」

俺は誰にもばれないように抜け出す

「そこにいる殿方が…………あれ？いませんわね。一体どこへ…………？」

…………原作が始まるまでは力の使い方を覚えなとな

第二話 とある銀行強盗事件

あれから数ヶ月がたった。

俺の家はなぜか学生寮で、しかも隣が上条当麻の部屋とはどういうことだろうか？

しかも、俺が編入したクラスは上条当麻のいる学校の上条当麻の居るクラス1年7組とはどういった偶然だろうか

まあそんなことは気にせず、日々楽しくやっている。

上条当麻、土御門元春、青髪ピウスとは結構仲がいい。そんなもって今は当麻と一緒に町をぶらぶらしている。

「おい、ちよつと行ってくる」

「あん？」

当麻が不意にそんな事を言い出した。

何事かと思い当麻が行った方向を見ると不良に絡まれてる…………

……電撃姫様が居た!!!!

これは俺も行かなくては!!

「あー、居た居た。いやぁ連れがお世話になりました。駄目だろ？勝手にばぐれちゃ。じゃぁどうも」

「誰アンタ？」

ぷっ!!やべ噴いた

「へっ、おいお前!!上手く合わせろよ!!」

「おい、当麻。その必要は無いぞ？」

「はっ、十夜?あぶねえからくんな」

「ああん?なめた真似しやがって。」

「なんか、文句でもあんのか？ああん？」

「はあ、しゃあねえな。ああ、そうだよ！！恥ずかしくねえのかお前等！！こんな大勢で女の子一人を囲んでなさけねえ！！大体、お前が超え掛けた相手を良く見てみるよ！！まだガキじゃねえか」

「ぶっ、ぶははははは！！おもしれえ！！こりゃ傑作だぜ！！はっはっはっはひえっひえっひえっひえ」

「どうしたんだ十夜？」

「なんでもねえ、続けてくれくつくつく」

「やべ笑いが・・・」

「さっきやりとり見ただろ！！年上に敬意を払わないガサツな態度！！見た目はお嬢様でもまだ反抗期も抜けてねえじゃん！！そんなガキだぞ！！」

ビリビリ

やべえ来るか。

「俺はなあお前等みたいに群れなきやガキも相手に出来ないような奴等ム力つくんだよ！！」

「あたしが一番ム力つくのは・・・おまえだああああ！！」
ビリビリビリ！！

「あゝあ、やつちやったよ。大丈夫か当麻？」

「おう、お前は」

「余裕、あんな電撃くらいで怪我するようなこいつらの体を見て見たいものだな？」

「それはお前が異常すぎるだけだ！！」

「はっ？何であんた等は無傷なの！？」

「さあな、行くぞ当麻」

俺は当麻を抱えて瞬間移動する。

その後も数回電撃姫に会ったが適当に撒いておいた

そして現在も電撃姫こと御坂美琴に追われているのだ

「ちよつとー！！待ちなさいよ！！」

「なんだよ、しつこいな！！」

「私はね、自分より強い奴が居るのがム力つくのよ。神崎十夜、私と勝負しなさい！！」

「めんどくさいから、やだ」

「行くわよ！！」

「はあ、話し聞いてねえし・・・なら、お前の最強の一撃で来いよ、俺がその自信を叩き潰してやるから」

「くつ、そうね私らしくなかった。全力で行かせて貰う！！超電磁砲って知ってるわよね？」

ズババババーン

「こっいつのを言うのよ？死んで無いわよね？」

「ああ、ったり前だ、この程度でくたばると思ったか？」

「なっ！無傷！！何で！！」

俺は超電磁砲を片手で受け止めたのだ。

「お前、コイン無駄に使いすぎ。超電磁砲って言うのはこっやってやるんだよ！！」

ズドドドドドーン

「（なっ！！今のは確かに超電磁砲！！しかも私のなんか目じゃなくくらいの威力！！）くっ！！」

「分かったろ？じゃあな美琴」

「・・・分かった。あんたに勝つのは諦める。あんなすごい撃たれたら勝てる気しないもの。それじゃあね十夜」

「っ！！おう」

一瞬俺のことを名前で呼んだのにはびっくりしたが、すぐに落ち着き美琴と分かれた

「おい、十夜」

「おつ、当麻じゃねえか。どうしたんだ？」

「先生が呼んでるぞ？なんか身体検査についてだそうだ」

「はあ、分かった。ちよつくら行つて来る」

実は前の検査で、ここの物を壊してしまっているのだ。まあLEV
EL5越えなんて早々居ないから仕方ないか……

「うーっす、どうしたんすか？小萌先生？」

「あつ神崎ちゃん。貴方には常盤台中学へ行ってもらいます」

「何で？」

「いや、貴方の能力の検査にはあそこのプールを使わせて貰います」
「」

「はあ、まあ行つて見ます」

「ちよつと、なんで十夜がここに居るわけ？」

「ん？美琴か、なんかこつちで身体測定しろって言われてな」

「お待ちしております。貴方が神崎十夜さ……ん……で
す……の……？」

「げっ！！」

まさか白井黒子が出迎えたとは思わなかったよ。

「貴方は！！あの時の！！」

「あれ？黒子、十夜と知り合いなの？」

「ええ、お姉さま。この殿方は半年前に私を強盗犯から助けてくださいましたの。あの時は本当にありがとうございましたの」

「いや、いいって。あの時は流れで助けたわけだし・・・それより俺の身体測定」

「そうでしたわね、それでは案内いたします。お姉さまもこれから行くのでしょうか？」

「そうよ。」

『記録』

砲弾射出秒速1030m/sec

連発能力毎分8発/min

着弾分布18.9？

総合評価LEVEL5『

「ふう、まあこんなもんね」

「おお、さすが第三位。」

「あ、あんたに誉められても、べ、別に嬉しくないわよ！！」

「お姉さまは素直じゃありませんわね。次は十夜さんの番ですの」

「おう、さていっちょ派手にやるかな？」

『神崎十夜さん。持てる力をプールにぶつけてください』

「よしっ」

俺は指を前に出し、光線を放つ

ズドドドドーン！！プシャアアア

プールの水は瞬時に回りに飛び散る

「あ、あんた私たちを殺す気！？」

「別に？でもこれ以上力出すとプール壊れそうだしさ」
「今のは大体一万分の一くらいの威力だ」

『記録』

光線射出速度秒速15000m/sec

連続射出毎分 / min

チャージ速度0.001秒

総合評価LEVEL5OVER『

「なっ！LEVEL5OVERって何よ！！」

「あちゃ、やりすぎだな」

「さ、さすが十夜さんですの」

待合室

「神崎十夜君。結果が出たよ。君は第1位だ。」

「えっ！？マジっすか？」

「本気とかいてマジと読む」

「…………はぁ、そうっすか。分かりました。んじゃ俺は帰りますよ」

「気を付けて帰りなさい。もし不良に絡まれたら不良の方が危ない状況になりそうだからね」

「へいへい」

「十夜さん。」

「ん？どうしたんだ黒子？」

「これから暇ですの？」

「まあやることないし暇だが？デートのお誘いか？」

「違いますの、これからお姉さまと初春と遊びに行きますの。初春が貴方に会いたがっていたので良かったらと思ひまして」

「あの花飾りで泣き虫な子か。いいよ。暇だし」
「では参りましょうか」

とあるファミレス

「十夜!! あんた第一位になったらいいじゃない。勝負よ!!」

「いや、この前諦めたんじゃないのかよ？」

「うつ・・・黒子何よそれ」

美琴は黒子が見ている手帳を奪い取る

「あっうつ」

「なになに、初春と十夜さんの再会を口実にしたお姉さまとのデートプラン。その1ファミレスで親睦を深め。その2ランジェリーシヨップ（勝負下着購入）。その3アロマシヨップでシヨッピング（媚薬購入）。その4初春と十夜さん駆除。その5お姉さまとホテルへGO。つまりおとなしくて分別ある友人を利用して自分の変体願望をかなえようと・・・」

「なんか結構危ない言葉が出てきたぞ？」

「いやっその、ちよつと・・・」

「読んでるだけで・・・すんげえストレス溜まるんだけど!!」
美琴が黒子の頬をつまみ出す。おっやわらかそうだな

「ひゅにひゅにおひゆるひおいひやいでひゅおねえひえしゃみゃ」

「まあでも、黒子の友達じゃあしょうがないか」

「とっおー姉さま!!」
どんっ

「ちよつくろ」

「お姉さまがそんなにも黒子のことを思ってくださっていたなんて!! 黒子はもう黒子はもうどうにかなくなってしまいですわ!!」
「はあ」

サイコネシス
俺は念動力で黒子を美琴から離す

「おい黒子。外のお友達が困ってるぞ?」

「おねー……えっ?」

「お客様、申し訳ありませんが他のお客様のご迷惑になりますので
「すいません。うちの馬鹿が騒いで」

ゴン

「というわけでとりあえずご紹介いたしますわ。こちら柵川中学一
年初春飾利さんですの」

「はっ初めまして。初春飾利です!!」

「それから……」

「どうもー初春のクラスメイトの佐天涙子です。なんだか知らないけど付いて来ちゃいました。ちなみに能力値はLEVEL0です」

「ああつ、さ、佐天さんなにをお」

「初春さんに佐天さん。私は御坂美琴よろしく」

「俺は神崎十夜。よろしく」

「あつ……よろしく」

「……お願いします」

「ではつつがなく紹介も済んだところで多少予定は狂ってしまいましたが今日の予定はこの黒子がばっちりと」

「う……」

ゴッソ

「十夜これ消して」

「へいへい」

俺は手帳を掴み、ふれたところから消していく。これは原子分解を
応用したものだ

「本当に消したのね。まっこんな所に居てもなんだし。とりあえず・
・・・ゲーセン行こっか」

「「えっ・・・」」

「ゲーセンですか？」

「ほら・・・黒子行くよ」

「オラオラオラッ!!」

「うわあまた負けた。何で十夜がそんなに強いのだ!!」

「ふんゲーム王と呼ばれた俺をなめないで欲しい」

「アー!!結局一回も勝てなかった!!」

「ふっふっふ。俺に勝とうなんざ10年早いわ」

「なんか結構現実的なこと言いますのね？」

するといきなり美琴が止まった

「どうしたんだ?・・・クレープ屋のチラシ?・・・なる

ほどそれが欲しいのか」

「べ、別に私はゲコ太のストラップなんか!!だってカエルよ!!
両生類よ!!そんなの好きになる女の子が何処にいるのよ!!」

「別に俺はゲコ太のストラップなんていってないんだけどな・・・」

「あっ・・・」

「じゃあ俺等が並んでるから、ベンチを取っておいてくれ」

「わかりましたの。お金は後でお支払いしますの」

「……………」

・ なんか美琴さんがとつてもいらだってるように感じるのだけれど・

「順番変わるか？」

「えっ！……………べ、別に順番なんて！！わ、私はクレープが買えればそれでいいんだから！！」

ツンデレですね。分かります。

おっと順番が来たみたいだ

「はい、どうぞ。最後の一個ですよ」

「ありがとうございます」

……………今店員さんはなんていった？最後の一個？

ギギギギギ

案の定美琴は目に見えるほど気落ちしていた

「……………美琴これ要るか？」

「えっ、いいの？本当にいいの？」

すげえ食いつきっぷり

「あ、ああ」

「ありがとうおお！！」

「あ、ああ。まあ通行人の邪魔になるから早くクレープ買いな」

「うん」

いま、一瞬不覚にもドキツとした

「買ってきたぞ」

「ありがとうございます。十夜さん」

「いいっていいって」

ハムハム

「うん、旨い」

あのクレープ屋はこれからも来よう。

「十夜一口貰うわよ」

ハム

「うん、つてええええ!!」

「なに驚いてんのよ」

「おまえなあ俺は男だぞ？」

「当たり前じゃない」

こいつ素でやってんのか？

「間接キス。お前は気にならないのかよ」

「あ・・・／／／／」

「お姉さまの間接キス私がいただきますわ!!」

「うおっと」

黒子に喰われないうちに完食つと旨かつたな

「ああ、お姉さまとの間接的なベージュが!!」

「ははは、こんどそのお姉さまから直接貰えよ・・・ん？初春
どうした？」

「いえ、あそこの銀行なんですけど!!何で昼間から防犯シャッタ
ーを下ろしてるんでしょうか？」

「まあこういう時は大抵爆発が「ドゴオオオオオオン!!」・・・
起こった」

リリリリリリリリリ

「初春、警備員への連絡と怪我人の有無の確認、急いでくださいな
!!!」

「はっ、はい!!」

「黒子!!」

「いけませんわお姉さま。学園年の治安維持は私たち風紀委員のお仕事。今度こそお行儀良くしててくださいな。十夜さんお姉さまと佐天さんをよろしく願いますわ」

「わかった。怪我だけはすんなよ？」

「わかりましたの」

「おらっグズグズすんな。さつさとしないと!!」

「お待ちなさい風紀委員ですの。ジャッジメント器物損害及び強盗の現行犯で拘束いたします!!」

「おお・・・」

「「「ああん・・・」」」

「「「ふっふっはっは」」」

「なんだよこのガキ」

「ジャッジメントも人手不足か？」

ヒャッハッハッハ

「おらっお譲ちゃん、とつと何処かいかねえと怪我しちゃうぜ!!」

ヒラリ

「そっいう三下のセリフは」

「がはっ」

「死亡フラグですわよ？」

「なあっ!!」

「てめえ」

「だめですって、今広場から出ちゃ」

「どうしたの？」

「男の子が独り足りないんです!!」

「えっ？」

「少し前にバスに忘れ物したって言ったきり!!」

「じゃあ私と初春さんで!!」

「私も行きます」

「はあしかたねえな。手分けして探すぞ!!」

「はい」

「そっちは？」

「駄目です!!」

くそっ、何処だよ!!

「どこ行つたのよもう」

「もう一回広場の方を「なんだてめえ!!」えっ？」

「離せよ!!」

「だめえ!!」

「くそがつ!!」

ちっ

ドゴン!!

「くっ、あぶねえ」

「てめえ何時の間に!!くっ!!」

「大丈夫？佐天さん」

「あ、ありがとうございます」

「十夜さん!!」

「十夜!!」

「くっ!!」

「お前等動くな!! あいつは俺に喧嘩を売った!! 見せてやるぜ学園都市NO1の実力を!!」

「ああ」

「思い出した、今日の身体検査でいきなりNO1になった男が居るって。」

「それは情報が早いすわね」

「そして風紀委員には捕まったが最後、身も心も踏みにじって再起不能にする最悪の空間移動能力者がいて」

「誰のことですか?」

ブウンブウンブウン

「その空間移動能力者を身も心も虜にする最強の電撃使い（エレクトロマスター）が!!」

「どんな噂が流れているか分かりかねますがそう、あの殿方こそが学園都市230万人の頂点。八人のLEVEL5の第1位。究極王」

アルティメットキング

「……散れ原子破壊!!」

ズドドドドオン

一直線に光の光線が車に飛んでいく

ドドオオオオン

「神崎十夜さんですわ」

「……念動力」

車を静かに地面に下ろし、中で気絶している男を引っ張り出す

「学園都市が誇る最強無敵の王子ですの」

「はあ、黒子。こいつ」

「ご協力感謝いたします」

「悪かったな、かつかして」

「はあ……す……」

「すごい」

まあなんにしても被害者ゼロで良かったな

「さすが十夜！！分かってるじゃない！！十夜がやらなかったら私がやってたところよ！！」

「うん、俺がやったという良かったな。美琴がやったら手加減しなかっただろうし」

「アングリ・・・あ、あれで手加減していましたの？」

「ああ、かなり弱小な力だったけど」

「・・・ついていけませんの」

「本当にありがとうございました！！」

「いえっあのっ・・・」

「なんとお礼を行ってよいか・・・ほらあなたも」

「お姉ちゃんありがとう」

「ふう・・・」

「お手柄だったね、佐天さん」

「えっ？」

「すごくかつこよかったよ」

「そっだぞ。あんなの真似できないからな」

「御坂さんと十夜さんは」

「お姉さま！！」

「こら黒子！！」

「佐天さん！！何処も怪我してないですか？」

「うん平気。十夜さんが守ってくれたからね」

「本当ですか？」
「うん」

第三話 虚空爆破事件

「あつ、神崎ちゃん。聞きましたよLEVEL5になったそうじゃないですか？」

「あつ、はい、まあ」

俺は朝、学校来ると小萌先生に絡まれた

「それも、学園都市のLEVEL5八人の中の1位ですよ！！先生は、先生は感激で涙が出そうです！！」

「小萌先生もう出てますよ。俺は授業があるんでそろそろ行きますね」

「はい、がんばってください」

「おい、十夜ー！！」

「ん？当麻じゃん」

「お前LEVEL5になったって本当か！？」

「ああ、まあな」

「すげえなあ！！」

「あ、ありがとう」

なんか当麻のキャラが違う・・・

その日の夜

p i p i p i p i p i

「はい、ん？当麻か、どうしたんだ？」

『助けてくれ、ビリビリ中学生に絡まれててさ』

「ビリビリ・・・美琴のことか。まだやってんのかあいつは。場所
は？」

『河川敷だ』

「今行く」

俺は空間移動テレポートで移動する

「ほい来た」

「つてはやっ！！」

「まあまあ、美琴もまだやってたのか？」

「十夜には関係ないでしょ！！」

「いや、関係あるね。当麻は俺のクラスメイトだ。しかも無能力者
(LEVEL0)。ったく、まだやるってなら俺が代わりに相手に
なつてやるよ。こいよ」

「くっ、行くわよ！！」

ビリッビリッビリビリ

電撃が俺に一直線に飛んでくる

「ったく、時間操作停止エンベラータイム」

俺は時間を止め、雷を避けて美琴の目の前まで行く

「解除」

「なっ！！くっ」

美琴はすぐに距離をとる。

実はこの時間操作エンベラータイムは常人がやると負担がかかりすぎて体がつぶれて
しまう

しかし俺は常人とは違うためこの力を酷使しても負担などはない
「どうした？もう終わりか？」

「まだまだ！！」

美琴は地面に電気を流し、砂鉄で剣を作る

「はあああつ！！」

俺は後ろに飛びのき、美琴と同じように砂鉄で剣を作る

「ふむ、見よう見まねでやったが案外出来るもんだな」

「くっ！！負けない！！」

ガキン！！

俺は幻想殺し（イマジンブレイカー）を一瞬だけ発動させ剣を強制的に砂鉄に戻し美琴に近づく

「なっ！！強制的に砂鉄に戻された！！」

俺は幻想殺し（イマジンブレイカー）を発動させながら美琴の右手を握る

「勝負ありだ。」

「そうね、私の勝ちよ！！」

そいつって美琴は電撃を流そうとする。

しかし・・・

「電撃が流れない！！」

「残念だったな」

俺は掴んでいる手を離し殴りかかる姿勢をとる

「ひっ！」

はあ、完全に怯えてるな・・・

俺は手をそのまま美琴の頭の上に乗つける

ポン

「えっ？」

「当麻、お前は勝手に帰れ。俺は美琴を送ってくから」

「お、おう」

「えっちょっ」

俺は美琴をいわゆるお姫様抱っこをして空間移動をする。
テレポート

「よししょつと、ほらついたぞ」

「……………／／／／」

「……………あの、帰りたいんで手を離していただけないでしょうか？」

俺が美琴を降ろすと何故か手を掴んできて離してくれないのだ

「べ、別に、は、離れたく無いから掴んでるわけじゃ、無いんだから！！」

「……………はあ、何をして欲しいんだ？」

「ね、寝るまで、い、一緒に居て欲しいな」なんて。べ、別に、と、十夜とはなれるのがイヤだって言うんじゃないんだから！！」

「……………何時の間にフラグたてた？」

「はあゝ居てやるから。早く準備して寝ろ」

「う、うん」

まあ当麻ならいつの間にか新たにフラグたてるかな。青髪ピアス曰くカミヤン病だもんな

「ねえ十夜。十夜って彼女居るの？」

おい、いきなりだな

「いや、居ないよ。彼女居ない歴〃年齢だ」

「ふゝん、モテそうなのにな」

すいません。こっち来たの半年前です。まったく持ててないと思います

「スー・スー」

「寝たか。さてと、俺はお暇しようかな」

俺は空間移動テレポートで自室へ戻る

次の日

美琴サイド

「……なんで私あんなこと言っただろう？
でも、十夜と居ると安心する。ドキドキする。
何なのかな？この気持ち……」

美琴サイドアウト

そしてまた次の日

pipipipipipipi

「はい、もしもし」

『もしもし私だけど』

「美琴か、珍しいな。何かようか」

『佐天さんたちと買い物に行く事になったから十夜も来ないかな？
なんて』

買い物ねー買い物買い物……そうか虚空爆破事件（グラビトン事件）は今日だったのか

「行くよ。場所と時間は？うん。分かった。また後でな」

pi

「さて、事件を解決しに行きますかな？」

シユン

俺は空間移動で待ち合わせ場所まで飛ぶ

テレポート

セブンスミスト店内

「こつちこつちー！！」

「初春さんは見たいところある？」

「うーん、特に決めてないんですけど。十夜さんはどうですか？」

「俺はいいよ荷物持ちするから」

「そう」

なんか気まづいな……気にしてんのかな？

俺は美琴に念話をする

（美琴、お前、一昨日のこと気にしてるなら止める。俺はなんとも思っていないから）

「えっ？」

「どうしたんですか？御坂さん？」

「えっ、な、なんでもないわ」

……ランジェリーショップに入って行きやがったよ。

俺はここで待ってるかな？

「ああ、御坂さん。何か探しものとかありますか？」

「そうねえパジャマとか」

「それならこつちですよ」

移動するの早いな」

「いろいろ回ってるんだけど、あまりいいの置いて無いんだよね、おっ？」

パジャマ・・・美琴の趣味に会ってるだろうなこういう子供って禁句だった

「ねえねえこのパジャ・・・」

「うわー見てよ初春このパジャマ。こんな子供っぽいパジャマ今時着る人いないよね」

「小学生の時まではこういうの来てましたけど流石に今は・・・」

「そっそうよねー中学生にもなってこれは無いわよねーうん、ないない」

「あつ私ちよつと水着見てきます」

「水着ならあつちにありましたよ」

・・・つてか美琴絶対俺に気づいて無いだろ

「それっ」

「似合ってるじゃないか」

「えっ、と、十夜!？」

「似合ってるぞ。それと早くしないとあつちから当麻が来るぞ」

「えっ?はっ!」

バサッ

戻す速度が半端無く早かった

「見た?」

「あ、ああ。似合ってたぞ?」

「・・・ありがと」

「?なんだ?」

「な、なんでもない!!」

「そ、そうか」

piriripiriripiriri

「初春携帯なつてない？」

「あつ本当だ。はいもし」

『初春！！虚空爆破事件の続報ですの！！』
グラビトンじけん

「えっ？」

『学園都市の監視衛生が重力子の急激的加速を観測しましたの！！』

「観測地点は？」

『今近くの警備員を急行させるよう手配していますの。貴方は速やかにこちらへ戻りなさい』
アンチスキル

「ですから観測地点を！！」

『第7学区の洋服店 セブンスミストですの！！』

「セブンス・・・ミスト・・・？丁度いいです。今私そこに居ます！！すぐ避難誘導を開始します！！」

「初春代われ！！」

『もしもし！！』

「黒子、俺だ。今回のターゲットは風紀委員なんだろ？」
ジャッジメント

『何故貴方がそれを？』

「ちよつとな、大丈夫だ。何かあつたら俺が守る。心配するな」

『・・・わかりましたの。大切な親友に怪我させたら許しませんわよ！！』

「ああ、任せろ」

pi

「初春、美琴。手分けして避難誘導だ」

「はい！！（うん！！）」

「佐天さんは非難しててください」

「う、うん。気を付けてね」

「はい!!」

「避難誘導終わったか？」

「はい」

「おねえちゃん。眼鏡を掛けたお兄ちゃんがお姉ちゃんに渡して
つてはいっ」

「初春、どけっ!!」

俺は女の子から人形を奪い取り蹴り上げる。
ついでに近くに居た美琴と当麻も瞬間移動で俺の後ろに連れてこさ
せる

「お前等伏せとけ!! 原子破壊!!」

俺は人形に向かって光線を放つ。

ドガアアアアアン!!

「……ふう、何とか無事だな」

「そう見たいね……ありがとう」

「さてと、犯人を捕まえに行きますか。初春は当麻とその女の子
と一緒に警備員アンチスキルの到着を待ってる。」

「わ、わかりました」

「行くぞ美琴」

俺は美琴を連れて空間移動テレポートする
シン

「あの不良ども……」

（美琴、一発蹴り入れてやれ）

（OK）

「皆まとめて吹きとばえら」

ドガン

「いったいなにが・・・？」

「はぁーい。用件は言わなくても分かるわよね？爆弾魔さん？」

「何のことだか僕にはさっぱり・・・」

「まあ確かに威力は大したもんよね。でも残念、死傷者どころか誰一人掠り傷一つ負ってないわよ？」

「そ、そんな馬鹿な！！僕の最大出力だぞ！！」

「へえ」

こいつ自分から自白しやがったよ

「はっ？いや、外から見てもすごい爆発だったんで中の人はとても助からないんじゃないかって！！」

「馬鹿めが原子破壊」

ズドドドドドオン

「さっきの爆発な、お前の爆弾のじゃねえぞ？俺がお前の爆弾を壊した時に起きた爆発だ」

アルティメットキング

「あ、究極王・・・くくっ今度は学園都市NO1様と常盤台のエース様か・・・いつもこうだ。何をやってもいつも力でねじ伏せられる。ころしてやる！！お前見たいのが悪いんだよ！！ジャッジメント風紀委員だつてそうだ、力のある奴は皆そうだろうがよおお！！」

ビリビリ

「力、力って歯を食いしばれっ！！」

バキッ

「ったく」

「・・・はあ」

後は黒子がどうにかしてくれるだろう・・・

第四話 魔術と科学が交差する時

「ここね・・・じゃあ行きますか」

「美琴が居るなら俺が来る必要ないと思うんだけどな・・・」

「もう、お姉さまったら」

「あんたは風紀委員だから面が割れてるかもしれないでしょ？」

「でも!」

俺にはお前の方が有名だと思っただがLEVEL5の御坂美琴さん？

「いいからっ、私に任せときなさいって。それじゃああんたたちは離れた席で待機ね」

「・・・・・・・・行っちゃったな」

「・・・・・・・・そうですわね」

「とりあえず入るか」

「わかりましたの」

「わあっ。泣くなめんどくせえ。教えてやるよ」

「ありがとう、お兄ちゃん」

「……ほら黒子、頭をテーブルに打ち付けてないで行くぞ。
分からんでもないが」

「……わかりましたの」

だってあの美琴がお兄ちゃんとかいったんだぞ！！吐き気かしねえ

「はあめんどくさっ」

おっそろそろ始まるか

「はあっ？いいからさっさと出せって」
ビリビリ

「うわあ」

「じゅ、ジュンタ？てめえ！！」

「もういいわ。人がせっかく下手に出てやったのに。こうなったら
レベルアップについて洗いざらい吐いてもらうわよ」

「すかしてんじゃねえぞ。パワーアップした俺たちの力見せてやる
うぜえ！！」

「……「おう！！」……」

「へっへっへっへ」

「さあ食らいやがれ、これがLEVEL2の！！」
ビリビリビリ！！

「あっあわっがあああ！！」

「これだけ人数居ると……手加減すんのむずいのよねえ」
「随分と派手にやってくれたじゃないか」

「あ、姐御」

「おい、お前たち。あんな讓ちゃん相手になにやってんだ？」
「す、すいません」

「女の財布なんか狙いやがって」

「でっ、でも！」

「ええい！」

パチーン

「値に口ごたえかい！埋めるよ？」

「すみません！！」

「謝る相手はアタイじゃねえだろ！！ほらあんたたちも！！」

「わっ、悪かった」

「そうじゃねえだろ！！」

「本当にさあせんしたっ！！」

「「「「「したっ！！」「「「「「」

「これでけじめはついたろ？許してやっどくれ。お前らっ！！もう帰んな！！」

「ういっす！！」

「お先です！！」

タツタツタツタ

「あんたあいつ等のボス？ならレベルアップのことも知ってるわよね？」

「そんなことより、アタイの舎弟をかわいがってくれたんだ。覚悟はできてるんだろうね？」

「覚悟って、あのさっき謝ってくれたのは？」

「あれはあれ、これはこれ借りはきっちり返さないとな。行くよ！！」

さてそろそろ助けるかな？

地面がだんだん歪んで来る

「美琴、下がってろ」

「十夜！」

「ふん、何だい？騎士^{ナイト}にでもなったつもりかい？」

「騎士^{ナイト}か・・・それも良いんじゃないか？お前の心意気には感心するが俺のダチを傷つけようとしたんだ。覚悟はできているだろうな？」

「はっ、何をいまさら。食らえ!!」

地面が歪んで俺の足を呑み込もうとする

「原子分解」

俺の指から青白い光線が飛んでいく

「ふん、そんな光ごときで私はたおせっ!!どこ行っただよ?」

「こつちだよ?」

「なっ、何故そんなところに!!」

「これはね、俺の靴に電磁波を放ってる。この電磁波が壁の中の鉄コンに触れたらいろいろと便利なんだよ?」

「くっ!!」

「さてと、俺も帰りたいしな少しだけ話をしてやるよ。突如この学園都市に現れたLEVEL5のNO1。アルティメットキング究極王。昔はLEVEL1の少女だったLEVEL5のNO4。電撃使い(エレクトロマスタ
ー)」

「いまさら何を・・・はっ!!まさか!!」

「ああ、まあ仕方ない。相手が悪かったんだ。行くぞ!!原子破壊
!!」

俺は指先から青い光線を放つ。それはまっすぐ女の・・・・足元へ落ちた

「さて、帰るかな。美琴掴まれ、上で黒子が待っている」

「えっ?うん」

7月20日

そう言えばリアルシスターが来るのは今日だったな……後でいいか……

夕方……

家が……燃えてる！？やばっ！

なんか結界が張ってあったが無視して突入！！……中では当麻とタバコをすった男が戦っていた……ってステイルかよ！！すっかり忘れてた！！

よし、いっちょ叩きのめすか

「おーい当麻無事か？」

「と、十夜！？来るな！！危ない！！」

俺に魔女狩りの王が迫ってくる
イノケンティウス

「魔女狩りの王ねえ、なら業火地獄！！」
イノケンティウス

俺は魔女狩りの王を吸収して、代わりに魔女狩りの王の二倍はあるかと思われる炎を作り出す
イノケンティウス

「僕の魔女狩りの王が！！」

「この学園には魔術師は存在してはいけない。散れステイル」マグヌス。それと14でタバコはどうかと思うぞ？」

「なぜ僕の名を！？……引かせて貰う」

ステイルはそのまま、地面に飛び降りた。

「はぁ、終わりだ。当麻インデックスを小萌先生の家へ連れて行って治療してやれ」

「何故インデックスのことを!？」

あーやべ、こういう時に原作知識があると困る

「あーそれはご都合主義ってやつだ」

「?良く分からないけど分かった。小萌先生の家だな」

「ああ」

魔術と科学が今、交差する

第五話 異形物の侵入

翌日

補習も無く、家でゴロゴロしていると俺の携帯に電話がかかってきた

「はい、もしもし」

『十夜さん！！白井さんが！白井さんが！！』

「えっと・・・黒子がどうしたって？」

『今、不良に絡まれてビルの中に！！』

「黒子なら大丈夫だろ？」

『それが、白井さんが押されてるようで！』

「なんだって？場所は？」

『
にある廃ビルです！！』

「今から行く！」

すっかり忘れてたぜ。今日だったかトリックアート偏光能力者。

シュン

「十夜さん！！」

「佐天さん、黒子たちは？このビルの中です」

「分かった。ここで待ってる」

シュン

「そろそろ鬼ごっこも飽きてきたしな、いい加減蹴りつけようや」

「そつだな、俺もお前を叩きのめしたくなってきたしな」

「誰だ！？」

「十夜さん!？」

「よう黒子、そこで休んでな。」

「はん、俺に勝てると思っただのか？残念だがそれは間違いだ。俺は最強になっただよ!!」

「誰が？お前が最強？ふざけるな。借り物の力で何が最強だ、それにお前に俺は倒せないよ」

「ちつ、行くぞオラアアアアア!!」

トリックアート
偏光能力者はナイフを振るってくるが俺は動かない

「十夜さん!!」

「しねえ!!」

ザシュツ

「ぐああああああ!!」

そこに響いたのは………トリックアート 偏光能力者の叫びだった

「な、何で俺の手にナイフが刺さって!？」

「教えて欲しいか？元学園都市NO1……とも言えは分かるか？」

「まさかそれは!!」

「さあな？行くぜ？はああああ!!」

「ひい!!」

俺は男を思いつきり殴った。もちろん能力は解除してだ

「さて、黒子歩けるか？」

「は、はい……ッ!!」

「駄目か、ほら背中乗れ」

「えっ？しかし……」

「はあ」

サイコネシス
俺は念動力で犯人を浮かせ、黒子を背中におぶる

ピーポーピーポーピーポー

「ほら来ちまった見たいだぞ？」

「そうですね、それでは来る前にレベルアップを渡してくれませんか？」

男はがくがく震えながら音楽プレイヤーを出す。

「ふざけないでくださいな」

「ちがう！レベルアッパーは・・・曲なんだ・・・」

「君たちご苦労。後は私たちに任せなさい」

「さて帰る・・・ん？」

俺はポケットに入れておいた携帯がなっているのに気づいた

「はい、もしも『十夜さん大変です！御坂さんがさらわれちゃいました！！』何だって！？」

やばい原作にはこんな展開無かったはずだ！！

『さつき、^{ジャッジメント}風紀委員177支部に御坂さんが捕まってる写真と一緒に「神崎十夜　に來られたし」ってメッセージが！！』

「分かった、今から向かう。^{アンチスキル}警備員には連絡するなよ？大事にはしたくないからな」

『・・・わかりました。くれぐれも気を付けて』

「分かっている」

俺は携帯を右ポケットにしまう

「黒子、急用ができた。事情聴衆よろしく」

「・・・わかりましたの」

「おう」

シュン

「・・・十夜さんどうかお姉さまをよろしく願いしますの」

「ここか・・・」

「よくきたなあ！神崎十夜あ！ヒヤッヒヤッヒヤッヒヤッ！！」

「誰だ！！」

「俺か？俺はなあ東死音だ。ヒヤッヒヤッヒヤッヒヤッ！！」

「美琴を返せ！」

「残念だがそれはできねえなあ。お前を殺して御坂美琴や白井黒子や初春飾利の体で遊ぶのが生前からの俺の目的だからなあヒヤッヒヤッヒヤッヒヤッ！！」

「生前だと！？お前トビ転生者か！？」

「ヒヤッヒヤッヒヤッそのとうりだぜい！！」

「お前、美琴に何にもしてねえだろうな？」

「ヒヤッヒヤッヒヤッ！お前が死んだらお前の前で起こして御坂美琴をお前の死体の前で犯してやるよおヒヤッヒヤッヒヤッヒヤッ！！」

「てめえきめえんだよ！！ここで消えろ！！」

「いくぜえヒヤッヒヤッヒヤッヒヤッ！！超電磁砲！！」

「ちっ！原子破壊！！」

ドガン

「ヒヤッヒヤッヒヤッ！！まだまだ！契約により我に従え、高殿の王。来れ、巨神を滅ぼす燃え立つ雷霆。百重千重と重なりて、走れよ稲妻。「千の雷」！！」

千の雷・・・ネギまの技か！！

「原子破壊！！原子構築！分子投合！対象千の雷！分子再構築！対象東死音！分子分散」

千の雷がおとも無く消滅して、東死音の体が分子と化する。そして分散する

「残念だったな。分子消滅」

分散していた分子は消滅して当たりには人の気配はしない

俺は美琴の元へ向かおうとするが声に阻まれる

「おいおいまだ終わっちゃあいないぜ？」

「何？何処だっ！！」

「こっちだっ！！」

俺の真後ろに東は現れる。

「（くっ間に合わない！！）」

俺は痛みを覚悟したが痛みは襲ってこなかった。代わりに東が吹き

飛んだのが分かった。

「と、十夜……負けるんじゃないわ……。よ……」

どうやら美琴が目を一瞬覚まし超電磁砲を撃ってまた気絶してしま
った

「ちっあの女!」

「……ありがとう、美琴。俺は全力を出すのを躊躇ってい
たらしい」

まあ全力は出しても本気は出さないがな

「行くぞ、東死音」

「ヒヤッヒヤッヒヤかかってこいや!」

「I am the bone of my sword. (体は
剣で 出来ている)」

Steel is my body, and fire is
my blood. (血潮は鉄で 心は硝子)

I have created over a thousan
d blades. (幾たびの戦場を越えて不敗)

Unknown to Death. (ただの一度も敗走はなく)

Not known to Life. (ただの一度も理解され
ない)

Have withstood pain to create
many weapons. (彼の者は常に独り 剣の丘で勝
利に酔う)

Yet, those hands will never ho
ld anything. (故に、生涯に意味はなく)

S o a s I p r a y , u n l i m i t e d b l a d e
w o r k s . (その体は きつと剣で出来ていた) 」

俺は固有結界を作り出す

「さて、お前が挑むのは無限の剣製だ。いつまで耐えられるかな？」

「はん、おもしれえじゃねえか!!」

俺は近くに合った剣を引き抜く

「ぐっ!!... な、何だその魔力は!!」

「何？お前は知っているはずだろう？まあいいか行け!!」

俺の呼びかけで剣は東へ向かっていく

「くそっ！こんな剣!!」

ザシュツザシュツ

「ぐはっ！」

東には剣が大量に刺さり、東は力無く倒れた

「終わりだな」

『十夜さん!! 大変だよ!! 異形物が紛れ込んだ!!... も
う終わってるみたいだね』

突然俺の目の前に現れたのは、俺を殺したいつぞやの神だった

『はあ、せつかくの出番なのに... 終わってるようなので私は
こいつを処分して帰ります』

神がそういうと東を連れてどこかへ消えてしまった。

俺は無限の剣製を解き美琴の元へ向かう。

「美琴！大丈夫か？」

「スウー スウー スウー」

「気持ちよさそうに寝てるな... しょうがない、俺が送ってってやるか」

「ピクッ... スウー スウー スウー」

「... 美琴... お前起きてるだろ？」

「... スウー スウー スウー」

「... 置いて帰ろ」

「ちょっ！！それは酷いんじゃない！？」

「ほら起きてた」

「うつ・・・べ、別にあんたにおぶってもらいたいと思ってるんじゃないんだから！！」

「はあ、今日だけだからな」

「・・・あ、ありがとう／／／」

「ん？なんかいったか？」

「べ、別になんでもないわよ」

「そうか、どこかやりたいところとかあるか？」

「・・・公園によつてくれない？お、お礼もしたいし／／／」

何故そこで顔を赤くする？

「・・・分かった」

俺の異形物との戦いは終わった

第六話 何この急展開！？

とある公園

俺はベンチを見つめ美琴と一緒に座っていた

「と、十夜。きよ、今日は助けてくれてありがとう。」

「別に良いって。それにあいつからのメッセージがなければ助けられなかったしな」

「それでもよー！私はあいつに恐怖を持ったわ。私の攻撃がまったく効かない。その上超電磁砲をあいつは撃ってきた。LEVEL1だった私が努力でここ（LEVEL5）まで上がってきた。その中で戦ってきたけどこんな屈辱的な相手は初めてだったわ。」

俺は黙って美琴の話を聞いている

「だって、私は私自身の技に負けたのよ。悔しい。悔しすぎるー！」
そういつて俺の胸に飛び込んでくる美琴。負けず嫌いだもんな。その気持ち分からないでもないが・・・

「でも、美琴は美琴だろ？自分の技に負けたからといってそれは相手がコピーしたものだ。たまたまあいつの方が技量が上だったただだよ。気にするな。俺は美琴は強いと思ってる」

「う、うわあああああん！！」

美琴は泣きだしてしまった。

「今は泣けばいいさ。強い敵が現れてもそのときに立ち向かうことができるればいい」

「うえええええん！！」

「もう大丈夫か？」

「う、うん／＼」

「そうか、じゃあ行くか」

俺が立とうとするが美琴にそれを止められる

「どうした？」

「お礼・・・してなかったでしょ？眼を瞑って」

「そんなのいい」眼を瞑って「・・・はい」

俺はおとなしく目を瞑る

眼を瞑ったと同時に唇に暖かいものが触れる

「ッ！！」

俺が眼を開けると顔を真つ赤にした美琴が唇を俺の唇に押し付けていた

「プハッ・・・は、初めてだったんだからちや、ちゃんと責任取リなさいよね！！／＼」

「ハアハア俺も初めてなんだが・・・それに責任って・・・」

「だ、だから私と付き合いなさいって言ってるのよ！！／＼／＼」
「なっおまつ！！・・・俺でいいのか？」

「よ、よくなかったら、こ、こんなことしないわよ！！／＼／＼」
「ああ」

俺は美琴を抱きしめる。美琴は抵抗しなかった。むしろ自分から抱

きしめてきた。

俺って美琴のことが好きだったんだなあ・・・

「これからずっと守っていくよ」

「・・・うん／＼／／」

第七話 木山の過去・・・

俺は今、とある一軒の家の前に来ていた。見た感じ出来たばかりの新築だ。実はこの家、俺がこの世界に来た日、建築会社に頼んで作って貰った家なのだ。作って貰った理由は寮が気に入らなかつたからだ。まあそんなわけで先ほど完成の電話が届いたのだ。

「なんか想像してたよりデカイな」

まあでかいことに困りはしないのだが・・・
これって家と言うより屋敷じゃねえ？

そう、何故か俺が買った家は屋敷と化していたのだ。

「まあいいか」

『十夜大変よ！！』

引越してから数日後、美琴から電話があつた
「どうしたんだ？美琴が慌てるなんて珍しいな」

『初春さんがレベルアップ事件の犯人に連れ去られちゃったのよ！！犯人は木山春生よ！！』

遂にここまでできたか

「分かった、今から行く」

pi

さてと、行くかな

シュン

シュン

「あちゃあ、遅かったかゝ場所が分かんなくて探していたといえ、数分しか経ってない筈だぞ？」

「あなた誰？一般人がこんなところで何してるの！」

「あん？なんだ警備員か・・・邪魔だからさっさと怪我人の治療にでも当たってくれねえか？」

「なっ！一般人が何「止めるじゃん」黄泉川さん！！」

「鉄装彼の言う通りにするじゃん。そうしないと巻き込まれて死ぬじゃん」

「おつ黄泉川先生。じゃあちよつとこの状況を打破してきますね」

「一般人に何が出来るんですか！！」

俺は眼鏡の女のすぐ横に超電磁砲を撃つ

「さつきからごちゃごちゃうるせえんだよ！！俺が一般人だ？じゃあお前等はなんだ？通りすがりの人物Aか？俺のことは黄泉川先生から聞くんだな」

「・・・彼はこの学園都市230万人の頂点LEVEL5のN

アルティメットキング

01・究極王こと神崎十夜。私たちが行っても足手まといになるだけじゃん」

「あ、あの子が学園都市NO・・・1！！」

「学生の脳を日々“開発”してるんだよ。それがどんなに危険なことか分かるだろう？」

「ああ、そうだな。確かに上層部は何かを隠している。だがお前は知らなくていい。たとえ昔にあのような惨劇が在ったとしても」

「誰だ！？」

「十夜？」

「知らなくていい。だがこの学園都市には表と裏の顔が有るとだけ言っておこう」

「神崎十夜。LEVEL5のNO1か。しかしいくら君でも私のように複数の能力を同時に使うのとは戦ったこと無いだろう？」

「木山が風の刃を放ってくる。その後ろに追撃のため岩が飛んでくる

「所がどっこい・・・もしも俺が多重能力デュアルスキルの持ち主だったら？」

「何！？」

俺は超電磁砲を撃つ

「残念だったな。相手が悪すぎた」

すると後ろに空き缶が現れる

「終わりだな」

これは・・・グラビトンじけん虚空爆破事件の奴か！？

ドガアアーン！

煙が晴れると瓦礫の下に埋もれた俺がいた

「・・・もつと手こずると思ったが・・・こんなものかLEVEL5。怨んでもらって構わんよ・・・っは！！何故お前が！」

木山が振り返るとそこにはピンピンした俺がいた。

「俺が自ら出て行くとも思ったか？。あれは俺の人形だ。レプリカ」

瓦礫の下に埋もれてた俺はドロドロに溶け土に戻る

「くっ！！……はっ！！」

「っーかまーえた」

木山は体を動かそうとするが動かないことに気づく

木山の腰には手を回した美琴の姿があった

「零距离からの電撃。あそこにいる十夜には効かなかったんだけど、いくらなんでもあんなトンでも能力は持ってないわよねえ？」

ドゴゴオ

「遅い！！」

ビリリビリリリリッ！！！！！！！！！！

「ウアアアアアアアア！！」

ガタッ

「ふう、一応手加減はしておいたから……はっ！！」

始まったか……美琴は今、木山の過去を見ているのだろう。

俺は一度見たこと有るから見てないけどね

「何？頭の中に直接……これは……木山春生の記憶？……あたしと木山の間に電気を回路にした回線がつながって……！！」

カタン ドドン

「へっ……いまのは……」

「木山春生の過去だ。」

「見られた……のか？……うう！」

「なんで……なんであんなこと！！」

「あれは表向きA I M拡散力場を制御するための実験とされていた・
・が、実際は暴走能力の法則解析用誘爆実験だ」

「はっ？」

「A I M拡散力場を刺激して暴走の条件を知るのが本当の目的だったというわけさ」

「じゃあ！！」

「暴走は意図的に仕組まれていたのさ。もっとも気づいたのは後になってからだがね」

「人体……実験……」

「美琴・・・これが今お前のいる学園都市の裏の顔だ。これは多分上層部の命令でやらされたものだろう」

「その通りだ。あの子たちは今まで一度も目覚めること無く、今も尚眠り続けている！！私たちはあの子たちを使い捨ての実験動物にしたんだ！！」

「でも・・・そんなことがあったんならアンチスキルに通報して！！」

「23回」

「はっ？」

「あの子たちの回復手段を探るため。そして事故の原因を究明するシミュレーションを行うために樹形図ツリーダイアグラムの設計者の使用を申請した回数だ！樹形図ツリーダイアグラムの設計者の演算能力を持つてすればあの子たちを助けられる筈だった。もう一度、太陽の下を走らせてやる事も出来ただろう。だが却下された！！23回とも全て！！」

「えっ？」

「総括理事会がグルなんだ！！アンチスキルが動くわけが無い」

「だからってこんなやり方！！」

「君に何が分かる！！あの子たちを救うためなら私はなんだってする！！この町の全てを敵に回しても止める訳にはいかないんだ！！ウツ！ガアア！クアアアアア！！」

「ちよつと・・・」

突然木山が苦しみ始める。

来るか・・・

「ネットワークの・・・暴走・・・！？これは・・・」

「はああ！？」

「近づくな美琴！！」

「えっ？」

「今出て来るぞ・・・」

木山の体から白い何かが飛び出し、だんだんと形どって行く

「はっ・・・」

「なに・・・あれ・・・？」

「胎児？」

キヨエエエエエエエエエエエエエエエエ！！

第八話 AIMバースト

「胎児……？」

「胎児？突然異変？こんな能力……聞いたこと……」

「危ない！」

俺は障壁を張り、美琴と木山を抱きかかえる

「クッ！はあああ！！！」

「止めろ美琴！！」

俺の制止を聞かずに電撃を放つ美琴
ビリビリビリビリ

しかし胎児の怪我はすぐに治ってしまう。

「ええええ！！はっ！！」

それどころか徐々に大きくなっている

「アイツはAIMバースト。AIM拡散力場で出来た怪物だ。」

AIMバーストはこちらに顔を向け氷の矢を放ってくる

「ひとまず逃げるぞ!!」

「わ、わかった!!」

「御坂さん!!」

「初春さん?何で!？」

「チツ、分子分解、原子として拡散」

氷の矢は原子に変換され跡形も無く消える

「初春さん大丈夫!？」

「あつ、はい。あの・・・」

「駄目じゃない!!こんなところに降りてきちゃ!!」

「お前もだよ美琴」

俺はひとまず美琴の頭に拳骨を落とす

ゴチン

「いつ　!!何するのよ!!」

「美琴も女の子なんだから、木山連れて初春と一緒に隠れてろ」

「でもそれじゃ!!・・・追ってこない?ただ闇雲に暴れ回ってるだけの?」

「まるで・・・何かに苦しんでるみたい・・・」

「うつ・・・うつ・・・」

「木山!!」

ドドドドドドドドド

銃声の上から聞こえる

「くそっ!!あの馬鹿共がアイツは攻撃を吸収するって言うのに・・・」

「はっ・・・はっはっはっは」

「何がおかしいの!？」

「すごいな・・・まさか、あんな化け物が生まれるとは・・・学会に発表すれば表彰物だ。もはやネットワークは私の手を離れ、あの子たちを取り戻す事も回復させる事も叶わなくなっただか・・・おし

まいだな」

「諦めないでください!!」

「そうだぞ。ここで諦めたら何もかも終わりだ。それに子供たちを助ける方法なんて他にもいろいろある。」

「それよりあれはなんなのよ!!」

「あれは・・・AIM拡散力場の集合体だ。簡単に言えば1万人の子供たちの思念の集合体だ」

「クキヤアアアアア!!」

「なんか・・・可愛そう・・・」

「どうすればあれを止めることが出来るの？」

「それをあたしに聞くのかい？今のあたしが何を言っても君たちはし・・・ん？」

初春が木山の目の前に手を出していた

「私の手錠、木山先生がはずしてくれたんですよ？」

「え？」

「ふん、ただの気まぐれさ。まさかそんなことで私を信用するのか？」

「それに・・・子供たちを助けるのに木山先生が嘘つくわけありません。信じます」

「聞いてたの？」

「はいっ」

「まったく・・・AIMバーストはレベルアップのネットワークが生み出した怪物だ。ネットワークを破壊すれば止められるかもしれない。」

「・・・っは！レベルアップの治療プログラム!!」

「試してみる価値はあるはずだ」

「アイツはわた「俺が何とかするから美琴はサポートを頼むよ？初春はその間にそれを持って警備員アンチスキルの所へ」・・・分かったわ」

「分かりました」

「よろしい。じゃあ開始だ」

タッタッタッタ

「俺たちも行くぞ!!」

「ええ!!」

「やべえ警備員が!!美琴頼む!!」
アンチスキル

「わかったわ!」

ヒュードン

「何ボやつとしてるのよ!!死んでも知らないわよ!!」

「あなた誰?一般人がこんなところで何してるの!!」

「またアンタか・・・怪我したくなかったらさっさと消えろ。」

「な、NO・・・1・・・」

怪物の触手が美琴たちに迫ってくる

「くっ!!」

美琴は警備員アンチスキルを抱え、何とか避ける

「ハッ!!」

ビリリリリ

「早く逃げなさい!!アイツはこっちが攻撃しなければ攻撃して来ないんだから!!」

「それでも・・・撤退するわけにはいかないじゃん」

そういつて黄泉川先生は指をさす

「あれがなんだか分かるか?原子力実験炉じゃん」

「えっ!?マジ?」

「なにやってのあの子!?!」

「あれは!!木山の人質になっていた!!」

「彼女なら大丈夫だから。美琴お前は怪物に行け。俺は黄泉川先生の怪我を治してから行く」

「分かったわ」

「済まない少年」

「気にしないでください。ベホマ」

「すごい・・・怪我が見る見るうちに治っていくじゃん」

「これが・・・学園都市最強の力」

「二人はあの女の子を守ってあげて。怪物は絶対食い止める!!」

「わかったじゃん」

「ヤバッ!!」

「闇の盾!!」
ブラックホール

AIMバーストの攻撃は闇の盾に飲まれる
ブラックホール

「十夜!!」

「大丈夫か美琴？」

「ええ、それよりこいつを!!」

「分かってる!!」

ドゴン

「あっ!!」

「やべっ!!」

もう一発が来ようとするが・・・

ビリビリリ!

「私たちを無視してんじゃないわよ!!うあああああ!!」

美琴は砂鉄で剣を作り出し、攻防を繰り返している。
エンベラータイム

俺は時間操作で細胞を復活できないくらい確実に潰している。そのためAIMバーストは徐々に縮んでいく

「ほんとっ!きりが無いわね!!ったく、なんだって原子力の施設なんかに向かつてるのよ!!怪獣映画かっていうの!!」
キュイイイン

胎児が氷の矢を放ってくる
ブラックホール

「闇の盾!!」

氷の矢は吸収されていく

「こんのっ!!うぐうっ!!」

「どうやら美琴が足をとられたらしい」

俺は刀を創造する

「一刀両断、真・斬鉄閃!!」

美琴にくつついていた触手をとる

「くっ!! いっ!! ひいっ!!」

美琴は涙目で怪物をにらみ付ける

「大丈夫か!?!?! 美琴下がってる。それと今、涙姿に一瞬萌えた」

「なっ! こ、こんな時になにいつてんのよ!! / / / /」

「ふむ、美琴の可愛い姿も見れたことだし、俺もがんばるか……」

「

千年斬!!

錠斬!!

斬閃刹!!

俺は連続で剣技を繰り出す

胎児は切り刻まれるがすぐに回復してしまう

すると奇妙な音楽が流れ始める

~~~~~

「初春はやったか!!」

「十夜どいて!!」

ビリビリビリ

美琴が胎児に電撃を食らわせる

「攻撃が……効いてる!!」

「よしっ!! 一気にいくぞ」

「分かったわ!!」

「はあああああ」

ザシュッザシュッ

ビリビリビリビリ

キョエエエエエエエエエエエ!!

胎児は赤くなりながらもがき苦しみ倒れる

「はあ間一髪って奴？」

「気を抜くな！！まだ終わっていない！！」

「ちよっ何でこんなところに！！？」

「美琴、前を見る」

「えっ？なっ！！そんな！！」

目の前には胎児が起きあがろうとしている姿があった

「ネットワークの破壊には成功してもあれはA I M拡散力場が生んだ10、000人の思念の塊！！普通の生物の常識は通用しない！！」

「話が違っじゃない！！だったらどうしろって！？」

「核が、力場を固定させている核のようなものがどこかにある筈だ。それを破壊すれば！！」

「・・・なのかな？」

「佐天さん！？」

「LEVEL0って欠陥品？」

「だと思ってやがる」

「もう許せない！！」

「駄目だって・・・」

「LEVEL0って・・・」

「これは・・・」

「毎日が・・・どれだけ面白い・・・」

「あんたは分からないでしょうけど」

「その期待が重い時もあるんですよ。」

「下がって。巻き込まれるわよ」

「構うものか。私にはあれを生み出した責任が」

「あんたが良くてもアンタの教え子たちはどうすんの？回復した時あの子たちが見たいのはあなたの顔じゃないの？こんなやりかたしないなら、あたしも協力する。そう簡単に諦めないで、あとね・・・」

「ぐうう！！」



ビリビリビリビリ

飛んできた触手は美琴に消される

「あいつに巻き込まれるんじゃない。私が巻き込んだじゃうって言うてんのよ!!」

美琴は胎児に電撃を流す。

「ゴメンね・・・」

美琴が呟いた瞬間、砂鉄が地面から舞い上がる

『誰だって・・・』

『能力者に・・・』

『なりたかった』

「気づいてあげられなくて」

『しょうがないよね』

『あたしには何にも・・・』

美琴は胎児が放ってくる氷の矢を砂鉄で破壊する

「がんばりたかったんだよね・・・」

『何の力も無い自分がいやで、でもどうしても憧れは捨てられなくて・・・』

「うん・・・でもさだったらもう一度がんばってみよう?」

ピンッ

美琴はコインをはじく

「こんなところでよくよしてないで、自分で自分に嘘つかないで・・・もう一度!!」

美琴は超電磁砲レールガンを胎児に向かって撃つ

ジュウウウウンドガアアアアアアン!!

胎児の体を核ごと貫く

「これが・・・LEVEL5?」

胎児は徐々に消滅していく

「結局、いいところ取りかよ」

「へへっゴメンね」

「まあいいか。終わったんだし」

胎児は完全に消滅する

「ははは・・・はふう」

ドテッ

「ど・・・どうしたんだ？」

木山・・・それを聞いてやるなよ・・・

「電池切れ・・・文字通りの意味で」

「はあ、しょうがないな」

「キャッ」

俺は美琴をお姫様抱っこする

「さてと木山はどうするんだ？美琴は電池切れで動けないし。俺は美琴を抱っこしてて、手が使えない。今の俺たちにお前を捕まえる手は無いぞ？」

「いや、ネットワークを失った今私に警備員アンチスキルから逃れるすべは無いからな」

「美琴さーん、十夜さーん」

「おっ初春！こっちだ！！」

「あのっ、そのっ・・・どうするの？子供たちのこと」

「ふっ・・・もちろん諦めるつもりは無い。もう一度やり直すさ。

刑務所だろうと世界の果てだろうと。私の頭脳はここにあるのだから。ただし、今後も手段を選ぶつもりは無い、気に入らなければその時はまた邪魔しに来たまえ」

ヒュードンドン

ブウウウン

「やれやれ、懲りない先生だわ」

キュイイイン

ん？今度はなんだ？

「お姉さまー！！」

「ああ、黒子」

「…………お姉さま？何で十夜様にお姫様抱っこを？…………まさか！！黒子は心配して来ましたのに！！ずっと心を痛めてましたのよ！！それなのに十夜様とこんな関係になつてたとは！！何時からですよ！？」

「…………美琴、お前話して無かつたのか？」

「えっと…………ゴメン」

「はあ、確か四日前くらいに美琴に告白されたんだけかな？」

「ちよつ！十夜！！！！」

「お、お姉さまから…………でも、十夜様なら…………」

「ね、ねえ十夜、そ、その…………わ、私、が、がんばったから、ご褒美！！！！」

えつと、なんで目を瞑つて口をまえに突き出してるのでしょうか？

「ま、まさか、お姉さまが自ら唇を許すとは…………」

唇？唇つてまさか…………

「…………ここですか？」

「う、うん／＼／＼」

「しょうがねえな…………チュッ」

俺は自分の唇を美琴の唇に重ねる

「…………チュッ…………チュパア」

「ムチュッ…………チュパッ…………」

なんで、そんな悲しい顔をするんですか？美琴さん

「…………また後でな」

「べ、別にと、十夜のキスなんて！！！！」

「俺のキスなんて？」

なんか今、俺の仲で何かがはじけた

「う、つうう…………」

「ゴメンゴメン」

「そう言えばさきほど病院から連絡がありまして、レベルアップ！使用者が次々に意識を取り戻していると」

「えっ？」

「あなたのおかげですわ、初春」

## 第九話 吸血殺し（ディープブラッド）

俺は美琴たちを寮まで送った後、家へ向かっている。

時刻はPM8:10

俺は帰っている途中、人払いの刻印の中に入った感じがした。

すると、道路の真ん中で当麻が女と戦ってぼろくそに負けている  
・・・神裂火織じゃねえのか！？あれは！！

よし、参戦しよう。このままじゃ当麻があまりにも可愛そうだ。

七閃

ブラックホール

「闇の盾」

ブラックホール

七閃は闇の盾に吸い込まれていく

「なっ！誰ですか！！」

「誰か？と聞かれて答える奴がいるか？」

「とう・・・や・・・」

「あなたは・・・ステイルを倒した！！」

「本当、イヤになっちゃうよね。午前中から夕方に掛けて怪物を倒してたと思ったら、夜は魔術師と来たもんだ。疲れるほか無い。だが、それ以上に面白いね。」

「あなたは何故魔術師のことを！！」

「さあね？天草式の聖人、神裂火織さん？」

「何故私の名前を！！」

「どうでもいいだろ？やらないのか？早く来いよ。来ないならこっ

ちからいくぜ？」

「くっ！！」

七閃！！

俺は刀を創造する

「神鳴流奥義！！真・雷鳴剣！！」

「クッ！！ククウウウガハッ！！」

「弱いな。それっぽっちか？」

「くっ・・・使いたくありませんでしたが・・・仕方ありません救われぬ者に救いの手を（Salver000）！！」

「なら、本気で行かせてもらう！！」

俺は刀を地面に捨てる。地面に落ちた刀はやがて土に戻って行った。

「闇の中の光、死の中の生、消えうせる裁きの光。闇光<sup>ダイクライト</sup>！！」

ズドドドドドドドドドドン！！

俺が言葉を唱えた瞬間、地面が抉れる。

あたる寸前に神裂はステイルに助けられていた。

二人の気配が消えた瞬間、人が見え始める。

神崎十夜は暗闇に姿を消した

四日後当麻が病院に運ばれたという電話があった。  
どうやらインデックスの救出には成功したようだ。

「おっす当麻。大丈夫か？」

「えっと・・・十夜。大丈夫だ」

「そうか。そう言えばさっきインデックスにあったんだけど、怒ってたぞ？何かしたのか？」

「ああ、ちょっと弄ったら怒っちゃって」  
そんな他愛の無い話が病室で繰り出されていたとか

数日後・・・

「うん？ どしたんカミヤん、ぽけーつとして。なんか他人行儀な視線やなあ、もしかして夏の暑さにやられて記憶でも飛んでんのかな？」

「んな……っ!？」

ん？あれは・・・

「おい、青、義妹に手を出そうとしてるシスコンでペドな土御門、当麻、インデックス!! 何してるんだ？」

「ちよつとそれは無いぜよ神やん」

「本当のことだろうが」

周りの視線が一気に土御門に集まる

「それで、何してたんだ？」

「いやゝ上やんがこれからマクロナルハンバーガーを奢ってくれるらしくてなゝそうや!! 神やんも一緒にどうや？」

「それはいい考えだにやー」

「ゴチになります、上条さん!!」

「……はあ不幸だ」

マクロナルハンバーガー

「とうまーこつちだよゝ!!」

「おーう。よくあいて、えっ!？」  
「へへっ」

テーブルに顔を伏せていた女の子がうめき声を上げる

「うう・・・」

「ど、どうかした？」

「く・・・」

「く?どこか苦しいの？」

「食い倒れた・・・」

「・・・」

「「「最初はグーじゃんけんホイ!じゃんけんホイ」」」

「「「よっしゃー!!」」」

「ん、ぬううう」

「あの・・・食い倒れたって・・・何？」

ズズズ

うん、お茶が美味しい

「一個百円のハンバーガー・・・お徳用の無料券クーポンがたくさんあったから・・・とりあえず30個ほど頼んで見たり・・・」

「!?!?!お徳すぎるだろうが馬鹿」

ズーン

「当麻・・・それは言っちゃいけないだろう」

でもなんかこの声聞いたことあるんだよな・・・

「ああ、いや、違うんだ。これは、その・・・」

「やけぐい」

「はっ？」

「帰りの電車賃六百円」

「それで？」

「全財産五百円」

「その心は？」

「買いすぎ、無計画」

「うぬぬ」



「だから・・・やけぐい」

「そもそもそれ以前に電車賃くらい誰かに借りれないのか？」

「おお！！それはいい案！！」

女の子が顔を上げてやっと思ついた。姫神じゃん！！

「おおー」

「別嬪さんだぜ！」

「パシャット」

カシヤツカシヤツ

「やめい、俺まで同類と見られるだろうが！」

「・・・・・・・・」

「な、何故こつちを見る・・・つか期待の眼差し向けるんじゃないやねえ！！！」

「百円、無理？」

「はあ？無理貸せないものは貸せない」

「ちつたかが百円も貸せないなんて」

「たかが百円持つてないのは何処の馬鹿だオイ！！」

「こんな美人の巫女さん前に素の返事。成長したニヤー上やん」

「美人？美人に免じて後百円」

「うつせ、黙れ！！」

「はあ、当麻お前の方がうるせえ」

俺はポケットから財布を取り出す

「うおい！！なんだその分厚い財布は！！」

「ん？普通の財布だろ？」

「いや、普通じゃねえよ！！」

「さすがEVEの金持ちだニヤー」

「そうでもないと思うぞ？財布の中に・・・150万しか入ってないし」

「ひゃ、百五十万・・・不幸だ・・・」

「それより・・・ありゃ百円無いわ五百円やる。あと返さなくていいぞ？」

「それにしてもこの町の巫女さんは顔も売るんだ」

「私。巫女さんではない」

「はっ？」

「どこから見たって完璧な巫女さんだろ」

「私、魔法使い」

「「「ええっ？」」「」」

ドンー！！

「魔法使い？魔法使いって何？曖昧なこと言っでないで専門と学派と結社名を名乗るんだよ。お馬鹿」

「ん？」

「大体そんな格好するなら、せめて東洋占星術師くらいの嘘<sup>ホラ</sup>を吹かなきゃ駄目なんだよ！！」

「うーんじゃあソレ」

「キイイイ！！」

「（インデックス、魔法使いと魔術師はまったくの別物だぞ？）俺は念話で話しかける。土御門にも聞こえるようにしておく。」

「その巫女さんが巫女さん改め魔法使いなのは良く分かったからちよつと黙ってて」

「うぬつ、当麻、私の時とは態度が明らかに違うんだよ」

「えっ？本人がそう言いたいんだからいいじゃねえか」

「私の時は本物って証明するのに服まで脱がされたのに」

「なにっ！！当麻はやっぱりペドだったのか！！」

「うらやまゲフンゲフンけしからんぜよ上や、うっ？」

後ろに黒服の男たちが歩いてきた

「誰ぜよ、このおっちゃんたち」

「何時の間に？」

スッ

「今帰るところ」

「こいつらお前の知り合いか？」

「塾の先生」

「塾の・・・先生？」

それだけ言って姫神は黒服の男と行ってしまった。

「けれど、何で塾の先生が生徒の面倒みんねんな」

「さあな？」

俺は当麻たちと別れて数時間後に三沢塾の前に来ていた。

向こうから二人の影が近づいてくる

「よう、遅かったじゃないか。ステイル、当麻」

「十夜！？」

「何故君がここに！？」

「そりゃあ姫神を助けに来たからに決まってるだろう？」

「姫神？」

そうか、こいつは知らなかったな

「昼間あった巫女さんの名前だ。そして吸血殺し（ディープブラッド）だ」

「君が何故そのことを？」

「それを俺に聞くのか？ 敢えて言うなら俺は全て知ってる」

俺はそう言いながら当麻を見る

「さて、行きますか」

「別に怪しくは見えないけど・・・」

「怪しくは見えないね」

「そうだな怪しくは見えない」

「あん？」

「当麻あそこの柱を görmろ」

「えっ？・・・！！人が死んでる！？何故周りは気づかないんだ！？」

「なら周りの誰でも良いから話しかけて見るよ」

「お、おい！！・・・えっ？」

「表と裏だねここは」

「はっ？」

「コインの表の住人である生徒たちはコインの裏の住人僕たち外敵に気づくことは出来ない。僕たちも彼等に一切干渉することが出来ない」

「まあそんな所。ちなみに俺はあっちの世界にも干渉することが出来るぞ？」

「君は・・・出来そうだね・・・」

「なんだその間は？」

「当麻が床に手を触れようとする

「無駄だよ、魔術の核を潰さ無い限りはね。まあ核自体は建物の外にあるんだろうけど。・・・戦う理由が増えたみたいだ」

「なあエレベーターに乗っててもよかったんじゃないか？」

「コインの裏にいる僕たちにコインの表にあるボタンを押すことは出来ない」

「ふん、じゃあ電話はどうなんだろう」

「はっ？」

「あーいや、コインの裏から電話してコインの表に通じるのかなあ  
つと」

「ふん、試して見ればいい」

「ん、そうする」

「くだらねえ」

RIRIRIRIRIR

『ひやつ、ひゃい！ こちあのこちらIndex-Libror

じゃないつ、違うです、こちらカミジョーです、あのはい！』

「お前・・・電話に出るのって初めてか？」

『ひゃいつ！？ って、あれ？この声とうまだ。わざわざ電話なんて大袈裟で、仰々しく、めんどくさくて、心臓に悪いものなんか使ってどうしたの？』

「うーん、あーいや、別に？」

『あつ冷蔵庫の中にダザニアが二つあったけどもしかして』

「くったんかい！！」

『ああ、冷蔵庫の中にプリンがあつたけど・・・』

「なぐに？まさか、食ったんかい！？食ったんだな！！食ったんだろ！！ってまあいい」

『えっ？』

「とにかく電話が通じるんならいいんだ。切るぞ？」

『えっ？』

「あ、そうそう。知ってるかインデックス、電話って一分話すと一日寿命が減るらしいぞ？」

『うにやああああ』

プツッ

「またしょうも無い事を」

「ハハハ・・・何だよ？」

ステイルが当麻のことを凝視している

「いや別に？ただ、少し緊張感に欠けると思ってね。まったくここは戦場だというのに呑気に女の子となんか会話しちゃってその慢心が己の身を滅ぼすなら構わないというか僕としてはバンバンザイだけどこっちの足まで引っ張ってもらっちゃ困る」

「妬いてるの？」

「プツ！」

「んぐっ！間違えるなよ？恋愛対象としてあの子を見ているわけじゃない」

「じゃあ熱愛対象か？」

「君はいちいちやちゃを入れないでくれ！！君たちだって知っているだろう？彼女は今まで一年周期で全ての記憶を消さなければ生きていけない体だった。今、君が立っている位置には、かつて様々な人がいた。父親や兄弟や親友や先生。みな様々なものになろうとしたんだ。かつて僕は失敗し、そして君は成功した。それだけさ。僕等の違いはたったそれだけだよ」

俺たちは食堂に入った。

すると周りにいた人間の動きが止まる

「まずいかな」

「そうだな」

「はっ？何が？」

「呆けるな。コインの表の住人にコインの裏の住人の僕たちが見えるわけが無い」

「熾天の翼は輝く光」

「輝く光は罪を暴く純白」

『純白は浄化の証、証は行動の結果』

『結果は未来、未来は時間、時間は一律』

「自動の警報か・・・」

「はっ？」

「本来コインの表にいる生徒たちをコインの裏にたたせているんだろっ」

「あーあ。まあがんばれ」

俺は自分の影に沈んで行く

「お、おい。僕たちを置いていくのかい？」

「悪い、一人用だわ」

嘘です何人でも入れます

「じゃ」

「逃げるなああ！！不幸だああ！！」

「ここは・・・」

「君がいると言うことは日本には違いなidarouっ」

「んん？」

「なにか重大なことを忘れてるような・・・違うかい？」

「うん」

「なんだ？そんなにアウレオルスⅡイザードの魔術は強かったか？」

「十夜？」

「何故君が」

「三沢塾、黄金鍊金（アルスⅡマグナ）、姫神秋沙、吸血殺し。ここまで言って思い出せなかったら相当の馬鹿だぞ？」

「????」

「はあ、当麻、右手で頭に触れる」

「こ、こうか？・・・ッ！！サンキュ十夜。ステイル今の疑問の答えを全て教えてやるから目を閉じて舌を出せ、ベーって」

「何故僕がこんなことを・・・」

「祝　よくも人様を一囀に使って逃げ延びやがったな記念ッ！」

「……は？」

直後、当麻の拳がステイルのあごに突き刺さる。見事なアッパーカットだ。

ステイルは記憶を取り戻したと同時に下を噛み地面を転げ回っていた

「十三騎士団の生き残りか・・・いや、正真正銘のグレゴリオの聖歌隊だよ」

「えっ？」

「はあめんどい。後頼む。」

そう言っただけはステイルの陰に潜んだ

「不幸だああああ！！」



「姫神！……インデックス！！」

「まて当麻」

「十夜！？お前何処から？」

「僕の影だよ……君は相当なめんどくさがりやのようだね？」

「あれ？ばれてた？」

「当たり前だ。堂々と前に出てこられたら嫌でも気づく」

でも、出てきたのは本体じゃなく俺の偽物だ。<sup>レプリカ</sup>

「残念だが君に目的を成し遂げることは出来ないよ？」

「フン、今更ながら我が真意に気づいたか。ならばその体制を前に己が無力を嘆き、嫉妬に身を焦がすがよい」

「あー、鬱陶しいんだよ！ステイルもステイルだ、さっさと言ってやれよ。」

「ふう、一応聞くが君はインデックスを吸血鬼にするつもりなんだね？」

「インデックスを？」

「ああ、その通りさ」

「ではもし、人間にはその効果が向こうだとしたら？」

「禁書目録をインデックスから外すまでよ。必然。この子が救われることに变りは無い。あの子は最後に告げた、決して忘れたくないと。教えを破ろうがこのまま死のうが、胸に抱えた思い出を決して忘れたくないと。指先一本動かせぬ体で、溢れる涙にも気づかずに

笑いながら告げたのだ」

「どうあっても、自分の考えは曲げない、か。ほら言ってやれよ今代のパートナー。致命的な欠陥を抱えた目の前の錬金術師に」

「……おまえ、一体何時の話をしているんだよ？」

「何？」

「そういうとき、インデックスはとっくに救われているんだ」



「くっ」

「うっ」

「馬鹿だろ、お前等。なに寝てんだ？」

当麻とステイルが地面に倒れ伏す中、俺だけはピンピンしていた。

「何故聞かない！！まあいい。この屈辱、貴様等の死であがなってもらう！！」

「待って！！」

俺等の前に姫神が立ち塞がる

「ひめがみ・・・やめる・・・」

「分かる私あなたの気持ち」

「そいつはもう・・・」

「でも違う、あなたは」

「もう・・・お前を・・・」

「知ってる私、本当は・・・本当のあなたは・・・」

「死ね」

「姫神ー！！」

当麻は幻想殺しで体に触れ、魔術を解き姫神を抱きかかえる

「姫神！！」

「はっはっは吸血殺しなど最早無用。悠然。約束は守った。これでその女も己が血の因果から解き放たれたであろっ。はっはっは」

「どうかね？」

「何？」

「うはっおほっおほっ」

「わ、我が黄金練成を打ち消しただど！？ありえん。確かに姫神秋沙の死は確定した。その右手聖域の秘術でも内包するか！！」

「ごちゃごちゃうつせえ、テメエが何でも思い道理に出来るって言なら。まずはそのふざけた幻想をブチ殺す！！」

「はあ床冷てえ」

「助けて欲しいか？」

「出来るのならね」

「よし助けてやろう。戦いが終わったらな」

「だろうね」

「窒息死」

当麻はすぐに右手を首に持つてくる

「感電死」

今度は右手を前に

「圧殺」

次は上から降って来る車に

「なるほど。真説その右手、私の黄金練成も例の外に洩れず打ち消すらしい。ならばこそ、右手で触れられぬ攻撃なら打ち消す事は不可能なのだな？」

「なっ」

「銃をこの手に。弾丸は魔弾。用途は射出。数は一つで十二分。」

アウレオルスの右手に銃が握られる

「人間の動体視力を超える速度にて、射出を開始せよ」

ズドン

後ろの壁は銃撃で崩れている

「簡単には殺さん。私を楽しませろ」

先の手順を量産せよ。一〇の暗器銃にて連続射出の用意」

ドドドドドドドドド

「グハッ！！」

当麻が後ろに吹き飛ばされる

「右手に剣を左手に盾を令、敵に等しき死を！！死す力」  
キル・ザ・パワー

俺が呪文を言い終えると同時にアウレオルスに黒い物体が飛んでいく

「ふん、自らの主の所へ戻り、主を貫かんとする」

黒い物体はそこで動きを停止し、俺に刺さった。臓器を貫いていく

「ガッ・・・ハッ」

俺は地面に倒れ伏す

俺の周りは血の海になっている

「と、とうや？十夜ああああ！！！！！！！！」

この時学園都市第一位LEVEL5“神崎十夜”は死んだ

私、上条当麻はアウレオルスを倒した後、十夜の死体をスタイルと共に運び保管した。

そして夜は明け、学園都市が人で賑わい始める時間

俺はビリビリ中学生こと御坂美琴と待ち合わせをしている

「なによ。話したいことって何？」

「………神崎十夜が………死んだ。」

「えっ？………」

美琴は訳が分からなかった。しかし十夜が死んだと言っ言葉だけが脳裏に響いていた

「はっはは、つまらない冗談ね。十夜よ。あの十夜が死ぬわけ無いじゃない！！」

美琴は知らず知らずの内に大声で叫んでいた。けれど美琴は気づいていた。十夜が死んだと言うことが嘘ではなく本当だと言うことに。ついには涙が溢れ出してくる

「ねえ．．．嘘って言ってよお．．．」

「．．．．．御坂．．．これから葬儀がある。待っててやるから．．．準備してこい」

「．．．．．」

葬儀にはたくさんの人が来ていた。十夜の知り合い、高校の先生、高校の友人、さらにはステイルや神裂も来ていた。

「御坂さん．．．」

「お姉さま．．．」

「御坂さん．．．」

「．．．．．」

御坂の近くには御坂と同じくらいの年の子が三人くらいいる。

青髪ピアスや土御門元春、小萌先生、姫神、インデックス、ステイル、神裂、俺は順に列に並ぶ。皆一言ずつ喋り、花を添えて行く。

そして俺の番になった

「．．．．．なんで死んじゃったんだよ。お前が死んだせいで悲しむ奴がこんなにもいるって言うのによお．．．」

俺の目は涙で潤んでいた

途中、御坂が墓から離れず、周りにいた三人が何とか慰め、離れさせたと言う事以外ハプニングは無く葬儀は終了した。



## 第十話 ピンチに現れる正義（ヒーロー）

俺、土御門元春は神崎十夜の葬儀が終わり、一人町を歩いていた。すると、いきなり人の気配が消えた。隣にいた人もいつの間にか消えていた。

『待てよ、土御門元春』

「誰だ!!」

『動くなよ?』

声は後ろから聞こえた。

土御門元春は思いつき振り向く。しかし、そこには人以前に人の気配も無かった。

「何処だ!!」

土御門元春が叫んだ瞬間、首に冷たい感触を感じた。

「くっ……何時の間に!!」

『……グループのリーダー土御門元春に会いに来たといえは分かるか?』

「なっ!!お前!!」

既に首に冷たい感触は無く、土御門元春は振り向いた。そこにいたのは入る筈の無い人物だった。



「神崎・・・十夜!!」

「よう義妹に手を出そうとしているシスコンでペドな土御門元春。昨日ぶり」

「お前、さつき葬儀が!!」

「ああ、あれは俺の偽物。<sup>レプリカ</sup>ただの人形。」

「・・・何時から知ってたんだ？俺がグループのリーダーだって」

「最初からだ。さて統括理事長に合わせてもらいたい。一人で乗り込めるが一応グループに属した方がやりやすそうだな」

「断る・・・と言いたいところだけど、神崎十夜は死んだんだ。ならばLEVEL5と同姓同名の奴が入ってきたところで仕事に支障は無い」

「世話になる」

「改めてようこそ『グループ』へ」

「十夜さんの葬儀が行われてから一週間。お姉さまの状態は変わりませんの」

「そうですか・・・御坂さんに初めて出来た心の許せる人だったんでしょうね」

「・・・それにしても、あの十夜さんが死ぬなんて今でも信じられませんわ。犯人は能力者のようですけど・・・」

「奇襲を掛けられたんじゃないですか？」

「それでも十夜さんはご自身の体に僅かなバリアを張っているのです。そう易々とやられるとは思いませんの」

「考えれば考えるほど謎が深まっていきますね」

「・・・・・・・・・・十夜・・・・・・・・」

御坂美琴は一人、神崎十夜の墓の前まで来ていた。

「私、また事件に巻き込まれてるんだよ？見ていてくれる？今度は私自身のクローンが実験のために使われてるんだって。これって酷くない？殺されるただけに生まれてきた人間だって。そんな人が居て言い分けないよね。答えてよ・・・・・・・・・・十夜・・・・・・・・」

御坂美琴は花を添えてその場を離れた

「なあ、土御門・・・・・・・・暇」

「神やんは何時もそうなんだにゃー」

「町に出てきていいか？」

「変装すればいいにゃー」

「つたり前だろ？ここではれたら意味無いしな」

「うーん、なんだ？この開放感はめっちゃくちや気分がいいんですけど」

俺は伸びながら歩いてた。

「それにしても退屈だなあ」

「何をしているのですか？とミサ力は問います」

「あん？・・・」

俺終わったかな？何故御坂妹が？

「何をしているのですか？とミサ力は再度問います」

「ああ、ちよつとした開放感に浸りつつ、独り言を呟いていた」

「そうですか、とミサ力は素っ気なく返して見ます」

「そうか」

そんな事をしてっていると御坂妹が急に腕に抱きついてきた

「どうしたんだ？」

「何故かこうしたいとミサ力のDNAが語りかけてきます、とミサ力は素直に答えます」

「そっか」

「それにミサ力は今日消えるのでそれまでの思い出作りです、とミサ力は優越感に浸りながら付け加えます」

「そうか、今日・・・か・・・」

「それではミサ力にはこれからのスケジュールがありますので、とミサ力は説明します」

それだけ言っただけで御坂妹はどこかへ行ってしまった。

「一方通行！！」  
アクセラレータ

「あん？」

一方通行は空気を圧縮しながら振り向く

「動かないで」

「はん」

「・・・・・・・・・・・・・・・・める・・・・・・・・・・・・・・・・くつ・・・・・・・・やめる・・・

御坂・・・」

「ゴメン・・・・・・・・・・・・・・・・アンタは何一つ失うことなく皆で笑って皆で帰る事を願ってた。だけどそれは無理。だから・・・・・・・・ごめん。なんだかね、勝手なことかもしれないけどさ、それでも、それでも私はきつとアンタに生きて欲しいんだと思う」

「止めるおおおおおお！！」

ビチツバチバチバチバチバチ

「プラッ・・・・・・・・ズマッ・・・・・・・・？」

「風の向きを操り、一箇所に集めてる・・・・・・・・プラズマを形成するなんて・・・・・・・・」

「へっへっへっへ・・・・・・・・くつくつくく、いひひひひひ」

「（こんなの・・・・・・・・私の力じゃどうしようもない）」

「逃げる！！御坂！！」

「だめっ、ここで逃げたらあんたが・・・・・・・・十夜と同じ所へ行っちゃう！！・・・・・・・・・・・・・・・・私って馬鹿だよ。居ないと分かってても頼っちゃう・・・・・・・・十夜！！助けて！！」

「・・・・・・・・ふっ、しょうがねえな」

「えっ？」

そういつて物陰から出てきたのは紛れもない神崎十夜だった

あーあ、ちよつと爆発音が聞こえたから来て見たら一方通行と当麻が喧嘩してたよ

このまま原作どおり進めばいいのになーって思ってたなら

「十夜！！助けて！！」

だもんな。それに原作と違い御坂妹は力が使えなくなりコンテナによっかかってんだもんな。これじゃあ出るしかないでしょ

「・・・ふっ、しょうがねえな」

「えっ？」

「と・・・う・・・やなのか？」

「ああ、紛れも無い本物神崎十夜だ。まあ今はLEVEL5でも、学園都市第一位でもない、ただの神崎十夜だがな。もしも民間人が能力無しで一方通行を倒したら実験は無くなるのかなあ？」

「と・・・う・・・や・・・」

美琴は地面にへたり込んでいる。

「ああ、最強が最弱に負けたら意味が無いしな。だけどアイツに能力無しってのは・・・」

「当麻・・・ちよっとお前の力借りるわ」

「よ才、話はおわった力？」

「おう、律儀に待っていてくれるとはありがたいね」

「ケッ、ふざけンじゃねエぞ！！俺を無視スンじゃねエ！！」

「あつ、怒ってる」

よっつと、俺は体中に幻想殺しの力を加え、一方通行が撃ってくるプラズマを避けながら近づく

そしてすぐに目の前まで来る

「歯あ食いしばれ！！俺のパンチは当麻よりいてえぞ！！」

ドゴン

俺のパンチは見事、一方通行の溝に入り一方通行は崩れる。

そして俺は一方通行の意識を刈り取る

「はあ、これが一方通行の実力か・・・学園都市も弱くなったな・・・」

「十夜!!なんで!!」

やべっ

「美琴・・・また、な」

俺は影を使った転移でアジトへもどって行った

## 第十一話 盛夏祭

昨日、私たちを助けてくれたのは間違い無く十夜だった。

でも十夜は死んだ。火葬される瞬間も見た。そして骨も出てきた。

それなのに、私は十夜を昨日見た。

・・・私、十夜に依存しすぎてあの馬鹿に十夜を重ね合わせてたのかな？

でも、私は十夜が生きてるって信じたい！！

「どうしたんやろうな？夏休みの最中なんにワイ等を学校に集めるなんてな？」

ガヤガヤガヤ

「みな・・・ヒッグ・・・席に・・・ヒッグ・・・ついて・・・ください・・・ヒッグ」

「ど、どうしたんや？小萌センサー。小萌センサーを泣かしたのは何処のどいつや！！ワイがぶっ飛ばしたる！！」

「ヒッグ．．．敵いません（精神的な意味で）．．．ヒッグ」  
「そんなに強い奴（肉体的な意味で）なんか？」

「ええ．．．ヒッグ」

「青髪、俺等も加勢するぜよ。」

「きよ、きょうは．．．ヒッグ．．．転校生を．．．ヒッグ．．．紹介してもらったために来てもらいました．．．ヒッグ」  
ん？ちよつと待て転校生くらいで夏休みに集まるか普通？

「では．．．入ってきてください」

ガラガラガラ

『．．．えっ？』

ここに100人居たら100人が同じ反応をするであろう

「よう、皆久しぶりだな。」

「．．．十夜君は死んだんじゃ？」

「十夜．．．生きてたのか」

「んにゃ、死んでるぞ？足見えてみる無いだろう？」

『えっ？．．．でたあああああ！！』

「なんてね、ただの偏光マジックでした」

『えっ？．．．はあああああ！？』

「わりいわりい」

「てめえ心配してたんやで！！」

「そうぜよ、心配したんだニア」

「ははは、でも超能力者（LEVEL5）神崎十夜は死んだ。俺は無能力者（LEVEL0）神崎十夜だ。これからよろしく頼むぜ？みんな」

『おおおおお！！！！』



俺は学校を終え、空間移動をしようすると一枚の紙が頭に降って来た。

「えっと、なにに？盛夏祭、常盤台女子寮にて」  
「……………今日だったのか。まあ行ってみるか」

俺は学生寮の空中を浮遊していた。

どうやらこれから美琴がステージに立つらしい。

パチパチパチパチパチ

「……………」

おっ、出てきたか

「……………」

ん？どうしたんだろう。始まらないな……………

「どうしたんだ？」

「さあ？」

周りからの声も多数ある

「……………」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

指が・・・動かない・・・

それに心臓がバクバク言ってる。

緊張？ないない私に限って・・・・・・・・

初春さんや佐天さん黒子に固法先輩も居る。

どうしよう・・・・・・・・私・・・

・・・・・・・・・・見てるつもりだったんだけどな

俺は空中にとどまり声を上げる。

「美琴！！ガンバレー！！」

観客がいつせいにこつちを向く

「えっ？」

それは美琴や初春、佐天さん、固法先輩、黒子も同じことだった。

「「「十夜さん！？」」」

「・・・・・・・・・・もう、遅いのよ・・・バカ・・・」

~~~~~

~~~~~

綺麗なバイオリンの音が流れる。

~~~~~

パチパチパチパチパチ

美琴の演奏が終わり、盛大な拍手が送られる。

俺は地面に降りたち、影に潜ろうとするが多数の声に止められる

「「「「「十夜さん！！（十夜！！）（十夜君！！）（待つじやんよ！！）」」」」」

俺は影に潜るのを止める

「よう皆、久しぶりだな。美琴にはこの前あったか・・・」

「十夜さん！！なんでこんなに長い間帰ってこなかったんですの！生きていたのなら連絡くらい！！お姉さまがどれだけ「黒子」・・・

・お姉さま・・・」

「ねえ、この前助けてくれたのは十夜だよね？」

「ああ、そうだ。たまたま通りかかったただけだな」

「ありがとう」

バサッ

美琴はそう言っただけ俺に抱きついてきた。

「ほんとに・・・心配したんだから！！グスン・・・」

「・・・悪かったな。俺はちゃんと生きてる。皆も悪かったな」

俺が言い終わると同時に俺の唇は“何か”にふさがれた。

その何かとは美琴の唇だった。

「ンッ・・・ムチュッ・・・クチャ・・・ペチャッ・・・」

「はわわわわわ／＼／＼」

「あわわわわわ／＼／＼／＼」

「ペチャッ・・・クチュ・・・プハッ・・・いきなりだな美

琴・・・」

「十夜が悪いんだから！！待ってなさい着替えてくるから！！初春さん佐天さん確保よろしく！！／＼／＼／＼」

「「はつりよ、了解！！」」

数分後

「十夜！！」

今度はメイド姿で登場した美琴

「どうしたんだ？メイド服なんて着て？」

「なに言ってるの。これから盛夏祭を回るに決まってるでしょう？」

「今からか？」

「良いから行くわよ！！」

美琴は俺の右腕に抱きつき俺の事を引っぱって行く

俺は美琴に引っ張られ、いろいろな場所を回った。

途中、インデックスと当麻に会いインデックスに怒られた。

「さて、大体回ったぞ？そろそろ気が済んだか？」

「全然？」

「はっ！？」

「・・・・・・これから十夜の家に行くわよ！！」

「家？」

「そつ、まだ言ったこと無いからね」

と言うわけで家に来た。

「・・・・・・十夜、これ常盤台の学生寮より大きくない？」

「そこら辺は気にしないでくれ」

まあ、殆ど使っていない部屋だけだね

「十夜の部屋はどこ？」

「あそこだ」

「ふーん」

タツタツタツタ

ガチャリ

「………すごい……」

ん？何もすごい事なんて無いのだが。

「ねえねえ十夜ってギター弾けるの！！」

ああ、ギターですごいって言うってたのか。まあ俺の部屋はギター関係の物しか殆ど置いてないしな。

「まあ少しだけな」

「弾いてよ！！」

俺はレスポールをだし、チューニングする。でもなんかこう言うのって

「恥ずかしいな／＼／」

「早く早く」

ん、何にしよう？とりあえず超電磁砲の主題歌『only my
railgun』でいいか

「~~~~~」

~~~~~

放て！！心に刻んだ夢を未来さえ置き去りにして  
限界など知らない意味無い。この能力が光散らす、その先に遙かな  
な思いを

歩いてきた、この道を振り返ることしか

出来ないなら今ここで全てを壊せる

暗闇に堕ちる町並み、人は何処まで立ち向かえるの  
加速するその痛みから、誰かをきつと守れるよ

Looking

The blitz loop this planet to

search way .  
Only my RAILGUN can shoot it .  
今すぐ

体中を光の速さで駆け巡った 確かな予感

掴め！！望むものなら残さず輝ける自分らしさで  
信じてるよあの日の誓いも

その瞳に光る涙それさえも強さになるから

~~~~~

~~~~~  
「

パチパチパチパチ

「以上、神崎十夜によるギターの語り弾きでした。」

「すごいじゃない。十夜！！」

その後も美琴にせがまれいろいろ弾いた。  
指がジンジンする~~~~

「さて俺は風呂入ってくる。」

「うん。ゆっくり入って来ていいわよ」

「そうさせてもらうよ」

はあのんびり出来る

ガラガラ

ポチャン

「はあ、良い湯だなアハハンってか？」

ガラガラ

ん？今の音はなんだ？

・・・・・・・・マサカ

ギギギギと効果音がつきそうな感じ振り向いた。

すると、そこには一枚バスタオルを身にまとった美琴が居た

「おおおおいい！！何で入って来てるんだよ！！」

「べ、別に私のかつてでしょ！！／＼／＼」

「おー、俺は出る！！」

「だ、駄目に決まってるじゃない！わ、私に何かあったらどうするのよ！！／＼／＼」

「いや、俺がいるほうが何かありそうだからマジで」

「い、いいからつかりなさい！！い、いろいろとや、やばいものが見えてるから・・・・・・・・／＼／＼」

「あん？・・・・・・・・きゃあああああ！！」

その日、風呂場には男の悲鳴が響いたという

「ハアハアハアハアリ、理性が飛ぶかと思った・・・・・・・・」  
「・・・・・・・・／＼／＼／＼／＼／＼」

風呂に入っている間、美琴はずっと俺にくっついていたのだ。しかもタオルも巻かないでだ。これで理性を保てた俺はすごいと思う。しかも横では何処から持ってきたパジャマを来ている。本当に何時の間に？

「さて、暗くなってきたし送ってくよ」

なにその「十夜なに言ってるの？」てきな視線  
まさか……

「なに言ってるの？今日は十夜の家泊まるのよ？」

「やっぱりかあああ！」

その日二度目の悲鳴が響いた

「美琴さんなんで俺の布団に入ってきてるんですか？理由を聞きたいのですが？」

「何で警護なの？まあいいや。こっちの方が暖かいし、いいじゃない」

そう言いながら美琴は俺の腰に手を回してくる

「あのなあ俺、男だぞ？何時襲うか分からんぞ？」

「別に十夜ならいいわよ／＼／＼／＼／＼、それに恋人同士で寝て何が悪いの？／＼／＼／」

「俺が後で黒子に殺されそうなのだが」

「それは大丈夫よ。黒子も認めてるしその……黒子たちの目の前で、キスもしたし／＼／＼／」

[illegible]

なんだかなあ。俺としては嬉しいんだけどな……

「 ..... 十夜 」

「なんだ？」

「……もう、何処にも行かないよね？」



「・・・・・・・・分らない。でも必ず戻ってくるよ」

「・・・・・・・・それ聞いて安心した。じゃあ私は寝るわよ。お休み」

「お休み」

## 第十一話 盛夏祭（後書き）

キャラ崩壊がやばい・・・  
感想待ってます

## 第十二話 乱雑開放（ポルターガイスト）

「花火大会？」

『そう。今日学園都市の花火大会だから十夜も来ないかな？』

「うーんちよっと待て（土御門）」

「（なにぜよ）」

「（この後の予定は？）」

「（特にないだニャー。もしかしてデートかニャー）」

「（まあそんなところだ）ああ、大丈夫だぞ」

『本当？じゃあ待ち合わせ場所は……』

それにしても花火大会か……。久しぶりだな。何年ぶりだろう？  
最後に言ったのが小学6年時の夏だから……。かれこれ10年  
ぶりか

『じゃあまた後でね』

「おう」

「十夜ー！ー！！」

俺が待ち合わせ場所で待っていると美琴と黒子が走ってきた。正確には走っているのは美琴だけだが

「お姉さまそんなに走られますと」

「あつ」

美琴が石につまずいて転びそうになるが俺が神速で近づき美琴を受け止める。

「大丈夫か？」

「う、うん。ありがとう／＼／＼／」

「十夜さんお姉さま良いムードの所申し訳ありませんが、初春と佐天さんがお待ちになりますよ？」

「あれ？黒子居たのか？」

「あつ、黒子いたんだ」

「ガーン・・・十夜さんだけならまだしもお姉さままで・・・」

「「冗談だ（よ）」」

「・・・・・・・・あそれでは行きますわよ」

「おう」

「あー御坂さんすごい素敵」

「白井さんもかわいいですね」

「もちろんですわ」

すげ〜ナルシストって奴だ〜

「初春さんたちもかわいいよ」

「「「エヘヘ」」」

「ありがとうなの」

「そういえば初春、その子誰？」

「あつ紹介がまだでしたねこの子は「春上はるつえりい衿衣えりいなの」……です」

「よろしくなの。かつこいいお兄さん」

「ははは、お世辞が上手いね。俺は神崎十夜よろしく」

「じゃあ行きましょうか」

「そうだな」

「あつ夜店だ」

「良い匂い」

「じゃあ行くか」

う〜ん、この匂いも懐かしいな〜

俺たちはたこ焼きを食べたり、ボールすくいをしたり、輪投げをしたり、お面を買ったりして祭りを楽しんだ。

「あ〜当たらない!!」

「ん?どうしたんだ美琴?……あれが欲しいのか」

「べ、別にゲコタのストラップなんか欲しくないんだから!!」

「はいはい。じゃあおっちゃん一回ね」

「はいよ。かわいい彼女のためにとって上げなお兄ちゃん」

さてと……

俺は構えをとり引き金を引く

パン

「おお、大当たり。すごいな兄ちゃん。球は後二つ残ってるぞ。」

後二つか。まあ美琴念願のストラップは手に入ったし……。あれは……。ゲコタのぬいぐるみか……。よしパン

「すごいぞ兄ちゃん、またとりやがった」

さて、最後の一発はどれにするか……。ペアのネックレスがあるな。あれで良いか

パン

「もうなにもいわねえ当たりだ。持ってけ泥棒」

「サンキュー」

俺は美琴の前まで行きゲコタストラップとゲコタのぬいぐるみを渡す

「あ、ありがとう／＼／＼／＼」

俺は美琴の背中に手を回しネックレスを付ける

「ほら、俺からのプレゼントだ」

「ありがとう／＼／＼／＼」

「お姉さま？あら、どうしたんですのそのネックレス？」

「ど、どうだって良いでしょ！！／＼／＼」

「ほほ、十夜さんですか。本当にお姉さまはズルいですわ十夜さんのような殿方とお付き合いすることが出来て」

「ベベベベベベ、別にわわわわわわ、私が好きなわけじゃないんだから！！とととととととと、十夜がどとどとどとどとどとどとど、どうしてもっていいいいいいいい、言うからよ！！」

「ほほ、それではこのボイスを再生して見ますの」

『十夜……。早く帰ってきてよ……。私の大好きな十夜……。……。勝手に居なくならないでよ……。私はと「きゃあああああああああ！！」……。』

「黒子！！今すぐそのテープを渡しなさい！！」

「何でだ？あれは聞きたいんだけどな？その続き」

「ぜぜぜぜ絶対駄目！！」

なんなんだ？

「あれ？なにあの車」

佐天さんが数台のトレーラーを発見する

「MAR精神状況救助隊のトレーラーですね」

「例の乱雑開放対策ですかね？」

なるほどもう乱雑開放事件まで来たのか・・・

「乱雑開放！？じゃ、あの噂マジなんだ！！」

「こんな人の多い場所で万が一 乱雑開放が起きたら大変ですし」

「それにしてもあんな警備下で花火見物だなんて・・・風情もへ

つたくれありませんの」

「潰してくるか？」

「駄目に決まってるじゃない！！十夜が言つと本当にやりそうで恐いわ」

「つたく冗談なのに」

「あつ、それなら良い所があるんですよ！！」

ヒュウウウウドンドン

「「「わあああああ「「「」

「すごいな。良い穴場だ」

「そうですよね！！」

「ほらっ、また上がりますわよ！」

ドンドンドンッ

「ひゃっ」

「お腹にドーンッと響きますよね」

「うん、ドーンッと来るの」

ドンドンドンドンドン

「綺麗なの・・・」

ヒュウウドンヒュウウウドン

「た〜まや〜!!」

「か〜ぎや〜!!」

「また来たよ！」

「「た〜まや〜!!」」

ドンドン

「「ん？」」

「どうしたんですか？」

「あっ・・・ふっ・・・思い出してたの」

「「ん？」」

「何を？」

「あのね昔、私にも初春さんと佐天さんみたいな・・・あっ」

「春上さん？」

「どうしたの？」

春上さんは一人で階段を登って行ってしまっ

「春上さん!!」

「あっちよつと!!」

「あれ?どこ行くんだろう?あの子たち」

「美琴心配だから俺も行ってくるわ」

「あっ、うん」

さて、いっちょやるかな



「どこ・・・何処なの？」

「春上・・・さん？」

「何処なの？」

ドドドドドドド

ちつ始まったか・・・本当は始まって欲しくなかったけどな

「初春！！！！」

初春たちの上に電柱が倒れる

「えっ」

させてると思ってるのか？

「虚空<sup>ヤロ</sup>」

ズドドドドド

ドンドンドンドン  
ビュン

「佐天さん大丈夫！？」

「・・・」

「えっ？」

「あちゃー、威力が強すぎたわー。ノリでやって見たら案外強力なのが・・・」

「なにやってんのよー！！」

「へブッ」

俺に美琴のチョップが入る

初春たちの所以外は殆ど消え去っている。

うん、この技は封印だな

『さすがは復活したLEVEL5って所ね。大丈夫怪我は無いかしら？』

「俺はLEVEL5でもなんでもねえただの無能力者（LEVEL

0」だ。それになにがさすがねだよ。ずっと見てたくせによ」

『あら、気づかれていたのね』

「ふん」

「あの方は……!!」

「えっ？」

「うつ、うつ」

「春上さん!!春上さん!」

「う……ん……」

「春上さん!大丈夫ですか？」

「無理しないで」

「何処?……何処に居るの？」

「枝先<sup>えださき</sup>絆理<sup>ばんり</sup>」

「「えっ?」」

「何であなたが絆理ちゃんを!？」

「……大丈夫だ。彼女は俺が探してあげるよ」

俺はテレステーナを一睨みしながら言う

「本当に?」

「ああ、本当だ」

「……ありがとうなの」

「十夜さん絆理ちゃんって?」

「秘密だ」

「ええー何でー?」

「秘密なものは秘密だ」

「ところであれは……この場におけるAIM拡散力場を計測して

いらつしやいますの？MARでは事前に力場の異常を探知出来たりするのでしょうか？」

「……」

「あついえ……その、対応があまりに迅速でしたもので」

「あなたお名前は？」

ジャケット

「風紀委員第一七七支部の白井と申しますの」

「なるほど。一七七支部には優秀な人材が揃っているみたいね。RSPKとAIM拡散力場の関係についてもう把握しているなんて」

「RSPKは何者かによるAIM拡散力場への人為的干渉が原因。その同時多発が乱雑開放を引き起こしている。合同会議の時に教えてくださいだされば風紀委員としても不審人物の割り出しなどお手伝いすることは出来ましたのに」

アンチスキル

「そつちは警備員の管轄。会議でも行つた通り風紀委員には風評被害対策や日頃の安全対策に専念して欲しかったのよ。」

「まあもつとも不審人物なんて出てこないだろうけどな」  
だつて引き起こしてる人物がすぐ近くに居るのに

「AIM拡散力場への干渉。そんなことが出来る人が他にも居るんでしょうか」

「他にも？」

「御坂さん。ちよつと病院まで付き添ってきますね！」

「ああ、私たちも！」

「いけませんわお姉さまそろそろ寮監の巡回が」

「ああ……」

「じゃあ俺が送るよ」

「それではお願いしますわ」

ビュン

ムフポイント

俺は座標移動で美琴と黒子を部屋のベットのの上にそれぞれ飛ばす  
「さて俺も行くかな。じゃあなテストイーナ」木原「ライフラインさん。木原幻生へ怨みを持っている人は多いからね。背中には気を付けることだな。俺もさつき春上さんと約束しちゃったしね」

「なっ！！あなた！！いつ」  
俺はテレステイナが言い終わる前に座標移動で家に飛んだ

数日後夜・・・

「私の記憶を覗いた君なら知っているだろう？私の教え子たちだ」

「ッ！！やっぱり乱雑開放を起こしていたのはあんたなのね」

「まあまあ落ち着きなって」

「ッ！！十夜！？」

「・・・また君か」

「来るのが遅すぎだ。待ちくたびれたぞ」

「何で十夜がここに！！」

「君はまた私の邪魔をするのかい？」

「美琴は少し黙ってる」

俺は美琴に沈黙サイレントを掛ける

「今回は邪魔なんかじゃないさ。手伝いに着たんだ」

「何故か理由を聞いても良いか？」

「ああ、約束しちゃったんだよ。アンタの教え子枝先絆理は俺が探し出すってな」

「そうだったのか」

「十夜君・・・だったかな？」

「えっと・・・冥土返し（ヘヴンキャンセラー）であってました

つけ」

「ああ。そうだよ。それより君の横で電撃を放とうとしている彼女を止めてはくれないかい？」

「えっ？・・・・・・こらっ」

俺は美琴にチョップをかまし沈黙を解く

サイレント

「いつつうゝ何すんのよ！！」

「はあこいつはほおつておいて話を進めましょう」

「ほおつて置かないで！！一体何がどうなってんのよ！？」

「・・・・・・木原幻生」

「えっ？」

「彼が全ての始まりなんだね」

リアルゲコ太こと冥土返しが語り始める

「敢えて問いましょう。我々の究極の目的とは何か？学園都市が存在する理由とはなんであったのか？そう人類を超えた存在LEVEL6の創造に他なりません。暴走能力者の脳内では通常とは異なるシグナル電鉄回路が形成され、各種の神経伝達物質。さまざまなホルモンが異常分泌されています。それら分泌物質を採取し、凝縮生成した物こそ、この能力体結晶なのです。これを特に選ばれた能力者に投与することによってLEVEL6を生み出せるのです。能力体結晶こそ長らく暗闇に閉ざされていた神ならぬ身にて天上の意思に辿り着くものSYSTEMへと到る道を照らし出す、科学への灯火なのです。」

コツンコツンコツン

「あんなもので本当にLEVEL6が作り出せるもんですかな？」

「もちろんだとも。」

「本当かい？いたずらに意識障害を招き、重篤な副作用を起こすのではないかな？」

「実験は着実に成果を上げている。」

「そのためにどれだけの犠牲を払ったんだい？」

「犠牲？私の研究に犠牲者など居ない。居るわけが無いフツハツハツハツハ」

「彼がその存在をどう認識していたかは知らないが犠牲者は居たんだよ。あの事件に関わり事の経緯を知り、そして確信したんだ。木山君が救おうとしていた置き去り（チャイルドエラー）が能力体結晶の実験台にされたんだってね。」

「あつ……」

「あの時君に話した。暴走能力の法則解析用誘爆実験すらも方便だったと。君の見たあれは能力体結晶の投与実験だ」

「そんな……LEVEL6なんてとっかかりも見つかってないもののために？そんな怒れた実験のためにこの子たちはこんなにされたって言うの？」

「ああそうだ。それにもう一つLEVEL6を作る実験はされていたんだ。一方通行は何のために妹達を殺してたんだ？」

システムズ

「それは……っは！？絶対能力進化（レベル6シフト）！？」

「ああ。残念だがこれが学園都市の裏側だ」

「くっ……」

「僕に出来るのは医者としてこの子たちを救うことだけだ。幸い全員を集めるのそう時間はかからなかった。僕はこの町では多少は顔が聞くからね。後は目覚めさせるために専門家の話が聞きたくて」

「それで保釈を・・・」

今ここで目覚めさせる事も出来るけどそれじゃあ原作が狂ってしま  
うからな

「無理を言ったのは私のほうだ。先生には感謝している。ここの設  
備を使えたおかげでこの子たちを目覚めさせる目処がついた。」

「じゃあ助かるの?」

「いや、別の問題が発生したんだね?」

「乱雑開放か・・・」

「そうなんだね。この子たちは眠りながらにして暴走能力者にされ  
ていたんだね」

「じゃあこの子たちが目を覚まそうとすると」

「ああ乱雑開放が起こる」

「いや、それはちよつと違うな」

「何?」

「乱雑開放は春上衿衣の精神感応と枝先絆理の念話能力テレパスが関係して  
起きている」

「何でよ!春上さんは関係ないってテレスティーナさんが!!」

「テレスティーナのフルネームを知っているか?」

「知らないわ」

「テレスティーナ」木原「ライフラインだ」

「木原だと!?!」

「木原って木原幻生と同じ苗字・・・まさか!」

「ああ血縁者だ」

「そう、その子の言う通りよ」

「テレスティーナさん」

「ゴメンね、後を付けさせてもらっただわ。保護しろ」

「まてっ!?!」

カラン

美琴が木山の前に立ちふさがる

「何のマネだ?」

「気に入らなければ邪魔をしると言ったのはあなたでしょ」

「どけっ！あの子たちを救えるのは私だけなんだ！！」

「救えてないじゃない！！幻想御手をつかつていろいろなことをした！！・・・でも一人も救えてないじゃない！！」

「あと少し。後一息なんだ。だから・・・」

「枝先さんは今助けを求めているの・・・春上さんが・・・私の友達彼女の声を聞いているのよ・・・」

「運び出せ」

「ちよつと待てよ。誰が運び出して良いなんて言った？美琴が邪魔をするなら俺は美琴の邪魔をするぞ？」

「・・・ゾクッ・・・この感じ・・・イレギュラー異形物か！？」

「なっ！？十夜どういふつもりよ！！」

「どうもこうも、お前は人の話を聞いてなかったのか？そいつはこの子たちを植物状態にした張本人。木原幻生の血縁者だぞ？」

「だからって・・・今はちゃんと助けようとしてるじゃない！！」

「どうかな？」

「ザシュッ！！」

「くっ・・・」

俺の心の臓に黒い何かが刺さる

「えっ？・・・嘘・・・嘘よね・・・と・・・う・・・や・・・」

俺の体の下には血溜まりが出来ている

「きやああああああ！！」

「なに泣いてんだよ。俺はピンピンしているぜ？」

「えっ？」

俺の下にあった血溜まりはいつの間にか消え服に貫通した穴も無く黒い何かも消え去っていた。

「さっさと出てきて欲しいんだけどな？異形物？」

「ふっ今の一撃を受けてなんとも無いとはさすが神を超えた男だな」  
現れたのは長身で顔に仮面を付けた奴だった。





### 第十三話 力

「ふっ今の一撃を受けてなんとも無いとはさすが神を超えた男だな」

「黙れ・・・俺は神など超えていない！！さてここで消えてもらう異形物」

「ふっん僕には柊木剛って名前があるんだけどなあ、じゃあ場所を移そうか。我等を時と破壊の狭間へ誘え！！」

異形物　　もとい柊木剛が叫んだ瞬間、俺は意識を失い、この世界から存在が消えた。

「ふっん僕には柊木剛って名前があるんだけどなあ、じゃあ場所を移そうか。我等を時と破壊の狭間へ誘え！！」

柊木剛って言う仮面の人が叫んだら周りが光に包まれた。光が晴れるとそこには十夜の姿は無かった。

「十夜？何処？」

「彼なら大丈夫よ。すぐに帰ってくるでしょう。今は少し違う場所に連れて行かれてるだけだから」

「そう……ですか……」

テレスティーナさんは木原の血縁者だ。でもだからと言って悪い人ではないだろう。テレスティーナさんは初春さんと春上さんを助けてくれた。見ず知らずの人を助けるくらいだ悪い人では無いだろう。それより早く帰ってきて十夜！！

「うつここは……」

周りを見るけれど何も無い。ただ無の世界

「ここは僕が創った世界。時と破壊の狭間。そして君には突然だけど死んでもらうよ！！」

何も無かった無が変り、緑が生い茂る。

そして柊木と名乗った男はいきなり目の前に現れて俺を蹴り上げる  
ドゴン

「グハッ！！」

俺は柊木の攻撃をともに食らってしまった。

「ふん、弱いな。拍子抜けだよ！！ブラスト」

柊木の手にとんでもない馬鹿魔力が溜まっていく。

「くっ……ここまでののか……くそっ！！」

「デストラクション！！」

柊木の手に収束されていた魔力が一気に開放される。

俺はそれを・・・・・・・・・・まともに浴びてしまった。

「ぐがああああああああああ！！」

煙が立ちこめる

「ふん、もう少し期待してたのにな〜やっぱり弱かったな〜」

煙が晴れるとそこには俺の姿は無かった。

「はあ〜跡形も無く消えちゃったよ〜残念だなあ〜」

「お久しぶりです」

「おお、あんたが居るってことは俺は死んだのか？」

俺は目の前の幼女もとい俺を殺しとある世界へ送った神に問いかける

「本来ならあなたは死んでいました。」

「本来なら？」

「どういうことだ？俺は死んで無いか？」

「はい。あなたはあの男に存在を消される前に私が回収いたしました」

「そうか。それは済まなかったな」

「・・・・・・・・あなたは何を望みますか？」

「ハッ？」

俺は神の言葉が理解出来なかった。俺が何かを望む？必要の無い事だろう？こんなに強いんだから。それに幸せだ

「あなたはこのまま戻っても死にます。あの柊木剛と言う異形物の手によって。もしも柊木剛を倒したとしても、彼より強い異形物はたくさん居るでしょう」

それは分かっていた。あいつと俺では決定的な戦力の差があった。

アイツをあのまま野放しにすれば世界は終わってしまうだろう。

「再度問います。あなたは何を望みますか？」

「俺は……俺は力が欲しい！！仲間を守る絶対的な力！！」  
「あなたの望み聞き入れましょう。しかしその前にあなたに話さなければならぬ事があります。」

「話す……こと？」

「はい。実はあなたは私のミスなんかで死んだんじゃないのです。」  
「……ハッ？」

でも確かにあの時私のミスで死にましたって

「実はあなたはとある世界に紛れ込んだ異形物を倒すためだけに殺されココへ送られてきた存在です」

「じゃあなんだ。俺は神の厄介ごとに巻き込まれたと言うのか？」

「はい。そうです」

「そうか……でも、おかしくないか？俺は自分で行き先を……  
まてよそれ以前に俺つてとある系の話し見たことが無いぞ？でも何故か原作を知っている……」

「実は誠に申し訳ないことなんですが情報操作をさせていただきますました」

「なるほど。それでか……でも、俺は今の生活に満足している。悔いは無いよ」

「そうですか。ではあなたには望みを叶える為にこの門の中に入つて修行してもらいます」

神が言々と神の隣に門が現れた。

「この門の先は重力が500倍に設定してあります。その代わり力の習得も500倍になっています。」

「500倍って……随分凄いな」

「はい。それとこの世界に入ったら即刻死ぬのがオチでしょうからあなたには吸血鬼の真祖ハイ・テイルイトウォーカーになつてもらいます。ちなみに向こうは太陽ギンギンですから慣れるまできついですよ？そしてあなたが向こうへ着き、からだが保てるようになって1日で1倍ずつ増えて行き

ます。それで重力がここの1000000000倍（一億倍）になったら重力の上昇は止まります。それから100年は自分の好きなように過ごしてください。ちなみに向こうでの時間はこっちの時間とはまったく違うのでご安心を。こちらでは時間が立ってないことになりますので」

そりゃ安心だな。帰ってきたらすぐに美琴たちを助けられる。

「そうか。なら俺は力を手に入れて戻ってくるとしよう」

「……御武運をお祈りいたします」

「ああ。行ってくる」

俺は門をくぐった

グシャッバキッ

死亡1回目

グシャッバキッ

死亡1080000回目

グシャツバキッ

クツ・・・いてえな・・・

やっと自分の意識が持てるようになって来たぜ・・・

死亡78000000回目

グシャツ

・・・意識が朦朧としてるが・・・何とか持ちこたえてるみたいだ・・・バキッ

死亡190000000000回目

・・・力を入れればやっと体が保てるようになったけどまだ自由に動かせないな・・・い・・・意識が・・・グシャツバキッ

死亡30500000000000回目

・・・やっと普通になつたぜ

「あゝあゝギヤゝ」  
声を出していなかったからきついな……

数時間後

「はあやつと声が元に戻ったな……今は一体何年目だろうか？」

『今は160年目です』

「誰だっ!？」

『私はここの管理者です』

「そうか。俺は何回死んだ？」

『15京6806兆「もういい」……わかりました』

「それで、俺はこれから何をすればいいんだ？」

『まずはこの世界に存在している生物……といっても人形ですがそれを全滅させていただきたいです』

「全滅って……数は？」

『約8000兆匹です』

「……ガチで？」

『はい』



私の前に門が開いた。

それは門が閉じて一分くらい立った頃だった。

私は正直不安だった。彼が帰ってくるかどうか。

しかし彼は帰ってきたようだ

「ただいま。帰ってこれたよ。」

「……お帰りなさい。早速ですが今から戻りますか？」

「ああ」

私はびつくりした。

門から出てきた存在が以前より格段に上がっていた。

ここまで強くなって帰ってくるとは思わなかった……これなら敵が最高神でも負けないだろう。彼は神をも超越したんだ

「そんな大げさなことじゃないよ。つとすまん勝手に心を読んでしまった」

読心術も使えるようになってる。もう私に出来ることはなさそうですね。

「それでは送ります。負けないでくださいね」

「ああ」

ビュン

彼は元の世界へ戻って行った

「はあゝ跡形も無く消えちゃったよゝ残念だなあゝ」

俺は戻ってきた。あの時あの瞬間に

「誰が跡形も無く消えたって？」

「ッ!?!」

俺の能力、身体能力、魔力、気、霊力、神力、妖力・・・etcなど完全に封印・・・もとい制限しているのだがすっかり攻撃が通ったよ

ザシユツ

俺が振るった剣は咄嗟に出た柊木の腕を切った。

「クッ!?!」

「どうした？その程度か？ならこれからずっと俺の番だ!!」<sup>ターン</sup>

俺は剣を振り徐々に柊木を追い詰めて行く

「クッ・・・何故だ!!さっきとまったく違うじゃないか!!」

「そりゃあ・・・今さっき神を越えたんだ。お前如きに負けるとでも？」

俺が剣を持ち直すと俺の持っている剣・・・黒い日本刀型の剣は白く光り、やがて光りも収まる光が収まるとそこには今まであった黒い剣ではなく白い剣があった

「終わりだ神崎流消刹魏蛇（しんせきりゅうしょうせつゑいさ）！！」

黒い男に伝説になった蛇が近づいて行き、魂を食らう

「クツ・・・神崎十夜・・・覚えておくといいよ。僕たちはただの雑魚にしか過ぎない・・・君たちの言う異形物には幹部が12人いる。それでその下には僕達のような雑種、ロトは30人。君が僕を含め2人殺したからロトは後28人。でもその中でもボスは別格だ・・・僕はもう終り見たいけど・・・頑張って。ボスを倒せば全てのロトと幹部は消滅するはずだからさ・・・」

「・・・分かった。しかと心に刻んでおこう」

そしてこの時と破壊の狭間は崩れ始める。

俺は転移でここを抜け出した。

『いい加減諦めろ！！てめえらがどんなに足掻こうと餓鬼どもを助けることなんざできつこねえんだからよぉ！！』

転移したのは上空で木原が木山の車を追っているようだ。

なんか時間まで跳んだな。あの空間は時間差が変るのかな？

「それでも、足掻き続けると誓ったんだ。私は！！・・・クツ・・・  
・・・教師が生徒を諦めるなんて出来ない！！」

「へっ・・・ったりまえじゃない！！何が何でもアンタを送り届ける！私は！そのためにここにいるんだから！！」

『いまさらてめえに何が出来る？とつとと死ねえええええ！！』

美琴にロケットパンチが飛んで行く。

しかし

ザキン ドスン

ロケットパンチは何かに斬られ地面に落ちる。

「美琴一人じゃ出来なくても俺がいたら？」

俺は木山の車の上。美琴の隣に降り立つ

「十夜・・・いつも遅すぎるのよ！！」

「正義は遅れてくるってな・・・ただいま」

「お帰り十夜。今からいちゃつきたいところだけど今はアイツを倒さないと！！」

『あんだてめえ？生きてたのかぁ？役にたたねえやつだったなあ 柊木は』

「美琴は待つてろ。俺がこいつを倒す」

（全能力1%解除）

俺は全能力を1%ずつ解除しただけなのに体がとても軽くなった。

「行くぜ神崎流 真・戒かいげつぱく？猥！！」

俺の剣から真つ黒な衝撃波が形を変えながら木原に向かって行き。

木原が乗っているロボットの足に取り付き溶かした。

俺は縮地で近づきロボットを粉々に叩ききった

「ああ、急ぐぞ。」

## 第十四話 子供たち

学園都市・第二十三学区

カタツカタツカタツカタツカタツ

「どうだ？分かりそうか？」

「もうちよつと・・・プロテクトが硬くて・・・」

キーボードを叩く手を緩めず、答える初春。

「まったく・・・お姉さまが一人残らずお片付けになるから・・・」

「うつ・・・しょうがないじゃない！！さっきは中に誰もいないなんて思いもしなかったんだから！！」

「へへっ・・・」

カタツカタツカタツ

ん？いくらなんでも遅すぎないか？

「どうした初春？」

「十夜さん。プロテクトが何百重にもなつてて時間がかかりそうなんです」

ふむ、原作とは変ってるな

「よし、変れ」

俺はパソコンに触れ電気を流し、演算を開始する

ウィィィィィィィン

パチン

「見つけたぞ。消費電力が桁違いに高いところ。それは最下層プロ

ツクの

「

「・・・はぁ・・・見つけた・・・」

ドンドン

「春上さん!!春上さん!!」

ドンドン

「・・・?」

「・・・春上さん・・・ああえっと、このシステムは・・・」

「ちょっと待ってて向こうのほう見てくる!!」

「ああ、お願いします!!」

「・・・待ってろ!!今助けて!!」

ドンドンピイイイイイ

「うっうっうあああ!!」

ピイイイイイ

「おっ、おい!!大丈夫か!」

「あっくううう!!」

「うっううう・・・この音・・・まさか・・・!!」

「このお糞餓鬼共がぁ!!」

声のした方を見ると頭から血を流した木原がいた

「嘘・・・あんた!!」

「さっきの・・・礼だ!!」

「馬鹿だな？させると思ってるのか？」

俺は神速で近づき、木原の攻撃を受け止める。

「キサマアアアアア！！」

「おいっ！！来るんじゃねえ！！」

ドゴン

木山は木原に殴られ吹き飛ぶ

「わあっはっはっはわっひゃっひゃっひゃ！！ああ〜スツキリしたぜ。舐めたまねしてくれやがって。ほら、後はお前だけだぞ？ヒャッヒャッヒャッヒャ！！」

「キャパシテイダウンですね！！御坂さんが言ってた、能力者だけを苦しめる音だって。」

「何だデメエ？それが分かったところでどうするってんだ？」

「確か、改良型は大きくて固定したスピーカーを移動出来ないって！！」

何？俺空気？

「ああ。だがこの施設中に設置してある」

ウィイイン

木原が一步初春に近づいていく

「なんなら一個一個壊して回るか？」

ウィイイイン

「おいおい、それより前に行くなよ？それより前に行ったら“俺の”超電磁砲がお前に当たるぜ？」

「粹がるんじゃねえ！！この音の中で能力が使えると思ってるのか？」

「なら、試してみるか？」

俺はポケットから普通のコインを出す。

「ちなみに、俺に射程距離は無いぞ？」

俺はコインを長さの分だけ小さな空気幕で覆い、その周りに電気を流している。なのであたる寸前にコインが溶け始めるって訳だ  
「行くぞ」



カチン

コインが宙を舞う

そして

「行け」

ズドドドドドン！！

木原の横を俺の超電磁砲が通り過ぎる

「なっ・・・なっ・・・何故だ！！何故お前にキャパシティダウンが効かねえ！！」

「教えて欲しいか？そうだな・・・俺は元から能力者なんかじゃないからだ」

「嘘をつくなあ！！今は確かに能力だったろうがぁ！！」

おつむが足りないのか？

「俺は能力開発を受けていない。まあ俺は特別だからな。それにもし俺が能力者でも一方通行の反射でこのいかがわしい音だけを反射してただろうしな？」

「クツ！！」

「なんでよ・・・アンタだって犠牲者じゃないおじいさんの実験台になって・・・能力を暴走させられて！！なのに！！」

「おい美琴！無理するな！」

「大丈夫・・・」

「犠牲なんかじゃねえよ？権利を得たのさ。私から生まれたこの種を花開かせて」

木原は赤い物が入ってカプセルを取り出す

「それは！！まさか、ファーストサンプル！！」

「LEVEL6を生み出す権利をなあ！！」

「LEVEL・・・6・・・そうだ。こいつはこれから学園都市初のLEVEL6になる。この餓鬼共の力を使つてなあ！！」

「えっ？」

「なっ！」

「うっ・・・まさか！春上さんを？」

「まっ、それは出来そうに無いけどな？」

「何？」

「ピイイイイドン

『そんなこと絶対にさせない!!』」

「ほらな？」

「佐天さん！」

「餓鬼がもう一匹？何で動ける!!」

『あたしの友達に!!手を出すなあああ!!』」

ガキヤイイインドドドドドン

「音が!!」

「しまっ!!いつってえ!!」

どうやら黒子が針を木原の手に空間移動レポートさせたようだ

「へっ」

「うっ!!くそっ!!」

「はああああえいつ!!」

美琴が木原を電撃で吹き飛ばす

バリン

その際、木原がファーストサンプルを割ってしまった

ここも原作と違ってやがる

「ファーストサンプルが!!」

「大丈夫だ木山、俺に任せて置け」

「ウツヒヤッヒヤッヒヤッヒヤッヒヤ!!ヒッヒヤッヒヤッヒヤッ

ヒヤ!!もういいわかったよ。てめえらこの施設ごとまとめて吹っ

飛ばしてやんよお!!」

ガシャンウイイイイ!!

木原が手に持っていたランスのようなものが口を開き電撃を溜め込み始める

「こいつはテメエの能力を解析して創ったもんだ!!てめえの超電磁砲より強力になあ!!」

「まったく実験動物だの家畜だのどんだけ自分を哀れんだらそこまで

「逆恨みできるのよ」

「電撃使い（エレクトロマスター）LEVEL5。この町じゃめえなんざただのデータヒヤッヒヤッヒヤッヒヤッ！そうだ！減らず口を叩くデータだ！！ヒヤッヒヤッヒヤッヒヤッ」

「学園都市はね、私たちが私たちでいられるさいこの居場所なの。あたし一人じゃ出来ない事も皆と一緒にならやり遂げられる」

カチン

コインが宙を舞う

「それが・・・」

「テメエらは人間じゃねえ。ただのサンプルだ！！サンプルが学園都市で「あたしの・・・あたしだけの！！」」

美琴が撃ち出したコインは木原の超電磁砲とぶつかり合いそして・・・

ズドドドドドドドドドドドドドドド！！！！！！

打ち勝った！！

キュイイイインドドドドドドドドドドドド！！！！！！！！！！

「はあ、やっと終わったか」

「さて、今から見るものは他言無用だ」

「」「」「ああ（うん）（わかりました）」「」「」

バサッ

俺は背中から白い天使のような翼を出し、飛び立つ

「綺麗・・・・・・・・」

「アスクレーピオスの名に置いてこの者たちを永遠の眠りから覚ましたまえ！！」

俺が呪文を唱えると子供たちは次々に目を覚まして行く。

俺は翼をしまい地面に降り立つ

「……………先生？……………どうして目の下に隈があるの？」

「……………はっ……………はは……………いろいろと……………忙しくてね……………」

……………」

「本当だ……………髪も伸びてる」

「でも……………先生だ……………」

「木山先生だ」

「……………お前たち」

「よかったじゃないか。先生」

「……………言わせてくれ。」

「あん？」

「ありがとう」

「おいおい、俺はただ治しただけだぞ？礼なら美琴に言ってやれこっ  
つ恥ずかしい」

「……………そうだな。御坂美琴。ありがとう」

「えっ？……………へっ……………ん……………へへッ」

「さて、行くかな？」

「ええ。しかもう空間移動する力は残っておりませんわよ？」  
テレポート

「ああ、それなら俺がやる」

pipipipipi

「もしもし、黄泉川先生？」

『少年。終わったのか？』

「ああ。それでこれからアンチスキル付属病院にこれから約十人入院するから手配よろしく」

『……………分かったじゃん。これから来るじゃん』

「頼むな」

pi

「さて準備完了。行くぞ？極大転移！！」

辺りが光に包まれ木原も含めた、約20人が転移した。  
さて、帰ったら寝ますかな？



## 第十五話 神の力と八月三十一日

piriririripiriririri

俺が子供たちを病院に送り届け、疲れたし帰ったら寝るかな？なんて思ってたら携帯がなった。相手は土御門だ。

「はあ」

pi

「もしもし？どうした？仕事なら請けないぞ？もし『そんな事言ってる場合じゃない！！』御使墮し（エンゼルフォール）』が発動した！！今から来てくれ」  
「……はあゝ分かった。今から行く。場所は？」

『場所は       だ。』

「へいへい。じゃあな」

pi

はあゝ

「……なんだか不幸だ……」

思わずクラスメイトの口癖を嘆いてしまった。

「……行くかな。転移」

ビュン

俺は土御門たちがいる海まで転移した。

俺が出たのはまたもや上空だった

「上条当麻。『神の力』は私が押さえます。あなたは刀夜氏を連れて一刻も早く逃げてください」

「おいおい、まだ始めんじゃないよ」

俺は出していた翼をしまい地面に降り立つ

「十夜！？どうしてここに！！」

「俺か？俺は・・・秘密だ。」

「なんだよそれ！！」

「まあ気にするな。まずは・・・あいつの術式を止めてからだ」

「あなたは！！私に任せてください！！ただの人間である「待てよ、聖人。俺がただの人間と言うならお前はごみ以下だ。邪魔だから失せろ」！！何を！！」

「まあ見てろ。ミーシャ・クロイツェフ、神の力を名乗るにしては器が小さすぎたのではないか？」

俺はそう言い終わると同時に、神の力の後ろへ瞬間移動する。

「まあもつとも、この世界にそんな器がいたらびっくりだけど、なっ！！」

俺は空に浮いていた神の力を後ろから叩き落とす。そのせいで背中にあった水翼の剣山が大量に砕かれる。

「ガハッ！」

神の力が地面につく前に下に瞬間移動し蹴り上げる

「クハッ！！」

そしてまたさらに上に瞬間移動師、上から踵落しを決める。

「ドハッ！！」

ドドドドドド！！

「カツ・・・ハッ・・・・・・・・」  
ドン

「・・・・・・・・・・」

神の力は完全に倒れる。

「ふん。神の力を名乗りたかったら俺を倒してからにしろってえの」  
俺は神の力      ミーシャ「クロイツェフを背負い、神裂の元まで戻る。」

「終わったぞ？それでも俺は普通の人間か？」

「そうだ。少し力が強くなったてやはり何も出来ない人間。これは変らない真実です」

「そうか。なら信じなくてもいいが俺はこの世界の誰よりも長く生きてる10京歳オーバーだ」

「・・・・・・・・ハッ？」

チュドドドドドドドドン

「おっと、土御門がやったようだな。んじゃこいつは置いてくから。俺は帰って寝る。土御門が着たらそう伝えといてくれ」

俺はそれだけ言っただけ自分の影に潜った

・・・彼      神崎十夜はなんと言っただろうか？

10京歳以上？京って一十百千万とある数の単位の京？

なにか私の常識が崩れて行きます。



8月31日 0:45

俺はコンビニへ行き帰る途中に一方通行に話しかける女の子を見かける。

近づいて見てみるとどうやら一方通行は音を反射しているようだ・

・・・・ってあれ打ち止め（ラストオーダー）じゃん！！

・・・・しゃあない。行くか

「待つて！待つて！とミサカはミサカは根気強く話しかけてみたり

！！」

「おい打ち止めさ〜ん」

「誰！？とミサカはミサカは驚きながらも振り返ってみたり」

「あゝ俺は神崎十夜。ちょっとかわいい女の子を無視し続ける一方通行に制裁を与えに来た」

「ミサカはミサカはかわいいって言葉に顔を赤くしてみたり」

俺は幻想殺しを使いながら一方通行を蹴りあげる。

「いつ！！てめえ何しやが！！・・・んだ十夜かよ」

「お前反射解きやがれ！！」

俺は幻想殺しで触れながら喋ってるから相手には声が届く

「つといけねえ。わりいなで、用はなんだ？」

「俺じゃねえよ」

「いやゝ何と云うかここまで完全無反応だと寧ろ清らしいと云うか、でも悪意を持って無視してるにしては歩くペースも普通っぽいし、これはもしかして究極の天然さんなのかなゝって、ミサカはミサカは首を傾げてみたり」

「・・・くっだらね。十夜まさかこんなことのために蹴ったのか？」

「ああ、そうだが？」

「ぶち殺す」

「そう言うことは俺に勝つことが出来てから言いな」

俺はあの事件以来、一方通行とはよくつるんでいる。

今ではこんな風に普通に話せてる。

内容は普通じゃないが・・・

「さっきからミサカはミサカは自己の存在を激しくアピールしてるのに存在全否定？」

「あつ？待て、ミサカだと？」

「おおゝようやくミサカの存在が認められたよわゝい！！ってミサカはミサカは自画自賛してみたり」

「いやゝ凄いやなゝまさか俺の彼女と同じ名前だとわねゝ」

「なんで棒読みなんだよ・・・おい、お前その毛布とばらってよく顔見せてみる」

「ってまさか往来で女性に服を脱げと云うのはいささか大胆と云うか無茶と云うか」



「お世話になりまーすってミサカはミサカの先手必勝」

「お世話になりまーすって十夜は十夜の先手必勝」

「真似しちゃ駄目何だよー！！ってミサカはミサカは怒ってみたい  
！！」

「何で十夜アまで……………」

「近いから？」

「何で俺エに聞くんだよ……………つかお前エなら能力使ってす  
ぐだろぅがア……………」

まあそんなわけで俺は一方通行の住んでいる学生寮に来ているのだ  
「アナタのお部屋って何処？ってミサカはミサカは質問してみたり」

「三 四号室」

「へへっへへっ」

ガチャッ

違っただろぅが……………打ち止めは三 四号室の扉を開ける

「お邪魔しまーすってミサカはミサカは一応礼儀なので」

『ちよっとな〜に〜？』

「わっ」

ガチャン

はあ〜一方通行も意地悪だな〜

「ぜんぜん違う人のお部屋だったほいんだけど、ってミサカはミサ  
カは憤慨してみたり。今度こそアナタのお部屋は何号室ってミサカ  
はミサカは聞いてみる」

「三 七号室」

スタスタスタ

突っ込む機も失せた

「お邪魔しまーす」

『出前なら頼んでないよ』

「わっ！！／＼／」

ボタン

「おい一方通行飽きないのか？」

「あア」

「うゝなんで、こんな酷いことするのゝってミサカはミサカは肩を落としながら尋ねてみたり」

「よしよし」

俺は打ち止めの頭を撫でて一応慰めてやる

「ううゝ」

「・・・あん？」

「どうした？」

「おいおい、なんだアこりゃ」

「うわあっ大変なことになってるってミサカはミサカは絶句してみたり」

「幼稚ないたずらだなあゝ」

「はあゝくつだらねエ」

「じゃあねえ。一方通行こっちこい」

「あんだ？」

「行くぞ」

「何処にイ？」

「俺の家。転移」

俺は一方通行と打ち止めを連れ、転移した。

「おいおい、ンダアこの家はア」

「まあ家と言うより屋敷だけだな。勝手に部屋使って良いから自由に寝な」

「ミサカはミサカは何処で寝ればいいの？って尋ねてみる」

「うゝん、部屋勝手に使っていいぞ」

「わゝい！ってミサカはミサカは喜んでみたり」

「はあ、じゃあ俺は寝るぞ」

「あア」

俺は自室に行き眠りについた。

「はあゝ・・・・・・・・何でだ？」

俺が目覚ますと毛布を掛けしないで素っ裸で俺の横で寝ている打ち止めがいた。

「・・・・・・・・創造開始。」

俺は打ち止めのサイズに会うように服を創造する。

「空間移動」

俺は空間移動で服を打ち止めに着させる。

さて、今日は何するか・・・・・・・・

pipipipipipipi

俺が打ち止めを起こさないようにそっと布団から出ると携帯がなった。

「はいもしも『十夜！今から来てくれる？』・・・・最後まで言わせてくれよ。どうしたんだ？」

『ちよつとね』

「ああ。分かったすぐ行く」

p i

確か海原光貴に変化した魔術師か……

ビュン

俺は置手紙を書き、ムーブポイント座標移動で女子寮の前に移動する

「おい、十夜、待った？」

「ん？おお、美琴待ってない。今来たところだしな」

「……ってな訳で私、十夜と約束してたりして……ごめんね

海原さ……」

ザワワツ

「あー……なんかたくさん見てるぞ？美琴」

「あ、は、あはははははは」

「おい、……美琴が壊れた……しょうがない」

俺は美琴の肩に手を乗せ空間移動した。

シュン

その日瞬く間に俺が美琴の彼氏であることが広まった

「おい、美琴、大丈夫か？」

「あははは……っは！！ここは？」

「えっと、学生寮からはとにかく離れといたぞ？」

「あつ、ありがとう。……よしっ、立ち話もなんだからカフェにでも……」

「お、おう」

どうしたんだ？そんなに海原のことが嫌いなのか？

8月31日 AM 10:15

「同じのでいーわよね？」

「ああ」

『四千二百円になりまーす』

「自分のくらい自分で払うぞ？」

「別にいいわよ。私から誘ったわけだし」

「そうか。なら頼むわ」

「毎日ッ！もうこの一週間毎日よっ！」

俺は今、ホットドックを食べながら美琴の愚痴を聞いてやっている。

「ふう〜ん、大変だな」

「立場的に断りにくいよね。急にテニスはどうだとか乗馬教えるとか・・・正直困ってるのよね」

「ふう〜ん」

「十夜絶対真面目に聞いて無いでしょ！！」

「聞いてるって」

俺は美琴の怒鳴り声を軽く受け流す

「とにかく！この際あの人にはキツパリハッキリ諦めて欲しいの。彼氏がいるって分かれば手を引くでしょ？十夜は私の彼氏なんだから今日一日ずっと一緒にいて欲しいの！！」

「本人に直接言えば？」

「それが言え「俺が付いてってやるから。それに俺が行けば学園都市統括理事長の名前も出せるしな」・・・十夜って本当に何者？」

「う〜ん・・・普通じゃない人間？（まあ人間止めてるけどな）」

「認めたよ・・・それでも！！今日は一日一緒にいて」

「・・・はあ〜分かったよ」

「！？・・・十夜どっち食べたか覚えてる？」

テーブルの上には俺と美琴のホットドック

「そんなの覚えてないよ。どっちでもいいだろ。俺は美琴が食べた奴だって気にしないけどな」



そう言つて俺はホットドックを一つとり食べる。

「ああ!?!?!?! 少しは気にしなさいよまったく」

そう言いながらもホットドックを食べる美琴

「ふーここも暑くなってきたわね。私ジュース買ってくる。十夜は何がいい?」

「美琴と同じ奴でいいぞ?」

「分かったわ」

はあゝあじいゝ

「こんにちは」

俺がテーブルで項垂れていると俺に声がかかった

「自分は海原光貴と言います。ええと...あなたは...」

「俺は神崎十夜だ。何か用か?」

「気を悪くしなければ教えて頂きたいのですが、貴方は御坂さんのお友達ですか?」

「気になるか?」

「ええ、自分の好きな人の側にいる男性なら当然 御坂さんはもつと人に対して「好き」と「嫌い」をはっきり言うべきだと思うんです。」

「あいつは素直だと思っけどな」

少しツンデレだけど...

「その“素直”にしたって照れや演技が入ってると思いますけどね。だから自分みたいな人間がずるずると追いかける羽目になります。こちらは本気でアタックしてるんです。本気で答えて欲しいものです。たえその答えが拒絶だとしても」

「ふうん。お前の言い分は分かった。けどアイツは素直に自分の気持ちを伝えることが出来ると思うぞ?」

「どうしてそう思うのですか?」

そりゃあ

「美琴が俺に告白した時の目が真剣そのものだったからだ」

「……えっ？」

「俺はその告白を快く受けたさ」

ガシャン

「美琴……」

「恥ずかしいこと言わないでよ！ちょっと話があるからこっち来て」

「……おう」

「もう、途中から聞いてたけどあんな恥ずかしいこと言わないでよ！！思い出しただけで顔が赤くなってくるじゃない！！」

「悪かったな。」

「……でも、これで海原光貴も諦めてくれただろうし。そうだ！お礼にお昼ご飯奢ってあげる」

「いや、それはいいよ。それにお前財布大丈夫か？」

「大丈夫よ。良いから奢られなさい！！」

「……はあくじゃあ頼むよ」

「美琴せんせいに任せなさい」

そう言つて美琴はモックの方へ言つてしまった。

コツコツコツコツ

「よう」

路地裏から海原が出てきた

「話と言つのはもうお済で？」

「ああ。美琴ならモックに行ったぞ。それと彼氏からの一言。もう美琴には付きまとうな」

「……それは断言できかねます」

「そつだろつな。ときに海原、お前は“魔術”と言つのがあると思うか？」

「!?!?・・・いえ、この天下の学園都市に魔術なんて非科学的なものが存在するわけないでしょう?」  
明らかに動揺してるのが分かる

「そつだよな魔術なんてあるわけないよな。まあ肉体変化と言つ能力もあるし、変化するのが魔術は限らないか、海原光貴・・・いや魔術師!!」

俺は漆黒の羽を広げて飛び立つ。  
すると俺が元いた場所は崩れていた

「まったく、上手く行かないものですね  
人をだますつて」

俺は漆黒の羽を羽ばたかせ、袋小路まで飛ぶ  
俺は漆黒の羽をしまい、後ろを向く

「この距離なら外しませんよ」

「ふう〜ん、やって見れば?」

偽・海原が手に持っている黒曜石のナイフでトラウイスカルパンテクウトリの槍を放ってくるが難なく避ける

「ぬるいぞ?」

俺は縮地で偽・海原に一瞬で近づきアッパーカットをかます

「ガハッ!!」

偽・海原は1〜2m吹っ飛ぶ

「・・・あなたにせいで・・・貴方さえ大人しくしていれば!誰も気づつ付けずににすんだのに!!御坂さんをだます事も無かつたのに!!」

「・・・しょうがねえな。んなら俺が大人しくしていれば誰も傷つけずにすんだというのか?ならまずはその幻想をぶち殺す!!」  
「はあああああ!!自分は敵です!!あなたの方!!」

偽・海原はトラウイスカルパンテクウトリの槍を放ってくるが避ける。

ドン

鉄骨が上から落ちてくる。俺は鉄骨を砕き、そのまま偽・海原を殴り飛ばす

ドゴン

「ぐはっ!」

どさっ

偽・海原がよろめいたところに丁度鉄骨が降って来る。

俺は縮地で助けようとしたが電撃を見て、それを止めた。

「・・・美琴か」

ドツドツドツドツドツドツ!!

「・・・自分は負けたのですか？」

「さあな」

「・・・攻撃は今回限りでは終わりません。あなたや御坂さんはこれから狙われ続ける。・・・守って貰えますか？彼女を。いつでもどこでも。都合のいいヒーローのように駆け付けて彼女を守ると

約束してくれますか？」

「・・・やだね。俺は美琴だけじゃない、自分の持てる力を全て使い、皆を守るよ。そうしないと美琴が悲しむからな」

「　　フツ、まったく・・・最低の返事だ・・・」

P M 1 : 0 4

P M 0 8 : 1 3

パアアアアン

「っち、遅かったか!!」

目の前には頭を打たれた一方通行が倒れてる。

撃つたのは・・・天井亜雄だ。

そして打ち止めのウィルスコードは・・・中断され打ち止めは再覚醒

「少し・・・寝ててくれ」

「なっ！お前は！！グハッ」

俺は蹴りを入れ天井を吹き飛ばす。

キキイイイイ

ガチャッ

「遅かったな芳川」

「貴方は!!」

「まずはこいつ等を運ぶのが先だ」

「そう「パアアアアン」グハッ・・・ケホッ」

「ハハッハハハハハ!!皆死んでしまえ!!」

「ったく、眠りの霧」

俺は眠りの霧で天井を寝かせる。

俺は芳川、一方通行、打ち止めを地面に寝かせ、芳川と一方通行の

破れた動脈をベクトル操作で口まで見えないホースのように運び、

警備員が来るのを待った。



## 第十六話 法の書

九月一日

今日は姫神秋沙が転入して来たこと以外何も無かった・・・  
．．．．．訳ではないのだが、俺は特  
に興味も無く介入しなかったなで割愛する。  
そこっ！作者がめんどくさかったからとか言うな！！

九月八日

（神崎十夜かい？）

(・・・俺以外に誰がいるってんだよ。なんだ？ステイル)  
俺が家でくつろいでるとステイル「マグヌスから念話があった。  
(君に手伝って欲しいことがあってね。)

(内容は？)

(オルソラ・アクイナスの奪還だ)

(奪還って・・・分かった。手伝うよ)

(場所は　　だ。なるべく早く来てくれよ？)

(はいはい。)

法の書か・・・まったく面倒な・・・

俺はコートを羽織り、短刀を腰に一本、袖に一本隠し持つ

「・・・さて、行きますかな」

俺は空間移動で待ち合わせの場所まで移動した

「　　今後の我々の活動についてお話するとしまひゃあ!？」

俺が着くと下の方で小さな赤髪の女の子が今にも倒れそうだった

「・・・何で来て早々・・・」

俺は愚痴を言いながら座標移動で女の子を俺の上に転移させ

ポフッ

キャッチした。

「大丈夫か？」

「えっ!？ひゃ、ひゃい!！」

「十夜!？何でここに!！」

「・・・当麻は毎回のように驚くよな・・・何故？」

「いや、そうでもないしと出番がなくなりそうで・・・」

ムッ、声に出ていたか・・・

「僕が呼んだんだよ。それにしても随分遅かったじゃないか」

「そうでも無いだろ。30分ボーっとして準備してから来たんだから」



俺は地面に降り立ち、赤髪の女の子      アニエーゼ「サンクティ  
スを降ろしながら言う。

「・・・もう怒りを通り越して呆れたよ・・・」

「ありがとう。最高の誉め言葉だ」

「オホン、ええ、では今から『法の書』、オルソラ「アクイナス、  
及び天草式の動向と、我々の今後の行動について説明しちみたい  
と思います」

緊張のせいかな、ふらふらしながら俺の服を掴みながら話している。

「現状、『オルソラ「アクイナス」は確実に天草式の手にあります。  
『法の書』の方も十中八九間違いないでしょう。今回の件に出張つ  
てる天草式の数は、推定でおよそ五〇人弱。下水道を利用して移動  
してるみたいなんです、今は地上へ上がったって可能性もあ  
るんですよ」

「つまり、何も分かんないって事かな？」

「はい。我々はそのに残存している魔力の痕跡から天草式の動向を  
迫ってますが、これが上手くいきやしません。流星は隠密生特化型  
宗教・天草式十字清教ってトコですかね」

「なるほど、理解した。なら俺は動きがあるまで寝させてもらっ  
ぜ？」

「えっ？・・・」

アニエーゼよ、何故そんな目でこちらを見るのだい？

「あゝ、俺疲れてるから休ませてくれないか？戦いになったらちや  
んと手伝わせてもらっからさ」

俺はアニエーゼの頭を撫でながら言う

「・・・わ、わかりました。テントまで案内してやるんで着い  
て来ちまってください／＼／＼」

「あ、ありがとう」

赤くなる要素が見当たらん・・・

俺は自分の体の上にずっしりとした重圧を感じたからである  
なんだ？

「むぎやー・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・ばぱア・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・In non posso mangiare alcuno  
piu qualsiasi piu lungo,・・・・・・」

体の上にはアニエーゼが寝ていた

・・・・・・・・・・何時の間に来たんだ？何故気づかなかった・・・・・・・・・・敵  
意を感じなかったからか・・・・・・・・

「まあいいか」

俺は再び眠りに着いた

ドンー！！

俺が再び目を覚めたのは爆発音を聞いてからだった。

「・・・・・・・・・・来たか」

俺は自分の影に潜り、移動した。

「ハンドアンドハーフソード、バスタードソード、ボアスピアソード、ドレスソード。まったく、この国の人間は本当に西洋圏ほくたちの文化がお好きだな！」

「まあ、どうでも良いんじゃない？」

「なっ！・・・まったく、君はいつも神出鬼没だな」  
「気にするな」

俺はステイルの影から出て行き、当麻の方へ向かう。

「君にやる。死にたくなければ肌身離さず持っている！！」

ステイルは懷から十字架のネックレスを取り出し、当麻に投げつける  
「ステイル俺には？」

「君は持っているだろ！！」

「ありや、知ってたのか」

そのとき、ドレスソードが天草式の少女により、無言で突き出された。

ゴウ！

「残念」

俺は袖に隠しておいた短剣を出しドレスソードを弾く  
いつの間にかインデックスとステイルはどこかへ消え去っていた。

「さて当麻。ここは俺に任せて行け」

「でも！！・・・分かった。死ぬなよ！！」

「誰に言っただ？」

俺が道を作り、当麻を通す。

当麻がいなくなったのを確認し、周りにいる四人の少年少女に言い放つ。

その声を聞き少年少女はいっせいに切りかかってくる。

俺はその斬撃を軽々交わす

「おいおい、どうした？そんなもんかよ」

俺は腰に隠してあったもう一本の剣を引き抜く。

「さあ、今度はこちらの番だぜ？」

俺は近くにいた少年に神速で近づき、水月に剣の柄を叩き込む。

すると少年は気絶してしまう。

「まずは一人目」

俺はさらに神速で近づき、もう一人の少年を峰打ちで気絶させる。

「さて、二人目。」

残ったのは二人の少女

「俺は正直女を殴るのは趣味じゃないんだが……そうも行かないようだな」

二人の少女は剣で切りかかってくる。

俺はその斬撃をよける

「……はあ拘束<sup>バインド</sup>」

俺は二人の少女の動きを拘束で止め、少年と一緒に壁に寄りかからせとく

「じゃ、ここでおとなしくしといてくれ。そのうち助けが来るよ。」

「……待って!!」

今まで無口だった少女が口を開いた。

「ん?どうした?」

「何故貴方のような力を持った人間がローマ正教に!」

「さあな。ただ、俺はイギリス清教に手エ貸してるだけだ。そこんどこまちがえんなよ?」

俺は今度こそ、当麻たちの元へ向かった。

「けどまあ、やるってんなら仕方がねえ。今日がお前さんの命日だ」

俺が当麻たちに追いつくと、当麻は2m近くある大剣を持つ男と戦っていた。

「違う……駄目だよ！とうま！！」

「その通りだぜ？」

俺は縮地で当麻と男 建宮斎字の間に割って入り、建宮に一闪。

ドゴン

「ガハッ！」

建宮は吹き飛び気絶する。

「あれはただの移動方だ。魔術でもなんでもない」

「……ッ！！また、十夜に守ってもらっただけかよ！！」

「……気にするな。悔しかったらもっと強くなれ」

「……静かだ……」

「どうしたんだい？いきなり汐らしくなって」

「いや、さっきまでの争いが嘘のように静まり返ってるな」

俺はステイルと空に浮かぶ星を見上げていた。

『キヤアアアアアアアアアア！！』

悲鳴が静かな空に響く

ドン ドガアン

爆発音も静かな空に響く

「はあ、やっぱりか。」

「君は何もかも知っていたように嘆くね。」

「知っていたからな。さて、もう手伝いは終わったよな？ここからは俺の個人活動だ」

「……勝手にしてくれ」  
ステイルはタバコをふかしながら返事をする。

「ご……ッ、があああああああああ!?!」

当麻に刺さっていた木片がいきなりひとりでに上下し始める  
「とうま!!」

インデックスは叫びあわてて彼の元へ駆け寄ろうとするが背の高い  
シスターの声に遮られる

「シスター・アンジェレネ」

「は、はい」

背の低いシスターは舌つ足らずに答えると腰のベルトを引き千切つて四つの硬貨袋を頭上へ投げた。途端、バサッ!と大きな布で空気を叩くような音と共に、袋の口からそれぞれツバメのように鋭い翼が六枚ずつ飛び出した。翼は袋ごとに赤、青、黄、緑の光りに輝く。

「きたれ。(Viene)十二使徒のひとつ、(pearson a dodici apostoli)徴税吏に(Loschiavo)ッ!!か、体が!!う、動かない……」

「なっ、私も!!クッ!!何故だ!!」

「……教えて欲しいか?」

そこには黒いコートを羽織った少年がいた。

「……教えて欲しいか？」

「なっ！！貴様は！！」

「それは、俺が手伝いを終え、天草式に付いたからに決まってるだろ？」

俺が右手の人指し指をクイツと右に傾けると、二人のシスターは右の方向へ吹き飛ぶ  
ドガン

「くっ！！貴様！！」

ピイイイイ！！

「チッ、退却命令ですか。シスター・アンジェレネ！！」

「は、はい！！」

背の高いシスターと背の低いシスターは暗闇の向こうへ走っていく  
「これで、分かったらうよ」

「解除」

俺は呪文を唱え、建宮に貼り付けられている束縛のルーンを解除する  
「あれが、十字教内世界最大宗教・ローマ正教の裏のやり方よ」

「その男の言ってる事が全て事実だったとしても、オルソラ・アク  
イナスはすぐには殺されないだろうね。ヤツらにはヤツらなりの事  
情がある。……だから上条当麻、今この瞬間にどこかに駆け  
出そうとするのは止める。君が出張ると余計にややこしくなる」

「……、事情って何だよ？」

「ローマ正教は世界最大の宗派なんだよ、とうま。その大多数はオカルトなんて知らないとはいえ、二〇億人以上の信徒を抱え、教皇と一四一人もの枢機卿が管理し、一二ヶ国に教会を持つほど肥大しちゃってるの。大きくなるのは良い事だけど、大きくなりすぎると困った問題が生まれちゃったりもするかも」

「つまりはあれよな。それだけ大きな勢力ならば、当然ながら様々な派閥があるってなもんよ。まずは教皇と枢機卿がそれぞれ治める聖堂区だけで一四二、さらに国や風土によって異なるので二〇七、おまけに老人と若者、男と女でいがみ合って二五二」

インデックスの説明に建前が説明を付け足す

「これだけ多くの派閥を持つローマ正教は、外側よりむしろ内側の方に多くの敵を抱えているとまで言われているんだ。同胞の些細な問題を寄つてたかつてつき回るといふ訳だ。そんな中、今回の件は非常にデリケートな側面を持つているんだろうね。『法の書』の解説は確かにローマ正教にとって脅威だが、かと言ってオルソラ」  
「アクイナス本人には何の罪もない。無闇に殺せば、世界中の同胞達がアニエーゼの敵になるだろうさ」

「そうか？ でも俺達だって悪い事してないだろ。なのにあいつら少しも迷わずムチャクチャ攻撃してきたぞ」

当麻はわずかに自分の腕に巻かれた包帯を指先で撫でる。

「異教・異端の場合は言い訳ができるのさ。『神の教えに背く者は罰しても構わない』……この素敵な一言で過去にどれだけの虐殺が正当化されたと思ってるんだい？」

「さっき私達を攻撃してきたあのシスター達もそんな考えで動いていたんだろうね。でも逆に、だからこそローマ正教は迂闊にオルソラに手をかけられないと思うかも。『神の教えを信じる者を殺めてはならない』からね」

「……………」

「じゃあ、なんで天草式はオルソラの暗殺を止めようとしたんだ？」  
「簡単だよ。例外があるというだけさ」



「例外だつて？」

「その通りだ。『神の教えを信じる者を殺めてはならない』……このルールにのつとるなら、教会から追い出された人間は『神の教えを信じない者』として殺しても良い事になるんだ」

「まあ簡単に言えばそいつは神の敵と言うレッテルを貼られるんだ」  
俺はステイルの説明を簡単に説明する。

「……ふっざけんな」

「残念だけでもう終わりさ。僕たちの出る幕はもう無いんだ」

「なんだよそれ！！人の命をなんだと思つてんだよ！！」

当麻はステイルの胸倉を掴みながら怒鳴りつける

「これは……ローマ正教で起きた事件を彼等のルールで裁いてるに過ぎないんだ。外部へ何の影響も無い以上、下手に僕達イギリス清教が文句を言えば、それを内政干渉と取られてイギリスとローマの間に大きな亀裂が走る可能性すら考えられる。……残念だが諦めるんだね、上条当麻。それとも君は戦争を起こしてでも彼女を助けるきかい？」

「……それは」

「まあ、少年。そこまでへこむなつて、イギリス清教に戦う理由は無くてもこつちにはおありなのよな。ちよつくら連中のアジトまでお邪魔して、仲間を救出するついでにオルソラ嬢も助けてやんよな。あに、こちらら少数精鋭で無駄にデカイ組織とぶつかるのには慣れてるよの。元々が幕府と対抗しながら発展して行つた宗教だからよな」

「まさか、一人で行くとか言うきかい？」

「……ふふん。それしかねえなら、それで行くしかねえつてのよ」  
それだけ言つて、建宮は先に行つてしまった。

「はあゝ行つちまつたよ。」

「……話は決まつたようだね。僕たちも解散して姿を隠そう。  
君はインデックスと共に学園都市に戻れ」

「……分かつた」

「ああ。それと、一つだけ聞いて起きたいことがあるんだ。」

「なんだよ」

あの十字架のキーホルダーの事かな？

「前に僕が君にやった十字架、今君は持っていないようだが？」

「ああ、悪い。オルソラに預けちまったままだった。あれ、そんなに高いものだったのか？」

頭をかきながらステイルに問いかける当麻。BINGOだな

「・・・いんや、君が持つてることに価値があつたんだが・・・まあい。もう今の君には必要ないものだろうからね・・・行くぞ」

「ああ」

そう言つて俺等は再び学園都市に向かい歩き出した。

「あつ、そうだ。冷蔵庫の中が空っぽだ。ちょっとコンビニに探して、適当になんか買ってくる」

「コンビニなら、皆で一緒にいけばいいかも」

「“場所”は分かっているのかい？」

「別に、その辺走り回つてれば見つけられるだろう？」

タッタッタッタッタ

当麻はコンビニを探しに走って行ってしまった

「・・・はあ、どうすんだ？行つちまったぞ？」

「どうもこうも、僕たちが行かなきゃしょうがないだろ？」

「とうま……」

「はあ、しゃあねえ。行くか」

俺たちはオルソラ協会へ向かって歩き出した。

「二〇〇人以上を相手に、この状況で、あなた一人に何がどこまでできるのか！！見せてもらおうとしましょうか！！ははっ、この数の差なら六〇秒で挽肉になっちまうと思いますけどね！」

「ああ、一人だったらな」

轟！！

歩脳が酸素を吸い込む音と共に完成途中の協会の支配していた暗闇が、オレンジ色の爆発によって一気に薙ぎ払われた。

「まったく、勝手に始めないで欲しいね。せっかく結界の上から上手く進入できたと言うのに。せめて十分にルーンを配置する時間ぐ

「はいは用意させておいてもらいたかったんだけど」  
俺たちは窓から姿を現す

「……す、ている……と、うや？」

「後の始末は僕等魔術師が着ける気でいたから素人は引っ込んで手もらう予定だったんだけどね。あれだけのウソ説明ウソ説得が全部台無しだ」

「まあ俺は魔術師じゃないけどな。依頼なんぞでな」

当麻より先にアニーゼの方が口を開いた

「イギ、リス清教？馬鹿な……。これはローマ正教内だけの問題なんですよ！！あなたが関わるというなら、それは内政干渉とみなされちまうのがわかんないんですか！？」

「いや、普通はそうなんだけどな。オルソラの胸を見てみなよ。そこにイギリス清教の十字架が掛けられているのが分かるだろう？分からないと言わせないよ？そこにいる当麻が掛けてやったものらしいんだよね。その十字架を誰かに掛けてもらう行為は、そのままイギリス清教の庇護を得る……。つまり先例を受けてイギリス清教の仲間になることを意味するんだよ。これがどう言う意味か分かるよね？」

「そつか。それで……」

アニーゼは、顔を真っ赤にして口をパクパクさせた後、

「そ、そんな詭弁が通じるとでも思ってたんですか！？」

「思っちゃいないね。きちんとイギリス清教の教会の中で、イギリス清教の神父の手で、イギリス清教の儀式に則って行われたものでもないし。だが、今のオルソラがともデリケートな位置に立っているのには間違いは無いだろう？ローマ正教徒のくせにイギリス清教の十字架を受け、しかもそれを行ったのは科学サイドの学園都市の人間なんだ。彼女が今、どの勢力に所属していると判断すべきか、ここは時間を掛けて審議すべきだと僕は思う。君達ローマ正教の一存のみで審門に掛けるといふなら、イギリス清教はこれを黙って見過ごすわけにはいかないんだよ」

俺とステイルはすたん、と地面に降り立つ。

「それに何より、“よくもあの子に刃を向けてくれたものだ”」

「お前ロリコンか？」

「僕とインデックスは同じ年だ!!」

「誰もインデックスの事なんて言っただけだな」

「う、五月蠅い!!・・・この僕が、それを見過ごすほど甘くやさしい人格をしているとでも思ったのか？」

「チイツ!一人が三人に増えたところで、何が」

「三人で済むとか思ってたんじゃないのよ」

「何!？」

轟!!

横合いの壁は爆弾で吹き飛ぶ

「俺が戦わなきゃいかん理由は、わざわざ問うまでもねえよなあ？」  
爆発が晴れると建宮と天草式の連中がいた。

「せっかくイギリス清教の連中と話し合って、お前さんが動く前に決着を付ける手はずを整えようとしたのに。お前さん想像以上の馬鹿だよな。・・・ま、見ていて楽しい馬鹿は嫌いじゃねえが」

建宮は呆れたように答える

「まったく、だから決着は誰かが着けるから、とうまは気にしないで良いよって言ったのに」

「いん、でつくす・・・」

最後に現れたのは白い修道着に身を包んだインデックスだった。

「でも、こうなっちゃったなら仕方が無いよね。」

助けよう、とうま。オルソラ・アクィナスを、私達の手で」

「・・・ああ」

うんインデックスは良い子だな」

「殺せ」

げっ、いきなりかよ!

「ボケーっとしてしていると死ぬよ!!」

「はん、誰に物を言っただ！てめえら死ぬんじやねえぞ！！」  
最後の戦いが・・・・・・始まった。  
オルソラ「アクィナスを助けるべく皆それぞれの思いを胸に敵へ駆け出していった。」

「オルソラ、体は大丈夫か？」

「ええ、こんなもの全然平気でございますよ」

「当麻いくぞ！！」

「お、おう！！」

当麻はオルソラを抱きかかえ、裏口へ走り出す。

しかしそこにはシスターの群れが

「チイツー！！」

ガギン

当麻が戸惑っていると、一本の長槍が当麻とシスターの間に刺さり、  
一人の少女が飛躍して来る。

「・・・・・・へっ、助太刀感謝するぜ！」

俺は魔力弾をシスターに、少女は槍でシスターをそれぞれ倒す。

「いけっ！当麻！！」

「おう！サンキュー十夜！！」

「礼ならその少女に良いな！ほら次が来た！」

ガギイン

俺は二本の短剣を取り出し、切り捨てていく。といっても全て峰打ちだが

俺が外に飛び出すと、五十人近くいるであろうシスターに囲まれた。  
「・・・・・・はあ、めんどくせえ」

俺はため息を付きながら詠唱を開始する

「闇を従え吹けよ常夜の氷雪。『闇の吹雪』!!」

詠唱の時間僅か2秒

周りに吹雪が吹き荒れ、五十人ほどいたシスターは全て気絶する。周りにいるシスターが少ないと思ったら、大人数が当麻とオルソラの元、インデックスの元へ向かって行っていた。インデックスの方は問題ないな。

「なら!!」

俺は翼を出し、飛躍する。上空にとどまり詠唱をする

「来れ、浄化の炎、燃え盛る大剣、ほとばしれよソドムを焼きし、火と硫黄、罪ありし者を死の塵に。『燃える天空』!!」

俺が詠唱を終えると燃え盛る炎がシスターを一掃した。

俺は再び地面に降り立つ。

「攻撃を重視、防御を軽視!玉砕覚悟で我らが主の敵を殲滅せよ!!」

しまった!!

シスターたちは衣装の中から万年筆を取り出す。

「止まれ……」

俺が一言嘆くと周りの動きが全て止まる

「なっ、体が動かない!!」

「僕たちもだ!!十夜君は一体何を!!」

「……これだけは使いたくなかったが……これから一生の人生を聴覚無しで彼女たちには生きて欲しくないからね。俺はなんだかんだで甘いな」

「まさか!!」

「そう、彼女たちは『シエールファイア摩滅の声』を回避するために自分の耳を潰そうとしたんだ」

「そんな……」

「ちっ!動きなさい!!この体!!」

シスターたちが体を動かそうとするが、体はピクリとも動かない。  
「……万年筆を消滅」

俺がそう呟くとシスターたちが持っていた万年筆は消えた。

「なっ、どこに!!」

「シスターを拘束」

俺がそう呟くとシスターたちは一斉に広場の真ん中に集まり、ひもで拘束される

「再び動き出せ」

「はあ、やっと動けたよ」

「どう考えたってあれだけの人数を相手にしちまいながら自由に敷地内を移動できるとは思えないんですけどね」

大理石の柱に悠々と背を預けるアニエーゼに上条当麻は新井息を吐きながらも笑って、

「まあ。ちよつとばかり、作戦があるからな」

「作戦? ああ。なるほどなるほど、そう言うわけなんですか。なあんだ。あれだけ格好付けて登場しておきながら、あなた、“仲間を囷にしちまったんですか。” 確かにウチの戦力がまんべんなくあな

たたちを襲っちまったら、誰もここまでたどり着けなかったでしょ



うけど、でも、ねえ？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「くっくっ。オルソラ」アクィナスは言っていましたよ。彼等は騙すのではなく信じることで行動する、とか何とか。あはは！まったく笑っちゃいますよね、結局あなたは今こうして誰かを騙して囷に使用って息を吸ってるってんですから」

「くっくっくはっはっは。本当に笑っちゃまうよな。アニエーゼ」サンクティスよお」

「なっ！！あなたが何故ここに！！」

「おいおい、いい加減気づけよ。戦ってる音でもまだ聞こえてんのか？」

「なっ！！まさか！！」

「俺が全部潰しておいたよ！！皆外で血を流して倒れてるぜ？あんたのせいだな！！」

そこにはけらけら笑う神崎十夜の姿があった。

「そ・・・・・・・・んな・・・・・・・・」

「おいおい、あまり子供をいじめるな。シスターたちは外で皆縛つてあるだけだよ」

上条当麻は神崎十夜の言葉を訂正する

「ちっ、面白くねえな」

ちよっと、脅そうとしただけなのに・・・残念

「なら、あなたたちを倒しちゃいましょうか！！」

「いやそれはできない。もう終わったんだよ幻想は」

「ああ、その通りだ。お前の幻想は終わっちゃったよ。アニエーゼ」  
「サンクティス」

当麻が言い終わると同時に扉が吹き飛び、オレンジ色の何かが入っ

てくる。

轟！！

扉のほうにはインデックス、ステイル・マグヌス、建宮斎次、オルソラ・アキナス。そしてその四人を囲むように上にいるのは……  
……『魔女狩りの王イノケンティウス』だ。

「使用枚数は四三〇〇枚。“数の上ではたいした事無いが”……  
……いや、天草式ってのは馬鹿にできないね。ルーンのカードの配置を使ってさらに大きな図形を描き、その図形をもって敷地全景の魔術的意味を変質させ、このオルソラ協会そのものを一個の巨大な魔法陣に組み返るなんて。一応、“そいつの右手”に干渉されないよう、この建物だけは効果圏内から除外してあるけどね……  
……そこにある物を全て利用した多重構成魔法陣　　こういった小細工は、僕には学びきれなさそうだ」

G y a a a a a a a a a a

イノケンティウスが唸りをあげる

「言つたる作戦があるって。こいつ等はこのためにカードを敷地内に配置して立つてだけさ」

「くっ、おもしろいじゃないですか。」

「行け当麻」

「ああ、終わりだアニエーゼ。テメエはもう自分で分かってんだろ。テメエの幻想はとっくの昔に殺されてんだよ。」

ダンという足音と共に当麻は走り出した。

そして

ゴガン！！

アニエーゼを殴り飛ばした。

アニエーゼの体が吹き飛び、背後にあつた大理石の柱を掠めて床の上を転がった。

「これで、終わりだ」



## 第十六話 法の書（後書き）

感想待ってます

## 第十七話 襲撃

俺は仕事も無く、いつもどおりのんびりしていたのだが、急に土御門から念話が入った。

（十夜、大変だ！！巨大な力を持った多数の何者かが学園都市を囲んでいる！！早く来てくれ！！）

（何？それは人か？それとも・・・）

G y a a a a a a a a a a

大きな雄叫びと共に、爆発音が所々から聞こえ始める

（一応、人だ！！）

（つちい！分かった。すぐ行く！！）

まさか・・・ロトか？

それだったら奴等の手には終えない！！急がなくては！！

「まったく、なんなのよこいつら！！」

「お姉さま、お気を確かに！！警備員アンチスキルが来るまでの辛抱です」

「分かってるわよ！！」

私、御坂美琴は黒子と一緒に学園都市に侵入して来た、何者かと戦っている。

しかし、戦力に差がありすぎている。

相手は四人。しかも一人一人の強さが半端無く強い。私たちはもうボロボロで今にも倒れそうなのに、侵入者たちは傷一つ負ってなく息切れの一つもしていない。

私が戦闘から意識を外してしまった時、

「お姉さま！！」

私に青白い閃光が向かってくる。

やばい、このままじゃ避けられない！！あんなものを食らったら死ぬ！！

私は本能が訴えかけてくる。

すると、目の前に黒子が転移して来た。

「黒子！！何を！！」

その時、黒子に青白い閃光は直撃した。見ていた人なら誰もがそう思うであろう。

しかし、そこに立っていたのは指一本であの閃光に対抗している愛しの人の姿があった

ふう、危ねえ。もう少しで二人とも消し灰になるところだった・・・

「大丈夫か二人とも？」

「十夜……逃げて……」

「十夜さん……逃げてください……」

何故？こんな雑種ごときに？

「零」

俺の指から瞬時に今まで対抗していた光が消える。

そのまま、相手の攻撃が当たる。普通ならそうだ。

しかし、今は相手が放っている光りが消えていく。

そして、さらに力を加えると瞬時に一体の口トを消した。

「なっ！一体何が！？」

「さて、お前等は俺の後ろに隠れてろ」

黒子が美琴に触れ空間移動で俺の後ろまで来る。

「さて、さつさと決めるか虚空<sup>セロ</sup>」

俺が放った青白い光りは残りの口トを呑み込み、そして消滅した。

「時の精霊よ。この場を元ある学園都市に戻したまえ」

俺が呪文を唱えると、壊れてボロボロだった場所が全て元通りの学園都市に戻る

「ふう、お前等大丈夫か？」

「大丈夫よ。」

「私ものです。助けていただきありがとうございましたの」

「気にするな。さて、俺はちょっくらいか無きやいけないからな」

「あつ、待つてく」

俺は黒子の制止を無視して空間移動で向かった

俺は空間移動の際にロトの反応があるところに実態に最も近い分身を作り向かわせた。

「ぐはっ!!」

ドゴン

「ははは、弱いな人間。この程度で私を止めるつもりか？」

「クッ!!」

シュン

「土御門!!大丈夫か？」

「うっ、神崎……アイツ、強いぞ!!」

「……」

明らかにロトとは違う存在感。

「おまえ……幹部か？」

「くつくく、あの馬鹿はそこまで情報を与えたんだねえ。そうだよ。僕は幹部の一人ドランだよ。」

幹部……ロトより遥かに強い存在

「土御門、離れてろ」

俺は土御門に離れることを促す。しかし

「なっ!? アイツに一人で向かうきか!? おまえ正気か!？」

「ああ、いたって正気だよ」

俺は土御門に触れ、1kmくらい離れた、建物の上に空間移動させた。



「くつくつく、僕に一人で挑もうなんて・・・無謀すぎる。呆れる位にね」

「ああ、そうかもしれないな。だが、やって見ないと分からないだろ！！全能力100%開放！！」

ドン

地響きと共に、俺から半径10mくらいの範囲で地面が1mほど沈んだ

「なんだ！？この異様なまでに強い力は！？」

「これじゃあ世界に被害が出すぎるな・・・まあ、久しぶりに100%出したから仕方が無いか」

俺は無意識のうちに、体から漏れていた魔力などを体の中で留めていた。

「さて、いっちょ逝きますか」

ドン

俺が地面を踏み込み光速の1000倍くらいの速さで、ドランの目の前まで行く。俺が踏み込んだ地面は抉れ、走りぬけた場所には小さなクレーターが出来ている。

ドゴン

俺は音速のスピードでドランを殴りつける。

「カハッ！！」

ドガッ バキッ

ドランは数百？吹き飛ぶ。

しかし俺はまたも一瞬で距離を縮める。

そしてドランを蹴り上げる。

「・・・・・・・・・・」

バギッ

「・・・・・・・・・・」

どうやら今の攻撃で絶命したらしい。

俺はドランを消滅させる。

分身の方も全ての口トを倒したようで、皆俺の元へ集まってくる。

「幹部か……たいしたこと無かったな。全能力停止」

すると、俺の中で渦巻いていた力が全て消え去る。

「幹部がこれじゃあボスもたいしたこと無いか。

今までで倒した異形物

口ト……14

幹部……1

「まだまだいるのか……しんどいな」

俺は翼を展開し、上空へ飛び立つ。

「このことは、忘れて欲しいからな」

「誘え、時の精霊。この学園都市を元の姿に戻したまえ。そして全ての記憶から異形物の記憶を完全消滅させよ」  
デリット

学園都市が大きな光に包まれ、やがて決闘の後とは思えない元の人が多い学園都市に戻った。

「死人も蘇る力が……」

俺の嘆きは誰にも聞こえず風に掻き消された

「ミサカネットワークに記憶の完全消去を確認、とミサカ1003  
2号は説明します。」  
デリット

『ミサカネットワークの記憶回路回復まで残り8秒、とミサカ10

039号は補足します』

『ミサカネットワークの記憶回路回復完了、とミサカ19090号は伝えます』

『それは忘れちゃいけないことだよ！！ってミサカはミサカは主張してみる！！』

ある所では異形物の記憶が蘇っていた。

## 第十八話 結標淡希

ピンポンピンポン

ガチャッ

「はい、どちらさまで……御坂妹？」

「お願いがあります、とミサカはあなたの顔を真っ直ぐ見て心中を吐露します」

どうしたんだ？そう思ったが口にはせず、ただ御坂妹を見つめた。

「ミサカと、ミサカの妹達の命を助けてください、とミサカはあなたに向かって頭を下げます」

俺は思った。妹達も変わったな、と。

「……行くぞ」

「……………」

黒子は血まみれで倒れていた。

先ほどあった、結標淡希との戦いで負った傷が酷いのだ。

（最悪、ですの……結標は……逃げましたか……）

最悪、この状況にはぴったり過ぎる言葉だ。

（無残、ですわね。敵を残し、処刑を待つて、その上で愚かにも相手を活性化のみならず暴走までさせて。白井黒子は一体どれだけの方々に頭を下げれば許されるんですの）

頭を下げるべき相手、真っ先に頭を下げるべき相手。黒子はある少女と、ある少年を思い浮かべた。

御坂美琴、神崎十夜。

あの二人なら、こんなピンチでも笑って帰ってきそうですわね、とそう思い笑う黒子。

（それでも少し望んで見たいですの……ま、いくら完璧なお姉様と十夜さんだからって、高望みが過ぎますわよね）

一人よがりな自嘲と共に、空間がミシリと音を立てた。結標が座標移動を発動させたのだろう

そして黒子は願った。

（どうか……どうか……少しでも、ここから離れてくれぐれも巻き込まれたりしないでくださいですの。お姉様。どうかお姉様を幸せにしてあげてくださいですの。十夜さん）

もう、結標淡希の攻撃は避けられない。そう思った瞬間、頭に響く声を聞いた。

（諦めるなよ、黒子！！）

まさしくその声は十夜のものだった。

カンカン

それとほぼ同時に、無人となったフロアの出口から誰かの足音が上がってくる。

バチバチ バサバサ

いや、足音だけじゃない。電気の火花が散らすような音や翼を羽ばたかせるような音も聞こえる。

（ああ・・・ッ！！）

駄目だ、と黒子は顔を真っ青にする。

黒子は必死に口を動かす。

「駄目、ですわ！こちらへは、来ないでくださいですよ！」

喉を震わせ、体に残った体力を絞りきり、最後の声を。

「これからここに特殊な攻撃が加わります！このフロアへ来るのは危険ですよ！いえ、このビルから離れてください！きっと建物ごと崩壊してしまいますわ！！」

ミシミシギシギシ

黒子の周りの空間が軋む。

「・・・ッ！」

まずい、と黒子は思った。

足音はそのままこちらへ向かってくる。

「逃、げ・・・ッ！！」

黒子はもう泣きだしてもしょうがない様な顔をしている。瞬間、グワツと、部屋中の空気が歪んだ。

「・・・ッ！！」

攻撃が始まる。

黒子は歯を食いしばる。

力が欲しい、しかしそんな夢のようなことは起こらない。結標に負けなければ！！黒子は後悔している

（お、ねえ、さま・・・ッ！！と、うや、さん・・・ッ！！）

黒子は最後に願う。あの二人が助かりますようにと。まるでどこかの親馬鹿のように

ゴッ！！

瞬間オレンジ色の光線が、床から天井へと突き抜けた

超電磁砲。

その能力を持った、たった一人の少女を黒子は思い浮かべる。

「こんだけ風通しを良くしてやりやあ、まだ間に合うでしょ」

あまりにも聞き慣れた、この声。

「私の出番はここまで、後は頼んだわよ……十夜！！必ず  
アイツを連れ戻してきなさい！！」

「おう！！」

黒子は顔を上げる。

すると、超電磁砲があけた穴から何かが飛んでくる。文字通り翼を広げ飛んでくる。

黒子が倒れている床は崩れ、崩壊を始めた。

しかし、落ちている感じはしなかった。まるで誰かに抱きとめられてるかのよう。

「悪かったな、遅くなって。言っただろ？諦めるなって」

黒子の目の前には六対の金色の翼をはためかせた少年がいた。

「さて、あのでか物を止めるかな？」

“彼”は右手を今にも空間から出てきそうなものへむけ、唱えた。

「消滅しろ 分子は原子に 原子は破滅への道 閃光撲滅」

彼が唱え終わった瞬間、空間から出て来そうになってたものは……  
……消滅した。

「貴方が、何で………。私のために命を張ったんですの？」

「……そりゃあ、“美琴達”に頼まれたからな。それに、ちゃんと後始末はしてやる。ヒーリング 治癒開始」

少年 神崎十夜は黒子の傷を癒す。

十夜は黒子を美琴に預け、自分の背中にある六対の翼で飛び立った。

「こちらA0001よりM0000へ。符号の確認の後、状況の報告に

」

しかし、直後に無線機の向こうから聞こえたのは銃声と、怒声だった。

淡希は思わず、無線機を体から話してしまう。  
そして再び体に近づけ、繰り返す。

「こちらA0001よりM0000へ。こちらA0001よりM0000へ。  
こちら        って聞こえてるんでしょう！！何でさっきから応答  
しないのよ！！」

『うああああ！！』

危うく握りつぶしそうになった無線機の向こうから聞こえたのは、  
情けない男の悲鳴だった。

無線機の向こうでは銃声が止み、情けない男の悲鳴とは別に、低め  
の女の声が聞こえる。

『自分の利益のために子供をたぶらかせて安全席からご見物とは良  
いご身分じゃん？私は子供に武器を向けない決まりを自分に課して  
るけど、子供のために武器を向ける事には迷わないじゃんよ』  
ひい、という悲鳴と共に銃声が鳴る。

『殺すと思うか、アホ。アンタがどれだけの子供達をどう手なずけ



ていたか、きちんと吐いてもらわなきゃその子供を助けられないじゃないか』

その直後、無線機は雑音しか聞こえなくなった。

（あ、あ……。連絡、連絡しなきゃ。連絡しなきゃいけないのに！何で、どうしよう？目的、目的、目的がナイト、私……ッ！！）

「あはぎやはっ！無様なローアングルのサービスさらしてくれてアリガトウー！」

ダゴン！！という爆音。砕けたアスファルトをさらに踏み潰し一方通行は夜空を突き抜ける。

その背には、巨大な暴風の竜巻のようなものが四つほど接続されている。

一方通行は途中にあるガラスの雨の層を食い破り、バキゴキと壮大な音と共に弾き飛ばす。



・・・それでも、俺はあのガキの前じゃ最強を名乗り続ける事に決  
めてンだよ。くそつたれが」

一方通行は小さく嘆きよるの闇へと消えて行った

「貴方は・・・!!」

淡希が俺に話しかけてきた瞬間、俺は眠りの霧で淡希を眠らせる。

「はぁ、ったく。（土御門、疲れた）」

（はいはい、心の癒しは彼女にでもやってもらっぜよ。それで結標  
淡希は？）

（ああ、一応今、確保しているぞ）

（なら部屋まで送って行っておいて欲しいニャー）

（はぁ！？なんで俺が！！ってか勝手に女のこの家に入れというの  
か！？）

（神さんは相変わらず紳士だニャー。まあ、よろしく頼むぜよ）  
ぶちっ

・・・なんだいまのぶちっって音は！！

その後、俺は結標淡希を家に送りましたとき。チャンチャン

終わり



## 第十九話 大覇星祭 前編（前書き）

お久です。PC壊れて更新ができなかった。orz  
アニメで姫神が大変なことに！？

大覇星祭の前編です。

どうぞお楽しみください！

第十九話 大覇星祭 前編

今日は大覇星祭だ。

こういつてもイメージの沸かない人が多いだろう。まあ簡単に言えば学園都市内の学校の合同運動会だと思ってくれてかまわない。しかし、ただいま俺は暑さでまったくやる気が出ないのだ。

しかし隣では、

「ねえ聞いているの？私が勝ったら罰ゲームで何でも言うこと聞いてもらうんだからー!!」

「はあゝへいへい。好きにしてくださいえ」

「絶対よー!!」

美琴に変な約束を取り付けられていた。

「はいはい。にしてもあちいな」

美琴はいつの間にか走り去ってしまっていた

「お前も苦労してんだな」

「ああ、当麻か」

後ろから歩いてきた当麻から慰めの言葉を受け取る

「・・・・・・・・・・はあ、開会式行くか」

「・・・・・・・・・・ああ」

大覇星祭が始まった。

午前10時30分

校長先生のありがたい話を寝ながら聞き、開会式が終わった。

俺等のクラスの集合場所へ向かって、歩いていると集合場所の方から口論のような声が聞こえた。

様子を見ると小萌先生と他校の男の先生が言い争っていた。

「だから！ウチの設備や授業内容に不備があるのは認めるのです！でもそれは私達のせいであって、生徒さんたちには何の非もないのですよーっ！！」

小萌先生が手を振りながら叫ぶが、男は気に留めた様子も無く言い放つ

「はん。設備の不足はお宅の生徒の質が悪いからでしょう？結果を残せば統括理事会から追加資金が下りるはずなのですから。くつくつ。もつとも、落ちこぼればかりを輩出する学校では申請も通らないでしょうが。ああ、聞きましたよ先生。あなたの所は一学期の期末能力測定もひどかったそうじゃないですか。まったく、失敗作を抱え込むと色々と苦労しますねえ」

「せ、生徒さんに成功も失敗も無いのですーっ！あるのはそれぞれの個性だけなのですよ！皆は一生懸命頑張っているっていうのに！

！それを・・・それを、自分たちの都合で切り捨てるなんてーっ！！」

「それが己の力量不足を隠すいい訳ですか。はっはっはっなかなか夢のある意見ですが、私は現実でそれを打ち壊してあげましょうかね？私の担当育成したエリートクラスで、お宅の落ちこぼ「やれるもんならやつてみな、その男」なっ！？誰だ！！」

つかつとなつて出て行ってしまった。

「ここにいるのが気づかないのか？エリートクラスを担当育成したつつつてゐるわりには随分な目をお持ちで」

俺は男の後ろに瞬間移動して、男の振り向きざまに小萌先生の隣に瞬間移動する。

俺が隣に行き成り現れたため、小萌先生もびっくりしている

「こつちだよクズ。俺のクラスメートや学校の知り合いを落ちこぼれ扱いしたんだ。俺等に勝つんだろう？まあ、一瞬で片付いて恥をかかないようにな」

「なっ！！・・・はん。いいでしょう。完膚なきまでに倒してあげますよ。ここでの競技は『棒倒し』。くれぐれも怪我人が出ないように準備運動は入念に行つて置いてください。対戦校からの忠告です。それと賭けをしませんか？私たちが勝つたらあなたには私達の学校で一生雑用係として働いてもらいましょう。」

「なっ！！神崎ちゃん、だ「いいですよ。引き受けましょう」神崎ちゃん！！」

「大丈夫ですよ。あいつ等もあんなに良い目をしてるんですから。まあその代わりこつちが勝つたら・・・そうですね。こちらの生徒を落ちこぼれと言つたことを訂正してもらおうか」

「はん。いいでしょう。もし勝てたらだがね」

男はハッハッハッと言いながらその場を去ろうとしたが、俺が携帯を取り出し在る人物に電話をかけ男にも聞こえる声で話す。

「もしもしアレイスターか？」

そう。俺が電話を掛けたのはアレイスター「クロウリー。学園都市



統括理事会理事長だ。

『どうしたんだ？十夜』

俺は肉体言語と言っなの O H A N A S H I をした結果、とても仲良くなれた。と言っても、昔のアレイスター・クロウリーのプログラムとだが。

「??? 高校に追加資金を出して欲しいんだが？」

『ふむ、申請があればすぐに出したのだが。よかろう』

「さんきゅー」

後ろで男がぎゃあぎゃあ騒いでるが無視して、

「統括理事会から追加資金が出るそうなので」

と小萌先生に伝え、皆の元へ戻った。

「てめえら、下がってろ。一発でかいのお見舞いしてやる」

「おいおい、神やんハメ外しすぎるなにやー（魔術と羽は使っなよ）」

「おう（わーってるって）」

俺は敵陣に向かって走り出す。

観客席ではあいつ馬鹿か？何で一人で走ってんだ？などの声が聞こえる。

「はっはっは！！地に伏せやがれ！！ドラゴンクラッシュ！！」

なんとなくの思いつきで手から光線を出し、生徒を一掃する。

「おまえら十夜に続けえええええ！！」

当麻が叫び、

『おおおおおおお！！』

まわりも賛同する。

そして一斉に駆け出す。

そして、倒れていた相手の生徒も起き上がり能力で対抗してくる。

俺にも流れ弾が飛んでくるが、常時作動している障壁に阻まれる。

この衝撃は超電磁砲が八方向から来ようが、びくともしない強度を持つ。ぶっちゃけ、魔力の塊だけど。

「行きますよー神やんカミやん。お高くとまった腐れエリート集団が放つ、あの二枚目オーラ。お笑い専門のわたくしめが木っ端微塵に打ち碎いてみせましょう！わはははははーっ！！」

いつの間にか隣には当麻と青髪ピアスがいる。

当麻は俺の後ろに隠れ、青はバレリーナ如くクルクルまわりながらいろんな場所から来る弾丸を避けている。

「ってか、何でお前はそんなに嬉しそうな訳？」

「ああん！？カミやん、愛ですよ愛！！汗と涙で躍動するスポーツ少女達の淡い心が織り成すサディスティックなラブが全国ネットで、いや多国籍放送で展開中なんやで！！こんな手段を選ばぬ膨大な愛、受け止められずしてハーレムルートなど切り開けるものかーっ！！」  
あつはははははは！！とさらにテンションを上げ青はもはや人間をやめてるような高速な動きになる

・・・・俺？人間やめてますが何か？

結果的にいえば俺たちの圧勝だった。

俺が敵を一掃する。それでも残ったやつは、他の奴らが土煙を巻き上げ奇襲する。

まあ、余裕だったわけですよ。

なんだって俺も途中立ち止まって、観客席に見つけた美琴に手振ってたし

え？敵は襲ってこなかったのかって？そりゃ襲ってきましたよ。全員土の中に埋まってるけどね。

今も救助隊ががんばって掘り返してますよ

「ど、どうしてみんな、あんな無茶してまで頑張っちゃうのですかーっ！！大覇星祭はみんなが楽しく参加するのに意味があるのであって、勝ち負けなんてどうでもいいのです！せ、先生はですね、こんなボロボロになったみんなを見ても、ちっとも、ちっとも嬉しくなんか・・・・・・ッ！！」

俺たちは無言で小萌先生の横を通り過ぎる。

「次の競技は・・・・・・ん？」

俺は目の前を通り過ぎた白い布で隠した大きな何かを持っている女に気を向ける

「・・・・・・」

そして口元を吊り上げる。

（オリアナ「トムソン・・・・・・」）

pipipipipipi

電話が鳴り、誰か？と見ると吹寄からだった。

「もしも『神崎十夜！今すぐ教室に来るように！！以上！！・・・ブチ』・・・何だ？」

俺はわけもわからないまま、座標移動で教室へ入った。

そして教室に入った瞬間もとの場所に戻った。

何故なら、なぜか裸の吹寄が机に座っていたのである。

「……見なかったことにしよう。」

俺は気にせず、歩くことにした。

「あゝ、さぼろっかな？」

俺は歩きながら、早くもそんなことを考える。

すると、いきなり浮遊感に襲われる。

後ろから走ってきた美琴に首根っこを掴まれたのだ

「おっしやー！つかまえたわよ私の勝利条件！！わははははははっ  
！！」

「……はあゝ」

俺はため息をつき、重力操作で美琴の足を動かなくして着地する

「えっ？きゃあ！！」

美琴は急に足が止まり倒れそうになる。

俺はそれをキャッチして重力操作を解く。

そして美琴をお姫様抱っこして美琴が向かおうとしてたであろう競技場まで翼を出して飛ぶ。

「なっ！！／／／／何やってんのよ十夜！！／／／／」

美琴は顔を真っ赤にして言う

「何っってお姫様抱っこ。……ついたぞ」

俺は競技場の地面に降り立ち、全速力でゴールを駆け抜ける。

「おっしやー一番！！って俺が喜んでどうすんだよ……」

「……（神崎十夜、一応『借り物』の指定は間違っていないよ  
うだけど、よっぽど女の子に縁があるようね）」

「……聞かなかったことにしよう  
」

じつとこちらを見てくるが無視だ無視！！

「あゝ美琴？大丈夫か？」

「……なんで？」

「え？」

「何で手伝ったの？十夜負けたら何でもいうこと聞かなきゃいけな

いのこ」

「あゝそんなこといったな。でも美琴なら大丈夫でしょ」

「…………ふふ、覚悟しておきなさい。」

そいつって今まで美琴が飲んでいたスポーツドリンクを顔を赤くして渡してくる

「こ、これは、お、お礼よ／＼／＼／」

「おう、サンキュ」

顔を真っ赤にした美琴は表彰台のほうへ消えていく。

俺は座標移動で姿を消した。

俺はその後、競技には出ずに学校の屋上で寝ていた。いわゆるサボリだ。

俺が目覚めたのは魔術が発動したときだ。

俺は一瞬で魔術の発動した場所へ行く。

すると吹寄が棒にさわり、倒れかけていた。俺は神速を使い吹寄の所までいき、優しく抱きとめる。そして魔術を解除する。

「早くタンカーを！！（土御門は当麻を連れて行け）」

「（あ、ああ。すまん）」

「吹寄エえええええええええッ！！」

「この者に癒しの風を……クール」

俺は誰にも聞こえないような小さな声で回復呪文を唱える。

「…………くそ…………上等だオリアナィトムソン…………こ

れがテメエのやり方だつて言うんなら。無関係な人間を散々巻き込んだ拳句に、それを眺めて何も感じ無いって言うなら

テメエのふざけた幻想は、俺がこの手で跡形も無くぶち殺してやる」

俺は吹寄を『冥土返し』がいる病院まで付き添いで言つた後、“魔法”を使いオリアナに気づかれぬように探索を開始する。

俺はオリアナを見つけた後すぐに座標移動でオリアナのところへ向かった。

俺がオリアナの元へついたときにはすでに当麻たちはオリアナの場所を突き止め、対峙していた。

「……お前が仕掛けた術式で、まったく関係の無い人間が倒れたぞ。覚えてるか、お前と初めて会った時に、俺と一緒にいた女お前の目には、あいつが魔術と関係のあるように見えたのかよ」

「この世に関係の無い人間なんていないわ。その気になれば、人間誰とだって関係できるものよ？」

「分かつては……いるんだな。分かつていて、それでも反省する気は無いんだな？」



「なぜあなたがここにいるんですか、アポロン!!」

「.....」

しかしアポロンと呼ばれた黒いフードのやつは黙ったままだ.....

「ってオリュンポス十二神の一人じゃねえか!!」

「.....十夜さん場所を移します」

いきなり場所が変わったと思ったら、そこは以前に俺が修行をした重力が何倍にも膨れ上がる部屋だった。今の重力は俺のいた世界と変わらないようだ。

「.....アテナ、どういうことだ？」

やっと冷静になった俺はアテナに問いかける。

「.....実はこの頃、神界で多くの神が突然姿を消しているんです。」

「ということはあいつもそのうちの一人だって言うことか？」

「はい。消えた込みの中には私の父.....私たち神を統べる存在。ゼウスも含まれていて今、神界は仕事に追われています。」

「それじゃあ、こんなところにいていいのか?.....まあいいや。」

アポロンとか言うやつ、何で突然姿を消したんだ？」

「.....」

俺が問いかけるも、アポロンは黙ったままだ

「そうか、なら喋らせてやるよ!!」

俺は能力を完全に開放、そしてアポロンの周りを陥没させる。

ズゴゴゴゴン!!

煙が晴れるとそこには少々傷を負っているが普通に立っているアポロンがいた。

「ちっ、さすがにオリュンポス十二神の一人.....ならこれはどうだ？」

俺は右手に魔力、気、そして神力を集めていく。

やがて力は形を成し、一振りの剣となる。

「神殺しの剣だ。なかなかの力だろう？」



俺は剣を右手にアポロンに飛び掛る。

「神崎流・神殺し壱の太刀!!」

俺の剣はアポロンをしっかりと捕らえ突き刺した。

しかしそこにはアポロンはいなかった

「な．．．．．に．．．．．がはっ!!」

俺の腹にはいつの間にかアポロンの蹴りが入っていた。

ドゴン

「がはっ!!」

俺は数十m吹き飛び土煙が舞う。しかし俺は空中で体勢を立て直しアポロンへ向かっていく。

「オラッ!!」

俺が剣で切りつけるがアポロンはその剣を砕き、俺を殴りつける。

ドゴン ザシュッ

アポロンが俺を殴ったと同時にアポロンの心の臓には俺の神殺しの剣が刺さっていた

ドロン

アポロンが殴った俺は消え、後ろから本物の俺が現れる。

実はさっきアポロンに吹き飛ばされたとき土煙に隠れ、分身を一人アポロンに向かわせ俺は影を使って、アポロンの影に潜り込んで、隙を見つけさしたのだ。

「グガッ!!．．．．．う、うう．．．．．お、俺は．．．．．ア  
テ．．．．．ナ．．．．．」

「アポロン!! いったい何があっただんですか!？」

「グッ．．．．．シヴァが．．．．．みんなを操って．．．．．」

「シヴァって破壊神のか!？」

「．．．．．シヴァは神界を追放されたんです」

「ああ．．．．．あいつは．．．．．神界に．．．復讐して．．．．．  
新しい．．．．．神を統べる．．．．．王に．．．．．なると．．．．．」

「・・・・・・・・神を統べる王・・・・・・・・」

「君・・・・・・・・たちに・・・・・・・・いわなければならないことがある・・・・・・・・君たちが倒したのはすべて・・・・・・・・ロトだ・・・・・・・・ロトはいくらでも作られる・・・・・・・・幹部・・・・・・・・というのは・・・・・・・・俺らの・・・・・・・・ことだろう・・・・・・・・シヴァを・・・・・・・・とめてくれ！！・・・・・・・・」

アポロンはそれだけ言って、絶命した。

「・・・・・・・・・・・・・・・・絶対止めてやる。だから安心して眠りな」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

俺たちはアポロンを処分して、元の世界へ戻った

第二十話 大覇星祭 中編（前書き）

来年もよろしくお願いします!!

## 第二十話 大覇星祭 中編

俺が元の世界に戻ると、なぜか土御門が倒れていてオルソラが逃げたところだった。

「……破壊神シヴァか……」

俺は一人、復讐を考えるシヴァのことを考えていた。

何であいつは復讐なんかを？

そもそもあいつの復讐って何だ？

考えれば考えるほど謎が深まっていく。

俺は土御門に近づいて思考を一旦切った。

「この者に癒しの風をクール」

俺が呪文を唱えると土御門の顔が苦痛のものから元の土御門の顔に戻る。

しかしまだ気絶はしたままだ。よっぽどオリアナの攻撃が効いたのだろう。

「おう当麻、十夜くん。こつちだこつち!!」

「あらあら。そんなに大きな声を出してはいけませんよ」

俺はただいま、当麻に連れられて喫茶店に来ている。

俺たちが喫茶店に入ると窓際の六人掛けテーブルに、見知った顔があった。

当麻の両親たちである、刀夜さんと詩菜さんである。

刀夜さんは腕をまくったワイシャツにスラックスという格好で、詩菜さんは薄いカーディガンに足首まである丈の長いワンピースを着ている。夫婦というよりどこかの令嬢とお迎えの運転手みたいに見える。もなくもなかった。

「ご無沙汰しています、刀夜さん。それと初めまして当麻のお母さん。俺は神崎十夜です。」

「ああ、久しぶり」

「あらあら。誰かさんと違って礼儀がいいこと。当麻さんの母の詩菜です」

「よろしくお願いします」

俺は軽い挨拶と自己紹介を済ませる。

「いや、毎年毎年思うんだが、大覇星祭っていうのはすごいな。とにかく場所取りがハードだ。こちらも子供に混じって一緒に競技しているような気分させられる」

「あー、あれだ。学食とか購買とかの大混雑を、街全体でやってるようなモンだろ」

刀夜さんの言葉に当麻は返す

「ふむ。まさに学園都市だな。おっと、ちょっと詰めないと座れないか」

「あらあら。それなら『ヒレカツサンド』目掛けて人ごみに突撃してみるのも面白いかもしれないわね。明日はそうしてみましようか。



自然な流れなんてあるもんか！そもそもいつもアンタの側にくっついてるこの子はどこに住んでる誰なのよ！？」

「む？」

美琴に指を指されたインデックスが顔を上げた。

「詩菜さん。このライスサンドおいしいです」

「あらあら、十夜さんは刀夜さんと名前は同じなのに刀夜さんとは違ってお世辞上手なんですね」

「お世辞じゃないですよ」

俺はライスサンドを食いながら事を眺めていた。

「誰って、そりやお前」

当麻は途中まで言ったが途中で言葉を詰まらせた。

そりゃそうだ。ここであればたら大変なことになる。

「そうだと当麻、言われてみればその子は誰なんだ？泊りがけで海へ行った時も一緒に付いてきていたが、海の家では父さんたちの質問も上手くはぐらかされていたし」

ぶつと当麻が吹き出しそうになったところでさらに横から美琴が

「う、海って！と、とととと泊りがけで海ってアンターっ！？」

「…………カオスになってきた。」

「かく言う短髪だつて、どこに住んでいる誰なの？とうまのガールフレンドかなんか？」

「えっ！？い、いや、別に私はこんなのと何かある訳じゃ…………」

「

「とうまの学校の応援にも来てたよね。確か『ぼうたおし！』の時」

「ちがつ、ちょ、黙りなさいアンタ！！私は十夜一筋なの！！何で

こんなの何かと！！」

「…………カオスだ…………誰か助けてくれ」

思わず思ったことが口に出てしまった。

俺は仕方がないので助け舟を出す事にした。

「はあ、まずは美琴落ち着け。インデックスは俺の親戚だ。俺は元々当麻の部屋の隣に住んでたんだ？それで今は自分の家に住んでる

んだ。それで空いている当麻の部屋の隣の俺の部屋にこいつは住んでるんだ。わかったか？」

途中でインデックスが何か言い出しそうだったが、遠隔操作でインデックスの口を塞いでおいた。

「はあ、まあそんな感じだ。」

当麻は俺に助かったと目で合図してきたのでかまわないと返しておいた

「とうま、とうま、私はいい加減お腹がすいたかも。今日はとうま、お弁当作ってこなかったの？」

「あら。今日は、という事は、いつもはどうなのかしらね。当麻さん」

笑顔で首を斜めにかしげる詩菜に俺は嫌な汗が浮かぶ。

「いや、違うのよ母上！こいつは近所に住んでる子でちょっと料理ベタだからいろいろある訳ですね」

「え？いやとうま、近所っていうか……」

「ああ、近所っていうか隣だったな。ってか女の子として料理ベタの部分に引っかけかりを覚えないうてのはどうなんですか！？」

「でも、できないものはできないし」

「くそ、本気で食べるほう専門ですかインデックス！？一方その頃御坂はどうなの家事とか！」

「……また、カオスに戻りかけていく……」

当麻の右手は穏やかな空気さえもぶち壊すというのか！？

「は？ま、まあそりゃ私だって学習中のみですから多少はね。さすがにペルシャ絨毯のほつれの直し方とか、金絵皿の傷んだ箔の修繕方法とか完璧に覚えてるって訳じゃないけど」

「美琴ちゃん……そもそも普通の日本のご家庭にペルシャ絨毯とか金絵皿は存在しないし、それは家事ではなく職人芸って言うのよ？」

美琴の前に座っていた大学生くらいの女性がやんわり告げると

「うつ！？だ、だって常盤台中学の家庭科じゃ確かに……」



「！！それに十夜の家にもあるし十夜もそれぐらいできるわよ！！」

” LEVELE5の頂点に君臨していたのだから と言おうとした当  
麻の口を塞ぐ。

「まあ、とりあえずご飯を食べるとしようか。当麻と十夜君、そちらのお二人にはありがとうって言うておくように、わざわざ当麻たちに来るまで何も食べずに待っていてくれたんだぞ」

一方、美琴の向かい側に座っていた大学生くらいの女性は淡く笑うと「まあまあ。ようやく待ち人が来たんだから、さっさとご飯にしちやいましょう。えっと、お名前は神崎十夜君と上条当麻君で良いのかな?」

「そうですけど。あの、そっちは御坂のお姉さんか何かで？」


H  
A  
A  
A  
A  
A  
A  
A  
A  
A  
A  
! ?  


上条サイドのテーブルの俺以外が仲良く絶叫した。

「えーっと、メチャクチャ遅れたけど母さんは何を頼むわけ？」

んだぞ。どうよ美琴、これってちよつと母親っぽくない？」

「……………母親っぽいんじゃないで、ちゃんと母親してくれないと困るのよッ！で、そっちのバッグには何が入ってるの？」

「へっへっへー。見て驚くんじゃないわよ」

美鈴さんはなにやらバッグを漁り始め、巨大なチーズの塊や、白ワインに銀色の寸胴鍋、小型ガスコンロなどを取り出してくる

「じゃーん！！今日のメニューはチーズフォンデュッ！！」

「学園都市に危険物なんか持ち込んでくるんじゃないわよ！！」

「スパン、と美琴は美鈴さんの頭をはたいた。一方美鈴さんはわざとらしく瞳をウルウル潤ませ、

「うわあー、娘にぶたれたー。でもあれよ。エクササイズも大事かもしれないけど、小さなお弁当をチマチマ食べてるだけじゃ大きくならないって。それだと逆に育つて欲しい所に栄養が行き渡らないかもしれないわね。もう、私が何でこんなに大量の乳製品チーズを持ち込んできたと思ってるんのよ。娘のためでしょー」

「なっ、ちよ……………育つとか、大きくなるとかって、いきなり何の話し始めてんのよ」

「あらーん？何の話かしらーん？私は骨の健康を考えてカルシウムを取りましようって言ってただけなんだけど……………もしかして、美琴ちゃんてば他にもどっか具体的に大きくなりたいトコ口があつるのっかなーん？そもそも何で大きくなりたいなんて急に考え始めちゃったのかなーん？……………あっ、そっかー美琴ちゃんにはいたもんねー、こ・れ・が」

そういつて美鈴さんは小指をピンと立てる

「だっ、黙れバカ母ッ！ええい、アンタ達もそんなキョトンとした顔でこっち見てんじゃないわよ！！」

顔を真っ赤にした美琴は美鈴さんに怒鳴った後、俺達になぜか怒りの矢先が向いたようだ。

「でもまあ乳製品が必要かどうかはさておいて、いっぱい食べたら育つってのは、生物学的に当たり前の事よ。縦に伸びるか横に伸び

るかは別問題だけどね。食べたたら太るつてのは単に体の管理ができていないだけ。摂取量と運動量を調節すれば、きちんと育って欲しい所が育ってくれるわ。欧米の食文化なんてすごいじゃない。あんなバケツみたいな量のご飯食べてりゃ、そりゃ日本人より良い体格にもなるわよね。胸がデカイと人生得するわよーん？」

そう言いながら美鈴さんはわざとらしく両手を挙げて「うーん」と伸びをした。背中が弓のように反らされた事で膨らんでる部分が強調される。ぐぐつ、と発展途中の美琴はわずかに怯み、

「べ、別に。いっぱい食べたら体がいっぱい育つなんて、ほとんど迷信じゃない。それに体があまり育たなくなつて十夜は受け入れてくれるわよ、ねっ、十夜？」

「ああ、美琴は今のままでも十分可愛いよ」

「なっ！？／＼／＼／＼／＼」

「あらーん、十夜君もやるわねーん」

「まあ、美琴とよくいるんで。もう慣れちゃいましたよ。いやー旅掛さんの娘とは思えませんね」

俺はそこまで言うてからやつちやつちと思つた。俺は美琴に話してなかつたのだ。旅掛さんと面識があることを。

「あれ、何で十夜君はパパの事知つてんの？」

「そつよ、それ初耳よ」

「……………禁諸事項です」

「ちょ、教え「禁諸事項です」……………もういいわよ」

何とか逃げ切ることに成功した。

「あゝ眠い」

俺は当麻たちと別れた後、公園に座っていた。

「寝るかな」

「寝てはいけない。次の競技がある」

「アーン？」

俺は声のしたほうを向いて驚いた。

「ひ、姫神！？び、びっくりした……………気配しなかったぞ？」

そう、俺の隣に姫神が座ってたのだ。

「……………何気に遠まわしで影が薄いといわれた……………それと姫神じゃなくて秋沙」

なぜか姫が……………秋沙は最近、自分のことを名前で呼べと主張してくるのだ。

まあ別にかまわないが

「お、おう悪い秋沙。で、どうしたんだ？」

「ちよつと困ったことがあつて。十夜君を探してたの」

「困ったこと？」

「うん、小萌先生が。トラブルを起こしていて。何かとても起こっているみたいなの」

「????」

「こつち」

俺は秋沙に手を握られ引つ張られる。

「……………」

「どうか、したの？」

「いや、女はわかんねえなーって。美琴は自分から手をつないでくるくせに顔を真っ赤にして俯くんだけど。秋沙は気にしないんだなーって」

秋沙は握ってる手と俺を交互に見て、腕に抱きついてきた。

「……………どうしたんだ？」

「……………こつち／＼／＼／」

姫神は赤くなりながらも俺をぐいぐい引つ張っていく  
「・・・・・・・・女はやっぱりわからない」

「あそこ、あそこ。小萌先生と前に私を助けに来てくれた人が言い争ってて。どうして良いのか分からないの」

秋沙は三沢塾の事件を思い出しているのだろう。

「あの時、十夜君は死んだ。けど今は生きている」

「ああ、あん時は悪かったと思ってるよ。でもまあ勝ったんだろ？」

「・・・・・・・・・・やっぱり、あのときは十夜君が・・・・・・・・」

「さあ、何のことかね？」

「あの時、あなたが倒れたすぐ跡にアウレオールの体が動かなくなつて、あそこにいる人が動けるようになった。そして上条当麻のすぐ後ろにたくさんの武器が出てきた。」

「・・・・・・・・さ、この話はここで終わりだ。俺はちよつとステイルを助けてくるよ」

俺は歩き出すが秋沙の言葉に静止する

「まっつて」

「？」

「・・・・・・・・ありがとう」

消えそうな声で秋沙はそういった

「・・・・・・・・・・おう」

俺は再び歩き始めた。

俺がステイルの方へ歩いていくとステイルもこちらに気づいたようで、やれやれといった感じでタバコの箱をひとつこちらへ投げてる。

「あつ！そつちに投げたのですか！」

俺はステイルが投げてきたタバコケースを受け取り、

「プラクテ・ビギナル火よ灯れ（アールデスカット）」

タバコに火をつけ、すう。

「ふーはぁー」

「あっー！神崎ちゃん、未成年者の飲酒喫煙は禁止されてるのですよー！！」

「はぁ、ステイルさつさで行け。」

俺はタバコケースを指で弾き、ステイルに返す

「ああ、後は頼むよ」

「おう」

「聞いているのですかー！！ですからね！！」

「あー小萌先生？俺未成年者じゃないし」

「嘘です！！なら何故高校に通っているのですかーっ！」

「………めんどい……」

「小萌先生、少し落ち着いて」

「姫神ちゃんもどうか言ってください！！神崎ちゃんたら未成年なのにタバコを吸ってるんですよーッ！！」

「だから………アーツ！！もう、うつせえな！！てめえ黙れ！

！俺はお前ら人間よりはるかに長く生きてんだよ！！分かったら黙つてろ！！」

「ひっ！！」

俺の怒鳴り声と僅かな殺気に当てられて若干なみだ目の小萌先生。対して秋沙は

「人間より？………十夜君は人間じゃないの？」

「………ああ、そうだよ。人間じゃねえよ」

「だったら、いったい何？」

「そ、そうです！！神崎ちゃんが人間じゃない分けないのです！！」  
「………はぁ………秋沙ちよつとこつちこい」

「えっ？」

疑問符を浮かべながらもこつちへ近づいてくる秋沙

カプツ チュー

俺は秋沙の首元に噛み付き血を吸う

「えっ！？まさか！！でも、そんなことしたら！！」

「チュー……ああ、うめえ！！」

「えっ！？」

「あー、俺にそんな吸血鬼殺しとか効かないから」

「吸血鬼殺し？いつたい何の話をしているんですか、神崎ちゃん？それよりいきなり女の人の首筋にキスするなんてどういうことですか！！」

「小萌先生、違う。これ見て」

秋沙は小萌先生に首筋を見せる。

「噛んだ……後？」

「そう。十夜君は吸血鬼」

「……それもちよつと違うな」

俺は秋沙に近づいていき首筋に手を触れる。

すると首筋の傷が消えていた。

「まあ、俺のことは秘密だ。ここまで言ったのは統括理事長と二人くらいだぞ。特別だからな」

俺は話をここで切り歩き出す。

それになぜか小萌先生と秋沙がついてきたがもう何も言っまい

「んじゃ、俺ちよつと出店めぐりしてくるわ」

「次の競技までには絶対帰ってくるんですよー！！」

「……善処する」

十夜が走っていく姿を小萌と姫神

「……はあ……」

姫神はため息を吐きながら十夜が走っていく姿を見守っていた。

「？姫神ちゃんは何神崎ちゃんのことが気になるのですか？」

「……………」

姫神の動きがピタリと止まり、姫神には珍しくフルーツジュースの入った紙コップを手から落としそうになって、慌てて掴みなおしていた。

「事実であるのには間違いはないけど。その言い方だと、直球過ぎて色々な誤解を生むかもしれない」

「違うのですか？」

「……………」では、小萌先生も十夜君が気になっているの？」

ズベン！と小萌は何もないところで足を絡まして転んだ。チア衣装のミニス力がめくれそうになるが、その先はギリギリのラインで見えない。小萌は勢いよく顔を上げると、

「なっ、何を言ってるのですか姫神ちゃん！先生は担任とかいて神崎ちゃんの担い方を任されている者なのですよ！き、ききき気になると言ってもそれは神崎ちゃんの将来についてであって、そんな直球な言い方をされるとかえって複雑な意味に取られかねなくて

「

「それと同じ」

「……………」

小萌はしばしの間黙る。姫神がカップを持っていないほうの手を差し伸べると、小萌は細い手を掴んで立ち上がる。姫神は、転んだ小萌がどこも怪我をしていないことを確かめると、安堵したようにほんの少しだけ目を細める。

「でも。さっきみたいな言い方は避けたほうが良いかもしれない。

私と十夜君はさほど仲良くもないし、変な誤解をされたら困るのは十夜君のことだし。」

そして姫神はけれどと続ける。

「好意を持っているのは確か。でも十夜君には常盤台のエースがいる。私なんかがつりあうわけない」



「む？と小萌の顔色が僅かに変わった。」

「ははあ。姫神ちゃんはそのような風に考えているから、神崎ちゃんの前ではナイトパレードの話題を避けてきたのですね。あれだけ事前配られたパンフレットを念入りに見ていたくせにー、ナイトパレードは学生さんにとって、ある意味では昼間の競技と同じくらい苛烈な戦いかもしれませんからねー」

大覇星祭期間中は、日没の後にイルミネーションやレーザー光線による大規模なライトアップが行われる他、協議終了後には電飾だらけのオープンカーや移動型のステージなどが学園都市全域でパレードを行う。大覇星祭はテレビ局の協賛を受けている事もあり、パレードの規模はかなりのもので、芸能人なども多数参加するのだ。

普段は夜間の外出を取り締まり、完全下校時刻を交通機関の最終便に設定するほどの学園都市統括理事会も、この日だけは夜遊びを推奨する事になる。おかげでクリスマスやバレンタインとまではいかないにしても、生徒たちの間ではかなり人気のあるイベントとなっていた。

が、

「無理だよ」

姫神は一言で言った。

「私なんかが、稲荷誘ってみたとしても、十夜君は面食らうに決まっている。似合わないもの。だからこんなのは、言い出さないほうがいいと思うの」

ほんの僅かに細められた彼女の目は優しみを帯びていた。しかしそれとともに悲しみも帯びていた。

「そんな事は無いですよ。神崎ちゃんは驚くかもしれないですけど、それは嬉しいから驚くんだと思います。神崎ちゃんは、姫神ちゃんが笑えば嬉しいと思うでしょうし、姫神ちゃんが泣いたら哀しむはずですよ。ああいう子ですからね、先生だってそれぐらいは分かるですよ。」

自分より格段に背の高い教え子を見ながら小萌は言う

「だから、姫神ちゃんが楽しいと思うことに神崎ちゃんを誘えば、きっと喜ぶと思うのです。それがナイトパレードだって言うなら、何の問題も無いと思うのですよー」

姫神はその言葉に目をパチクリとした。

普段は無表情なその顔に、僅かな驚きの表情が加わっている。

姫神は、フルーツジューズの入った透明なカップを軽く揺らす。それから、小萌に向かって、本当に少しだけ目を細めて笑みの形を作ると

「誘わないったら、絶対に誘わない」

「むっ！せつかく先生が気弱な姫神ちゃんの背中をグイグイと押しているって言うのに、いったい何を意固地になってるのですかーっ！？」

「とにかく、誘わないの」

むーっ！と顔を真っ赤にする小萌を見て姫神はこっそりと肩の力を抜いた。

出店めぐりに行くといった俺はこっそりと裏路地に身を潜めた

（アテナ・・・いったいどういうことだ？この先起こることがまったくわからないぞ？）

（実はこちらもこれから先の未来に関するデータがすべて消されているのです。それは形としたものだけでなく記憶からも）

（・・・・・・“あいつ”の仕業か？）

（・・・・・・おそらくそうか！？十夜さん来ます！！）

（分かっている！！）

俺たちが念話で話していると空間が歪み俺は歪みの中へと吸い込ま

れた。

「カツカツカ、マツテイタゾニンゲン」

（アテナやつは？）

（カオス。混沌の神です）

俺たちが行き着いたのは真っ暗な世界だった。

木々は枯れ、地面は割れている。

「ケツケツケカクゴシロ！！」

その怒声とともにカオスは襲い掛かってきた。

俺はとっさにその攻撃を避け、日本の短剣を取り出し、斬りかかる。

「斬鉄閃！！」

ザシユツ

「神崎流 光と闇の洗礼！！」

ザシユツザシユツ

「この者に光さす道を。すべてを背負いし十字架よ。罪の数だけ降り注げ！！千の十字架サウザントクロス！！」

ズガガガガン

（・・・・十夜さんやりすぎです）

まあ少しやりすぎた間はある。なぜなら空間のところどころにひびが入っている

煙が立ち上げ視界が悪り相手の姿は見えない。

「ケツケツケ・・・・ヒデエナ・・・・オ・・・・レモ・・・・

コウゲキクライシタカタゼ・・・・ハヤクシナイト・・・・

・オマエトイツショ・・・・ニイタ・・・・オンナガ・・・・タ

イヘ・・・・ン・・・・ナコト二・・・・ナルゾ・・・・」

声が途切れた瞬間、俺の中に力が漲ってくる。

（何だこの力は？）

（おそらくカオスの力だと思います。・・・・・・それと・・・・

とても言いにくいことなんですが………)

(どうしたんだ？言ってみるよ)

(………カオスは確実に死にました……しかし絶命したと思われていたアポロンの生体反応がこの学園都市にあります。)

(………やっぱりか。殺したときにあまり手ごたえを感じなかったんだ。それよりカオスの言ったことが気になる。急ぐぞ)

俺はその世界を後にした。

俺は走りだした。そして小萌先生と秋沙の二人を見つけた。

しかし、見つけたときには遅く、オリアナが前にいて単語帳を破っていた。

ドッ！！

という鈍い音が響き、秋沙の体から血が噴出した。

「秋沙ーッ！！！」

俺は大声で叫ぶ

「チッ！！！」

オリアナが逃げ出そうとしているが遅い。影縫いで体を止めている。なっ、体が動かない！！！」

俺はゆっくりと、しかし確かな殺気を放って姫神の側まで歩いていく。

「………オリアナ……お前………そんなに運び屋引退して病院生活がしたいのかゴラァ！！！」

「くっ!!」

「……………小萌先生、そこを動かないでください」

小萌先生はコクツつと頷く。顔を伏せていて表情は分からないが、泣いているのだろう。

俺は翼を出す。

しかし、いつもの白く暖かい翼ではない。

黒く冷たい翼だ。

「死ぬ覚悟はできたか？オリアナ」

「だめです。神崎ちゃん!!殺してはだめです!!それより早く姫神ちゃんを!!」

小萌先生は死ぬという単語に反応して泣きながら俺に飛びついてきた。俺は翼をしまう。

オリアナはいつの間にか逃げていた。単語帳を使ったのだろう。

人が集まってきて秋沙を囲んでいく。野次馬だろう。俺は怒りに見舞われるがそれを何とか抑える。

「ど、どいてください!!皆さん、道を明けてくださいなのですよ!っ!!姫神ちゃん?大丈夫なのですか、姫神ちゃん!!」

「どけ!!」

人を押しのけて入ってきたのは当麻だった。

「か、上条ちゃあん!!」

「……………ッ!!」

当麻は秋沙を見て硬直した。

「何で、そんな……………姫神が?先生、ここで何が起きたんだ!こんなの、誰が!?!」

「わ、分からないんです。せ、先生、ここで女の人とぶつかったんです……………。それで、先生はちゃんとごめんなさいって言って、その人に笑って許してもらえたと思ったんですけど。何か、急に怖い顔をしたと思ったら、いきなり……………姫神ちゃんに……………ッ!!」

「オリアナか」

ステイルはまだ長い煙草を片手で掴むと、苛立たしげに壁へ押し付けた。

「・・・・・・・・・・」

俺は当麻の肩を掴み振り向かせる。

「なんで、十夜が・・・・まさか、十夜がいながらこんなことになったって言うのかよ!!」

バキッ

俺は当麻を殴りつけた

「いつてえな!!なにす「当麻落ち着け。俺が来たときにはもう遅かった。そこをどけ」・・・・・・・・」

当麻は何も言わずに場所をどく

「これよりこの場は我が穩所と化す」

俺が人払いを嘆くと、今までの野次馬が消えていった。

「何で、アイツが?だって、姫神を襲う理由なんか無いだろ!コイツは今回の件と何の関係も無いじゃないか!!」

「間違えられたんだよ。秋沙がつけているこのアクセサリーは『歩く教会』という方式の霊装が使われている。これは特殊な一品なんだ。それを見たオリアナが大方強力な追っ手が自分の逃走ルートを先回りしたとでも考えたんだろうな」

俺は簡単に説明してやる

「間、違えた・・・・・・・・?」

ひくひくと喉が妙な動きをする。

「それだけ、なのか。ここまでやっておいて、姫神のことをこんなにして、その理由が間違えたただだって?・・・・・・・・あ、の、野郎。ふざけやがってエエええええええッ!!」

当麻は近くの壁を殴りつける。

「これだけ完璧に応急処置は施してあるんだ。当然ながら救急車も呼んでるね。なら、路地の入り口で待っているといい。この中にいると救急隊員は君たちの姿を発見できなくなる。ま、野次馬の視線

にさらすよりはマシだと思うが」

オリアナを追うためにステイルと俺は暗い路地の先へ向かう。

「待てよデメラ！！」

「何だ？君はいつたい何を望んでいる。ここでとどまって絶叫を続けるか、それとも一刻も早くオリアナ」トムソンを見つけて話を終わらせるか」

「俺たちのせいで巻き込まれたんだぞ！このまま姫神を放っておけるかよ！！」

「上条ちゃん？」

小萌先生は小声でつぶやくがその声は当麻には届いていないだろう  
「なら、君に何ができる？」

まっすぐに当麻の顔を見たステイルは指輪だらけの手を伸ばし、

「調子に乗るなよ、素人が」

思いっきり当麻の髪を掴み、強引に下を向かせた。

そこには血の中に沈んだまま、ひゅうひゅうと浅い息を吐くことしかできない、一人の少女がいる。

「この傷ついた少女の前で、たかが素人の君にできることなんかあるか。プロの僕にだって無いんだよ。どうする事もできないんだ！一緒にいれば傷は治るか？手を握ってやれば痛みは引くか？本気でそう信じているなら今ここでやって見せろ。そうしている間にもこの冷たい現実彼女の体力を奪っていくだけだ！今ここで僕たちにできるのはオリアナを追う事だけなんだよ！それをやりたいならこの少女をまたげ！嫌ならここで潰れていろ！！」

ステイルは乱暴に当麻の髪から手を離れた。

「……その怒りが君一人だけのものだなんて思うなよ、上条当麻。これだけの場面を見れば誰だって思う事はある。ステイル」マグヌスであってもこの有様だ。わざわざ命懸けで『三沢塾』から助け出した女の子が、こんな形で喰い散らかされて、平静を保っていられるはずが無いだろうが」

ステイルはぎらぎらと光る指葉のついた人差し指で、真下を指差す。

「またげよ、上条当麻。またいでオリアナを追うんだ！これが僕たちの世界なんだよ。残酷なものだろう。僕たちにその子の傷は癒せない。それは絶対に覆らない。だから誰かを守るつもりがあるなら拳を握れ。僕たちにできる事なんて最初から限られているんだ。君の右手には幻想を殺す力しかない。幻想を守る力なんてどこにあるって言うんだ」

「……、くそ」

当麻は俯いた。そして顎には奥歯を砕きかねないほどの力が加わっていた。

「くそっ……たれが……ッ！」

当麻は傷ついた秋沙をどうにかするよりも逃げたオリアナのことを優先するために一步を踏み出す

「、」

俺たちはそれを見た。当麻の足が秋沙をまたごととする寸前。

小萌先生がなにやら小石を並べているところを。

「待て」

ステイルは声を上げる

当麻はまたぐタイミングを失い後ろへ下がる。ステイルはそれを見ずに、小萌先生の顔を真っ直ぐに見て

「君は、何をしている？」

「あの時は……」

小萌先生は真っ赤になった顔でステイルを見返し、

「……シスターちゃんの時は、これで何とか、なったのですよ？だから、今回だって……今回だって、きっと、どうにかなるに、決まってるの、です。以前だって、シスターちゃんが、背中を斬られて、血がいっぱい出て、でも、シスターちゃんに、言われた通りに、先生、やったら……」

「ま、さか……まさか、貴女が……？」

「……前は、これでうまく言っただけなのに。先生、ちゃんと、覚えているですよ？シスターちゃんに、言われた、通りに、



やってるのに……ッ！どうして？どうして、姫神ちゃんは治つてくれないんですか……ッ！？姫神ちゃん、さっきまでナイトパレードの話しかしていたんですよ。神崎ちゃんたちと一緒に回りたいって、前の日からパンフレットをチェックしていたみたいだったのに、何で、こんな……ッ！！」

「……ふっ、俺も子供だな。こんなことで冷静じゃなくなるなんてな。今すぐにでもオリアナをぶっ殺したい事に変わりは無いが………ステイルと当麻。ここは俺に任せていけ」

「……大丈夫かい？」

「……ふっ、俺を誰だと思ってる？この学園都市で、本当の意味の最強だぞ？安心しろ傷一つ残さないよ」

（どうして………）

姫神は冷たい地面に沈みながら静かに思う。

（どうして私なんかのために残るのだろう。）

確かに十夜君が残ってくれるのは嬉しい。

けれど、十夜君が行けばすぐにオリアナって言う人を倒せる

「……大丈夫かい？」

「……ふっ、俺を誰だと思ってる？この学園都市で、本当の意味の最強だぞ？安心しろ傷一つ残さないよ」

十夜君は本当に私のことを思ってくれている。

「……行つて来る」

「当麻！！俺が着くまでにオリアナ見つけたら思いっきりぶん殴つてあいつの幻想殺して来い！！」

「……おう！！」

十夜君は彼らがいなくなつたのを見届けて私の耳元で囁いた。

「ナイトパレード。一緒に行こうな」

そのとき、自分は、うつすらと笑つたと思う。

ずるい、と心の中で呟いた。

自分を取り巻く世界はどこまでも冷酷で、こちらが伝えたいことなんて何一つ伝わらなくて、死ぬほどの力を振り絞っても、誰も願ひなんてかなえてくれないくせに。

この少年の言葉は、どうしてこんなに力があるんだろう？

「さて、やるか。魔力全開放！！」  
ドン

俺の周りを金色のオーラが包み込む。

これは魔力色という物なのだろう。

昔、何かで読んだことがある。一定の魔力量を超えると魔力が目に見えるようになると

「ライト・ダーク・テンペスター・アモリスタ ここを我が聖域とし、悪質なる者を取り除け。そして安らぎを 癒せ 治せ そして守れ 神崎十夜の名において命ずる このものの傷をこの世から消し去れ 治療の神 アスクレピオスよ！！」

俺が詠唱を終えると俺の後ろに蛇が現れ、秋沙の周りを取り囲み光

りだす。

光が収まると血溜まりはなく怪我一つなく気絶している秋沙がいた。

ある病室の一角

「やあ十夜君。久しぶりだね」

「おう『冥土返し』。秋沙を頼むぞ？」

「……ほぼ完治に近い状態まで治しておいてそれを言うかい？」

「それもそうだな」

「うう……」

秋沙が小さい呻き声を上げ、目を覚ます。

「うっ、一体ここは……？」

「病院だよ。覚えてるか？お前、体がぐちゃぐちゃだったんだぞ？」

「ほら、まだ寝てなさい。十夜君に感謝するんだね？君がここに来たときには十夜君がもう完璧に治していたんだからねえ」

俺は照れ隠しに徐に立ち上がる

「さて、俺は行くかな。秋沙、ナイトパレードまでには戻ってやる。ここで待つてろ」

「……分かった。期待しないで待つてろ」

「はは、そうしてくれ」

俺は病室の窓を開ける。ここは三階心地よい風に髪を靡かせる。そして、一对の白く暖かく神々しい翼を出し飛び立った。

目指すはオリアナ、当麻、ステイル、土御門がいるであろう滑降路へ向かって

「当麻がいない？」

「あら。息子が競技に参加していないとは、一体どういう事なんでしょう？怪我や急病で退出している、という訳ではないのでしょうか？」

そこには小萌と上条夫妻の姿があった

「あの、えと、その『piriririri』あつ、すいません。ちよつと待つてくださいね。はい、もしもし小萌ですけど」

『小萌先生？そこに当麻の親いるだろう？代わってくれ』

「神崎ちゃん！？何で分かったんですか！？つてそれよりも姫神ちゃんの様態は！？」

『あー、大丈夫だ。それと上に今いる。つてか降りる』  
ブチッ

携帯が切れたと同時に、ものすごい速さで地面に降り立つものがあった。

「こんにちは刀夜さんに詩菜さん。」

「あらあら。十夜君じゃありませんか」

「んー、まあ当麻は大丈夫です。心配しないでください。もし何かあつても俺が命懸けで守りますから」

俺はまあ俺が命懸けで戦えばこの世界壊れますけどねと付け足しながら言った。

「十夜君一つだけ聞きたいんだがいいかな？」

「何ですか？」

「当麻は自発的に行動しているんですね。誰かに引つ張りまわさ

れているのではなく」

「はい。それは保障しましょう」

「なら、当麻にとっては、競技以上の価値がある行いという訳だ。それなら、止める理由は思い浮かばない。かな」

刀夜さんは空を見上げながら言った

「ありがとうございます。それでは俺はこれで」

俺は再び翼を広げ空高く飛び立った

## 第二十話 大覇星祭 中編（後書き）

えー、皆さんにお願いしたいことがあります！！

十「どうしたんだいきなり？こんなコーナをするなんて初めてじゃないか？」

まあそだね。

十「で、お願いしたいことって何だ？読んでくださってる数少ない皆様が難しそうな顔をしそうな内容な気がするのは俺だけか？」

気のせいでしょ

それでは2つほどお願いがあります。

一つ目！！

十夜に使ってほしいオリジナル技やオリジナル武器を書いてください！！

書き方は・・・

技や武器の名前

技や武器の説明

技や武器の威力（F a t e 風に）

十「おゝ、俺の技か。みんな応募待ってるぜ！！」

二つ目、

これから出してほしい神。

実際の神を出すかものすごい悩むんですよね、

十「まあ、あまり強くないやつだったらいいな。カオスは意外と弱かったなww」

こんな感じです。

十「みんなよろしく頼むぜ!」

作・十「ご応募おまちしております!」

これからこの作品をよろしく!!

## 第二十一話 大覇星祭 後編（前書き）

今年もよろしくお願いします。

ドラグーンさん技の発案ありがとうございました！  
この回で使わせていただきました！！



## 第二十一話 大覇星祭 後編

「んふふ！そろそろ辺りも暗くなってきたわね」  
当麻は焦っていた。

目の前にはオリアナが無造作に見えてその実、全く死角のない動きでこちらへ向かってくる

（くそっ）

遅まきながら、これがオリアナの戦術だとうやく気がついた。いや、気づかされた。オリアナは大技を使って初撃で一撃必殺を狙おうとはしない。適度に両者の力のバランスを保ち、こちらが勇み足をしたところで強烈なカウンターを決めてくる。それはおそらく、『一度使った魔術は二度と使わない』オリアナが、可能な限り大技を温存しておくために身につけたのだらう。

遊ばれているのではない。

これが、オリアナ・トムソンにとって、ベストの構図なのだ。

「子供はもうおウチに帰る時間かな？それとも、お姉さんとちよっ

ぴり刺激的な夜を過ごしてみたい？」

踏み込んでくるオリアナに対して当麻も地面に転がった状態で、低い姿勢から一気に跳ね上がるようにオリアナへ突っ込んでいった。両者は再び激突する。

当麻は攻撃を避け、受け止め、それでもこちらの拳を当てられないまま、

（あと一つ………）

歯を食いしばり、攻撃を死角からねじ込まれ、それでも痛みを耐えて、

（あと一つ、何かあれば………、こっちの手数を増やす、何かがあれば！！）

再びオリアナの攻撃が当麻の死角に入る寸前彼は来た。

「どうした当麻？ぶっ飛ばすんじゃないのか？」

彼は自分が攻撃を当てられなかった相手に対し、難なくオリアナの攻撃を受け止めその反動でオリアナに拳を叩き込んだ。

ステイル「マグヌスの明滅していた。

（ぐ、あ………）

横倒しになった視界。にじむような顎の痛み。ぐらぐらと揺れるバランス感覚。自分が倒されたのだ、と気づくまでに三秒間も必要だった。

手足に力が戻っていくが、その速度はあまりに緩やか過ぎる。

大柄な体格とは裏腹に、彼は接近戦に使うような体力に恵まれている訳ではない。

彼、ステイル・マグヌスは神裂火織のような選ばれた聖人ではない。土御門元春のような、一つの道を完全に極めた天才魔術師でもない。それでも戦うべき理由がある。

だからステイルはルーン文字を修得し、十字教文化へと組み込み、『魔女狩りの王』という教皇クラスの術式を手中に収めた。代償として近接戦の可能性を捨て、ルーンのカードがなければ炎一つ起こせない状態になっても。

しかし、その決意が生み出した反動が、今こうして彼の体を蝕んでいる。

（く、そ………）

意識が揺れる。

そんな状況の中、日が落ち始め茜色になった空の向こうから何かが飛んでくるのを見た。

すぐにその正体が分かった。彼はプロだ。自分はそのプロのように、なれない。

彼と比べたら自分は素人だ。

どれだけの歳月を労しても、あの立ち位置には、絶対にたどり着くことはできない。

だけど、

『世界を構築する五大元素の一つ、（MTWOTFFTO）偉大なる始まりの炎よ（IIGOOIIOF）』

一人の少女を守るために、掴み取った様々な技術がある。

その笑顔を踏みにじろうとする者と戦うために、それだけを目的に血をはくような痛みとともに手に入れた、数々の炎の魔術が。己の背中を押す淡い感情の正体も分からぬまま、ただがむしやりに手を伸ばした結果。

『それは生命を育む恵みの光にして、（IIBOL）邪悪を罰する裁きの光なり（AIIAOE）』

もはやこの術式には、何の価値もない事を、あの小さな少女の隣を歩いてくれる人間がきちんと存在し、そのために、この術式はす

に全て用済みである事も。

『それは穏やかな幸福を満たすと同時、（IIMH）冷たき闇を罰する凍える不幸なり（AIBOD）』

それでも、この術式はきつとあの子以外の誰かを守る。

ふと、降りて来た彼のほうを見るとオリアナを殴り飛ばす。

しかしオリアナはすぐに立ち上がる。

どうやら自分の出番もあるようだ。

そう、自分を守る存在。それは例えば、大きな瞳に涙をためて、返り血で両手を真っ赤に染めて、全く意味のない拙い術式に全てを願ったあの小さな女性を、

例えば、魔術師でもなんでもないので、胸元の十字架一つで勘違いされ、血の海に沈んでしまった一人の少女を。

『その名は炎（INF）その役は剣（IMS）』

その行為は、おそらくスタイルにとつては何の慰めにもならない。比喻するなら、大好きな人のために作ったケーキを全くの他人が『美味しい美味しい』と食べてしまうようなものだ。

どれだけ褒められた所で、心の隙間が埋まる事はない。絶対に。

『顕現せよ（ICR）』

それでも、彼女達を助ける事が、結果として一人の少女の笑顔を守ることになるのなら。

学園都市を守ることが、一つの幸せに繋がるというのなら。

スタイルⅡマグヌスは受領する。

全ての力を振るい、全くの別人を助けるために、

今もまだ残る淡い感情の下、素人なみに、ここにいる敵を倒すことを。

『我が身を喰らいて力と為せ（MMBCP）』

イノケンティウス  
魔女狩りの王』！！』

ドオ！！とスタイルの修道服の内側から、大量のカードが舞い散っ

た。まるで紙吹雪のように流れる膨大なルーンは、彼を中心に渦を巻き、周囲の碎けたアスファルトへと張り付いていく。炎が吹き荒れた。

紅蓮の輝きを放つ炎は、外から内へと一気に集束する。その中心点に黒い重油のような人型の芯を据え、摂氏三〇〇〇度の炎の巨人が彼の隣に立つ。

「……………行くぞ」イノケンティウス 魔女狩りの王

告げながら魔術師はゆっくりと地面から起き上がる。

手をつき、足をつき、ふらふらとした動きで。

それでいて、けて体と心の軸は折れずに。

彼は天に向かって叫ぶ。

魔法名

Fortis931。

彼が己の魂に焼印し、必死でくみ上げた『魔女狩りの王』イノケンティウスに望むものは、

「我が名が最強である理由をここに証明しろ!」

空の色は深い紫色へと変わりつつある。

俺は炎の閃光を見た。まるで自分はまだやれるというように。

「当麻、お前は少し休んでろ。ここからは……………プロの仕事だ!」

俺は駆け出すオリアナに向かって。

俺の後ろを人型の巨大な炎が少し遅れて動き出す、轟!と酸素を吸い込む壮絶な音響と共に、オレンジ色に揺らぐ腕が振りかぶられる。

「お姉さんに……………蠟燭責めの趣味はないのよっ!」

オリアナはすぐに俺の脇に回りこみ、炎の盾にする。しかし俺は動かない。

「・・・・・・・・・・」

少しはなれたところにたっているステイルの顔は笑っているだろう  
「一緒に死ね」

俺は構えることなく、炎を受ける。

しかし俺は炎にあたっているのも関わらず全く怪我どころか火傷すらしていない

「な・・・・・・・・ツ!!」

「温いな」

俺はオリアナの腹に蹴りを叩き込む。

「がつ!!はっ!!」

オリアナは体をくの字に曲げて吹き飛ぶ

「灰は灰に、(Ash To Ash) 塵は塵に。(Dust To Dust) 吸血殺しの紅十字(Squeamish Bloody Road)!!」

ドオ!!と新たな炎が生まれ、俺の脇を右に赤の、左に青の炎剣を?むステイルが勢いよく走っていく。

しかし

ゴンという音を立ててステイルは倒れ、それと同時に炎剣が地面に刺さり、爆風を上げる。爆風をもろに喰らったオリアナはさらに数m吹き飛ぶ。

「ご・・・・・・・・あ・・・・・・・・アあッ!!」

オリアナはまともに息の吸えないまま、後ろに下がり距離を取る。

そして単語帳のページを噛み破ろうとしたが、口が震えてまともに動かなかった。

イノケンティウス  
「魔女狩りの王!!」

ステイルが指示を飛ばし、炎の巨人が真っ直ぐ突っ込んできた。オリアナが横に転がって避けると同時に、ステイルは呪文を詠唱しながら勢い良く飛び込む

「炎よ。(k e n a z) 巨人に苦痛の(P u r i s a z N a u p i z)」

俺は剣を作り出そうとしたステイルを手で制し、オリアナに歩み寄る。

俺が近づくとオリアナは俯く

そして意を決したように顔を上げ

・  
・  
・  
・  
・

魔法名を唱えた

「 礮を担いし者(B a s i s 1 0 4)!!」

俺はオリアナの魔法名を聞いた瞬間、横へ飛んだ。

すると、俺が元いた場所へ鋭利な破片が降り注いだ。

そして俺の後ろにいたステイルには・・・破片が刺さっていた  
「す」

事を見ていた当麻は信じられないという顔で立ち上がり

「ステイルーーーーッ!!」

叫び声をあげた。

「テ、メエ・・・いい加減にしろよ、何人傷つければ気が済むんだテメエは!!」

当麻は叫んだ

対してオリアナは笑う。

「お姉さんだって、傷つけたくて、傷つけてるんじゃないわ」  
オリアナはどこか吹っ切れたような顔で言った。

「それが嫌だから、戦っているのよ。そっちから見れば馬鹿馬鹿しいでしょうけど。それでもこんな私にだって、目的があるの。さあ来なさい、坊やたち。あなたたちは学園都市を守る、最後の手駒。坊やたちを潰せば、それでお姉さんの役目は終わり。おとはローマ

クローチエディビエトロ

正教の『使徒十時』が、お姉さんの望んでいる景色を作ってくれる」

「な」つまり捨て駒ってことだな、お前は「十夜！」

クローチエディビエトロ

「当麻は黙ってる。あんたは俺たちを倒せばこの世界が『使徒十字』によって変わると本当に思っているのか？それ以前に“俺”を倒せると思っているのか？“少女”よ」

「フフフ、お姉さんが若いからって少女は若すぎるんじゃない？坊やより多く生きてるのよ？」

俺はオリアナを真っ直ぐ見て笑った。

「くつくくふはははは。俺が見た目通りの年だと思うなよ？お前より遥かに長く生きてるわ！」

俺はそういつて、覇気と殺気、闘気を体中からあふれ出させる

「くっ……！！！」

オリアナは俺の殺気と闘気に当てられ、膝を地面につく。

「お姉さんは、ね……」

そしてオリアナは語りだす。

「……誰でも良いのよ。ローマ正教だろうが、何だろうが、誰に従うかなんて、重要じゃない。政治家を選ぶのと同じ。その坊やには難しい話題かな。でも、政治家って芸能人とは違うでしょう？この政治家が好きだから選ぶんじゃない、お姉さんたちを幸せにしてくれる人なら、別にどこの誰が総理大臣になったってかまわないでしょ？」

血を吐くような浅い呼吸を繰り返しながら、オリアナは告げる。まるで、負けが確定したかのような弱弱しい声で

「正直な話。お姉さんは別に学園都市の味方をしたって良いの。でも、お姉さんは魔術サイドに縁があったから、たまたまそちらに付いていただけ。……『使徒十字』は、とりあえずお姉さんの目的を果たしてくれそうだから、ね」

「目的？世界の支配権でも手に入れて、馬鹿みてえな皇帝にでもなるのか？」

当麻は一步前にながら言う



「だから、それはお姉さんの上の事情。お姉さん別に、誰の下に従っても、不満はないの。お姉さんの日常さえ守ってくれば、誰かが支配してくれても。ねえ坊や。一体この惑星には、どれだけの数の主義主張信仰思想善悪好悪があると思う？」

「・・・・・・・・・・」

「答えはね、いっぱいよ。本当にいっぱい、数えるのが馬鹿馬鹿しく思えるほどあるの。ベースとなるのは十字教を始めとした、様々な『信仰の粹』ね。それらはさらに人々の中で様々な解釈がなされ、結果として一人一人が極小の価値観を持つ事になる。言ってしまうば、『ローマ正教オリアナ』トムソン派』といった具合にね。ねえ坊や。この世にはね、想像もできない展開なんて色々あるの。おばあさんに譲ってあげた二階建てバスの座席の下にテロ用の呪符が仕掛けられていたとか、迷子を保護して教会に預けたと思ったら実はその子はイギリス清教から逃げていた魔術師で、髪を掴まれて処刑塔に引きずられていったって、後になってから教えられたりとか、ね。今日も、木の枝に引っかかった風船を取ってあげたけど、それだって本当に『幸福』に繋がっていたのか。もうお姉さんには判断がつかないわ。ねえ坊や、考えられる？こんな落とし穴の存在を、全部が終わった後で思い知らされた人間の思いが。それでいて、行動しなければしないで、やっぱり目の前の人が確実に傷ついてくって事を再確認させられたときの気持ち。動いていても駄目。じゃあお姉さんは、一体何をどうすれば良いのかしらね。おかしいと思わない？隣人を愛する人々が、その実、隣に立つ人すら守れずにいるだなんて。だからお姉さんは求めるのよ。お姉さんの上に立つ誰かに。顔も名前も分からない、この惑星をどこかで支配している何者かに。」

オリアナは一呼吸しながらも話す。  
当麻との距離は四メートル

「誰でも良いから、この世界に散らばる主義主張を上手に支配して

くださいって」

小さすぎる。とても小さすぎる。

丸を守るために一を切り捨ててるだなんて

「お姉さんは、守る」

守りたいなら十すべてを守りやがれ

「そのために『使徒十字』を使って学園都市を支配する、そうすれば、今まで散り散りだった思いの形は、きっと上手くまとまってくれるはずだから」

オリアナはそこで止まった。

もう踏み込んでこないと踏んだのだろう

だが

「お前の『目的』はそれだけなのか？」

当麻は大きく踏み込んだ。

距離は三メートル

「だとしたら、やっぱりお前は安っぽいよ。悪党ってわけじゃねーんだろうけど、正義って言うにはあまりに安い。そんな程度の『目的』のために、学園都市のみんなを差し出せなんて馬鹿げた申し出は、絶対に受け入れられない」

「なん、ですって……」

俺もオリアナに向かって踏み出す。

「本当にその通りだな当麻。お前は小さすぎるよオリアナ。そんな守りたい守りたいっていうなら丸を守るために一を切り捨てないで十すべてを守りやがれ！それに、そんな人に頼ったやり方俺は好きじゃねえ。そんなにやりたかったら人に頼らず自分でやりやがれ！！自分で下につくんじゃなくて、自分の同志を探してやりやがれ！！」

「坊やたちは、見たことないからそういう口が利けるのよ！！怨嗟でも悲鳴でも怒号でも、救いを求める声ですらもない……」  
ただ『悔しい』っていう一言を！！十歳の子供が希望も持てず、百

歳の老人が絶望も持てず、ただその身に降りかかる事態に対して、呆然と立ち尽くすしかないっていう、あの表情を見たことがないから  
ッ！！」

「なら、お前は考えたことがあるのか？昨日まで元気だった親友がいきなり敵に寝返って周りの人を殺し始めた。そしてそいつは敵に殺される。さらにその敵はその敵の敵に殺される。しかし敵の中にも親族がいる。世界はいつだってそうだ。上手くないことばかり。だが、その分元気に生きている奴らだっている。お前は全てを悪いほうに考えすぎだ。」

「お前はどちらを選ぶ、オリアナ・トムソン。一回失敗したからって全てを他人に任せておくのか。たとえ失敗しても、その失敗した人たちにもう一度手を差し伸べてみるのか！！」

は、とオリアナは笑った。

これまでのものとは違い、吹っ切れたような危うさのない、ごくごく普通の笑みを、彼女はそれから息を吸って

「ッ！！」「」

一気に単語帳のページを噛み破った。

その直後、俺たちとオリアナの間には爆発が起こった。

俺は瞬時に後ろへ大きく飛躍し爆風を逃れる

轟！！

しかし、爆風が晴れるとオリアナは単語帳を口へと運んでいた。しかし、噛み破ったのはページ一枚ではなく、無数の厚紙を束ねている、金属リングの方を外したのだ。

「これで決着をつける」

数十枚ものページが一気に解放され、紙吹雪が舞う横一直線に放たれた紙吹雪の上に筆記体が走る。

漆黒の色で流れるように記された文字は『A l l o f S y m b

o1』。

「我が身に宿る全ての才能に告げる

俺はオリアナは詠唱を聞き、右手に力のため、炎を纏う。

「その全霊を解放し目の前の敵を射て!!」

そして単語帳に向けて放つ

「ファイヤーバースト!!」

轟!!と地響きが起こり、土煙が舞う。

しかし、何も起こらない。

土煙が晴れるとそこにあったのは燃え落ちた単語帳だった。

ファイヤーバースト・・・数千度の炎を纏い、一箇所纏めレーザー  
みたいに放つ技だ。

これを調整しながら放ち、単語帳だけを燃やしたのだ。

「残念だったな・・・・・・今度会ったら、俺が雇ってやる」  
俺はオリアナを眠りの霧で眠らせる。

「ステイル!!」

「・・・僕は、良い。自分で、何とかする。それよりも『使徒  
十字』だ。オリアナを起こして、場所を吐かせるんだ・・・・・・」

・。僕らが一番に果たすべき目的は、あの霊装の発動を食い止めることなんだから……」

「でも!!」

そのときだった。

俺たちに声が聞こえたのは

『心配する必要はないかと。もうすぐ全てが終わりますので』

女性の声だ。

その声は寝ているオリアナの懷から聞こえてきた。

「……通信を、妨害する結果が、途切れたせいだね……」

・

その声の主はリドヴィア「ロレンチェッティ」だろう。

先ほどスタイルに念話で聞き出しておいた。

『間もなくこの「使徒十字」はその効果を発揮し、学園都市は我々ローマ正教の都合のいいように改変されるかと。従って、貴方達がどれほどの傷を負っていて関係ないので、どの道、その傷も含めた学園都市の全てが捻じ曲がるために』

それは、

『使徒十字』は、オリアナではなくリドヴィアの手にあるという事であり、

同時に

「俺達みたいな邪魔者は、みんなここで排除するつてのか!？」

『何か勘違いをなさっているのでは。我々はそちらの傷をも慈しみ、治して見せると告げているだけで。もちろん、それがローマ正教にとって最も有益だと判断できればですが』

「……まともに取り合うな、上条当麻」

「その通りだ。傷なら俺が直せるしな」

「ヤツらが『使徒十字』を使おうとしている以上、この近くに必ずリドヴィアと霊装本体があるはずだ。君の右手なら、あらゆる霊装

の機能を一撃で破壊できる、だから早く行け。リドヴィアはこの滑走路の近辺に」

「誤解なきよう告げて起きますが」

ステイルの言葉を封じるようにリドヴィアは告げた。

『「使徒十字」は現在、学園都市にはありませんので』

「な、に？」

『そちらは学園都市内部の『天文台』を調べていたようですが、それらは全て我々が先導した結果に過ぎないので。どうやら学園都市の外にある「天文台」にまでは手が回っていなかったようですが』

「くつくく、じゃあ俺は帰るかな。」

「なっ！？どういことだ神崎十夜！！」

「リドヴィア。お前がもつと遠くに行つてればその術式は成功したかもな。だがそんな近くじゃ俺が一瞬でいけるしな。だが俺には約束があるんだよ。“ナイトパレード”のな」

俺はナイトパレードを強調させて言う。

「……………十夜。お前は本当に天才だぜ」

「おう、褒める褒める」

俺はその場を少し歩き、姫神の病室に転移した。

「よう秋沙。元気か？」

「十夜君。来てくれたんだ」

「まあ約束だったからな」

俺は秋沙の寝ているベットまで歩いていく。

「さて、行くかな」

俺は途中で借りてきた車椅子に秋沙を座らせる。

そのときお姫様抱っこをしたのだが秋沙はトマトのように顔を赤くしていた。

その後、俺たちは二人でナイトパレードに向かった。

途中、美琴にあい迫られたが明日一緒に行つてやるといつて妥協策を出した。

しかし、それも秋沙の爆弾発言で無意味となった。

「十夜君、私と付き合つて」

そう、いきなりこれだ。吃驚する。

「あ、あんたねえ！！十夜には私という彼女がいるのよ！！その、彼女の前で何言つてるのよ！！」

「知ってる。でも、貴女と居るより私と居るほうが十夜君は幸せ」

「……………俺は一体どうすれば？」

「そんなことないわよ！！ねえ十夜！！」

「あ、ああ」

なんか秋沙がやけに積極的な気がする……………

俺はボケーンとその二人の言い争いを聞いていた。

「十夜君もそれでいいよね？」

「十夜いいわよね？」

「あ、何が？」

「だから、私と秋沙ちゃん二人が十夜の彼氏になるって事よ!!」

「いいかな、十夜君？」

「・・・何とっていいのやら・・・」

「つか、俺は秋沙の恋人になるなんていってない気がするのだが・・・」

「・・・」

「いいのね、分かったわ。秋沙ちゃんよかったね」

「俺何も言っていないのだが・・・」

「そうと決まったら、三人でナイトパレードを回るわよーッ!!」

「・・・まあいいのかな。楽しければ。」

「今こうしている時間が楽しいし。」

「こうして、楽しいナイトパレードは終わった。」

「この楽しい時間がずっと続けばいいと思っていた。  
思っていたのに・・・」



次の日、大覇星祭二日目

（十夜さん！！シヴァの反応です！！）

（どこだ！？）

この時、俺は嫌な予感しかなかった。

（上空7500mです！！急いでください！！近くに人が居るんです！！）

上空7500mにか！？

まあいい

俺は上空7500mまで転移した。するとそこには、『使徒十字』と一緒に落ちてくる女性が居た。

リドヴィアだろう。

女性のほうは意識があるようで、必死に『使徒十字』に手を伸ばしている。

そこに、大きな漆黒の羽を持った全身を黒いローブで覆った男が現れ、使徒十字を掴んだ。

俺は、落ちてくるリドヴィアを掴んだ。

どうやら気絶してしまったようだ。

「シヴァ！！どうしてあなたはこんなことをするんですか！！」

「・・・・・・・・くつくくアテナか。復讐のためだよ」

「『使徒十字』をどうするつもりだ！！」

「『使徒十字』・・・・・・・・ねえ。コイツはそんな代物じゃねえぜ。コ

イツは・・・・・・・・『大災厄の杖』だ」

「『大災厄の杖』ですって！！」

「アテナ、何だその『大災厄の杖』って言うのは？」

俺は、驚いているアテナに聞いてみる。

「『大災厄の杖』っていうのは神界で昔起こった大災厄の元凶となった杖のことです」

「なっ！！何でそんな代物がここに！！」

「それはな、昔アテナお前がこの地に誤って落としてしまったからだよ。昔は保管庫の奥に厳重に保管されていたのだが、お披露目のときアテナの力の暴走でこの地に落ちてしまったのだよ。すぐに捜索隊が捜索に当たったが、見つからずじまいだったんだよ。それよりな、神崎十夜！！ここに、この学園都市を落とすことを宣戦布告する！！」

「なっ！！」

そしてシヴァは消えていく

「待て！！」

「ふん、精々足掻くんだな！！」

そして災厄は・・・・・・・・・・・・・・・・・・  
・・始まった。

第二十一話 大覇星祭 後編（後書き）

皆さんからの技の発案、お待ちしております！！

## 第二十二話 戦争の始まり（前書き）

ドラグーンさんありがとうございます。

少し変わってしまっているかも知れませんがすみません。

では、どうぞ

## 第二十二話 戦争の始まり

「大変なことに．．．．．なりました」

「．．．．．ああ。あの『大災厄の杖』．．．．．もの  
すごく忌々しい感じがした」

「．．．．．神界は．．．．．十夜さんに全てを  
委ねるつもりです．．．．．」

俺は驚いた。神界が？何故？

その問いにアテナは答えた。

「神界はほとんどの即戦力や実力者を失い、今では神界の誰よりも、  
十夜さんの力が強くなっています。なので、十夜さんに全てを委ね  
るつもりなのです」

「そんな．．．．．馬鹿なことないだろ？個人個人の  
力が俺より弱い？それじゃ．．．．．勝てるはずがないじゃない  
か！！」

俺は怒鳴った。誰に怒鳴るわけでもなく自分自身に。

自分の醜さに。

自分はきつと、『大災厄の杖』の力を体で感じ、恐怖しているのだ

ろう。

あの、忌々しすぎる力に……………

でも、

「アテナ、神界の力のある奴らを集めてくれ。全面戦争だ」

「……………はい」

アテナが、神界に帰ろうとした寸前、外で爆発が起こった。

「……………この感じ……………父さん!!」

アテナは飛び出していた。

外には、倒れている美琴と黒子、インデックス。美鈴さんと数人の学生と大人の人がいた。そして、それを見下ろすように、している老人がいた。その老人は白い髭にとても鋭い黄色の眼光を持ち、雷を纏った武器を構えている。

「父さん!!」

「……………じゃあ……………アイツがゼウスってわけか」

「フハハハハ、神崎十夜よ。この世界を守りたかったらかかって来い!!」

俺は、何も言わずに大きな純白の翼を出した。

相手の強さは見れば分かる。

あいつの力は、半端じゃない……………

もしかしたら俺は負けるかもしれない。

でも、やらなきゃいけないときもあるんだ……………!!

「とう……………や……………」

「美琴……………安心してねてろ」

「とう……………や……………負けないで……………」

「ああ」

俺はゼウスがいる所へと飛び立った。

「ははははは、逃げずに来たことは褒めてやろう。だが、ここでお前は死ぬ!!」

ゼウスは手に持っている雷を纏った武器をこちらに投げてきた。俺は、反応が遅れるが間一髪で避ける。

どこかへ飛んでいった武器は再びゼウスの元へ戻っていく。

武器が通ったところは次元が歪んでいた。

俺はそれに顔を顰めた。

「死ぬのはお前のほうだけだな?」

「十夜さん、気をつけてください!! その武器は雷霆といって世界最強の武器とも言われています!! お気をつけて!!」

……また、なんとというチート武器

ゼウスは雷霆片手に此方へ突っ込んでくる。

「しょうがない……」

俺は目を閉じ、思う。

思い浮かべるは最強の盾。

自分の思いしで強くも弱くもなる最強であって最弱の盾。

その盾は、強くそして自身を守る最強の盾。

どんな攻撃も通さない。たとえ相手の武器が世界最強の武器であるとしても……

相手が世界最強なら……全次元最強の盾を作り出す!!

「グレイセス（全てを護る者）!!」

俺の周りに絶対的強度を誇る盾が現れ、目の前まで迫っていたゼウスを弾き飛ばす。

「がはっ!!」

今の声・・・それは俺とゼウスの物だった。

ゼウスは吹き飛ばされた衝撃により。

俺は・・・・・・・・・・・・・・・・『グレイセス』の力により・・・・・・・・

この『グレイセス』は自分の思いが強ければ強くなる。

しかしその分、脳にかかる負担は生半可なものではない。

いくら俺の脳がチート染みているといえど、この盾は全次元最強もしくはそれ以上。

それに耐えられるほどの脳と精神力を俺は持っていないということだろう。

俺はすぐにグレイセスを消し、攻撃の準備にかかる。

体に炎を纏う。それも数千度の炎をだ。

オリアナを倒すときは調整のため片手だけだったが、今度は調整なんかしていたら勝てそうにない。

俺は体に纏った数千度の炎を俺の目の前に集める。

体中に纏っていた炎が一箇所集まり丸くなる。

ゼウスは雷霆を持ち、今も迫ってくる。

俺は集まった炎を右手で掴み、

コンプレクシオ

「掌握！！！」

右手に取り入れる。

「くっ・・・・・・・・ッ！！！」

正直立っているのがキツイ・・・・・・・・だが

「負ける訳にはいかないんだーッ！！ファイヤーバーストオオオオオッ！！！」

俺の右手から一気にゼウスに向かって炎のレーザーが向かう。

「はあああああああ！！！」

ゼウスが雷霆を構える。しかし、そんなのお構いなしに炎のレーザーは突き進む。

そして雷霆にぶち当たる。

「ぬっ！！ぐあああああああ！！！」

炎のレーザーは雷霆など、無かったかのように突き進みゼウスを・





「くつくつく。神崎十夜、見事だったよ。まさかゼウスに打ち勝つとはねえ」

「シ・・・・・・・・ヴァ・・・・・・・・」

「とう・・・・・・・・や・・・・・・・・イヤアアアア！十夜！！」  
なきながら美琴は叫ぶ。そして此方に走ってくる。

「来る・・・・・・・・な・・・・・・・・みこ・・・・・・・・と・・・・・・・・くつ！！」

俺は心の臓に突き刺さっているものを力尽くで引き抜く。そしてシヴァに掴みかかり、何も無い次元に転移する。

「十夜アアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！！」

そこに響いたのは美琴の声だけではなかった。

そこに居たものほとんどが十夜の名を叫んだ。

「ふむ、まだ移動できるほどの力を持っていたか・・・・・・・・」

「てめえ・・・・・・・・こ・・・・・・・・こで・・・・・・・・死ねえ！！」

俺は小太刀を振り上げる。

しかし、それは容易く避けられてしまう。

「小太刀を振るう力さえ残っていないのに・・・・・・・・大人しく・・・・・・・・死にやがれえええ！！ダークシンドローム！！」

俺の目の前に闇が迫ってくる。

「ここ・・・・・・・・までか・・・・・・・・」

俺の体は・・・・・・・・消滅した。



十夜が居なくなっただけからというものシヴァの動きが活発に成りだし、瞬く間に世界はシヴァに征服されていった。最初は魔術師や、超能力者が抗った。しかし、それもすぐに制圧させられてしまった。死傷者は出ていないものの、怪我をするものが多く病院はその頃とても忙しかった。

今ではシヴァに抗うものは居なく、みんなビクビクした生活を送っていた。

その間、当麻は天草式と協力し女王艦隊を壊滅させたり、『0930事件』が起こったり、一方通行、エツァリ、淡希がグループに入

つたり、神の右席が出てきたり、色々あった。本当に色々ありすぎた。

「……………てめえらはこのままでいいのか？あいつらに支配されたままで……………本当にいいのか？」

そう、言葉を発したのは上条当麻だった。

「私は嫌よ。十夜を……………十夜を殺したやつなんかの言いなりになるのは！！敵をとりたい！！」

今度は美琴が……………最愛の人を思い

「私もお姉さまを一人で行かせる訳には行きませんの」

白井黒子が

「俺もだにやー。十夜は俺のクラスメイトだからにやー」

土御門元春が

「僕も、それには賛成だね。いつまでもあいつ等のような偉ぶっているヤツらには従いたくないね」

ステイル「マグヌスが

「あア、俺もだぜエ」

一方通行が

「ミサカもミサカも許せないって、自己主張してみたり」

打ち止めが

「決して負けるわけには行かないのよな。アイツのためにも」

建宮斎字が

「私も負けたくない。彼のためにも」

結標淡希と五和が

神崎十夜に関わりのある者も無い者も、上条当麻を通してここに集まった。

「決まりだな。てめえら……………戦争の始まりだ」

「まあまあ、お待ちなさい」

「誰だ！！」

「こんにちは皆さん」

そこに居たのは数千に上る天使を連れたアテナが居た

「アテナ……さん？」

「はい……。私たち神界も勢力を上げてあなた方をサポートします。十夜さんのためにも、この世界のためにも……」  
世界最強のメンバーがここに揃った。

「まだだ……。まだ力が……。足りない」  
そこには何も無かった。声だけが……。木霊していた



## 第二十二話 戦争の始まり（後書き）

これからもよろしくお願いします。  
ってか、時間飛ばしすぎたな  
反省はしても後悔はしない！！



## 第二十三話 闇より出でし者ダークネス

何かがおかしい……

そう感じているのは私こと上条当麻だけではないはずだ。

そもそも、やつらは何で攻めて来たんだ？

何か大切なことを……そう、とても大切なことを忘れて  
いる気がする……

俺たちが集まったのは、本当にこの世界を守るためだけなのか？

そういえば、最近御坂と付き合い始めた。

でも、キスをしたり手を繋いだり、くっ付いたり御坂の部屋に泊ま  
ったり、御坂が家に来たりする事は無かった……いや、  
体が拒絶していた。

そんな事をしてはいけないと、体が訴えかけてくる。

俺たちは忘れていても、体は覚えている……そんな気がして  
ならない。

時折、御坂が見せる暗くて、今にも泣きそうな顔も何か引つかかる  
ものがある。

御坂は何か知っているのではないか？そう聞いてみたが返って来たのは何のこと？と言う返答だけだった。

こんな悠長なことをしていて良いのか？と聞かれれば駄目だろう。しかし、今は待つことしかできない。俺たちレジスタンスメンバーの開発班が、『樹形図ツリーダイアグラムの設計者』の改良版を作っているところだ。もうすぐで完成するはずだから主な活動はそれからだ。

「上条当麻こっちに来てくれ」

「ああ、わかった。今行く」

俺はステイルの言葉に返事をし立ち上がる。

ここは対支配者レジスタンス本部である。

ここに集まったメンバーは皆、今の支配者が気に食わないやつらだ。イギリス清教、ローマ正教、ロシア成教、天草式十字凄教、スペイン星教派など、敵味方関係なしに集っている。

皆思いは一緒なのだろう。奴らの支配から逃れる術を求め、ここに来た。

「ついに完成したぞ。『樹形図の設計者 戒』が！！」

「そうか……………これでやっと本格的に活動できるな」

「ああ……………なんで、僕たちはここまで頑張っているんだろうね……………」

「ああ、皆そう思っているんだろう。皆の知っている何かがここま  
で俺たちを動かすんだ」

「それは……………ッ！！」

御坂がいきなり叫んだ。

「どうしたんだ？」

「……………なんでもないわよ」

「……………やはり何かを隠している。」

そう思えて仕方が無い。

レジスタンスメンバーの活動は順調だった。

しかし、ここで不明快な事が起こった。

『樹形図の設計者 戒』で予測した場所に行くと、そこにはすでに支配者は居なく、支配者の手下の死骸、残骸があったり、戦った形跡が在るだけで生きたままの支配者たちには会うことは無かった。

「一体……何が起こっているの？」

そう嘆いたのは誰だったか……

そんな中、一人考える者が居た。

御坂美琴である。

（……あの時……確かに……消滅させられた……はずよね……）

そう、彼女だけは覚えていたのだ。自分が愛した男のことを

（……ねえ、どこに居るの？十夜……）

彼女はシヴァに見せられたのだ、神崎十夜が消滅する所を……

・

「どうしたんだ、御坂？」

「え？なんでもないわよ当麻」

どうやら考えすぎていたようだ

（私……何やってるんだろう。皆が十夜 existence を忘れて……  
……私も十夜のことを忘れるために当麻の彼女になって……  
でも、当麻は思い出し始めている。その証拠に私にあまり近づいてこない）

『ヴーヴー』

不意に、本部の警報が鳴った。

『支配者が現れました！！場所は……この真上です！！』

「なに！？この場所がばれたか！？」

「お前ら、戦闘位置につけ！！」

『おお！！』

皆が一齐に動き始める。

外……

「……人は殺さない予定だったんだがな……こう

なつては仕方ない。それにゼウス様は一体何を考えていらつしやるのか……あいつが居ないこの世界にいたつて、意味は無いはずなのに……仕方ないか……」

そついつたのは支配者の一人『月読命<sup>ツクヨミ</sup>』であつた。

「良いからさつさとやるぞ」

そついつたのは支配者の一人『天照大神<sup>アマテラスオオカミ</sup>』だつた。

「……」

無言で立っているのは支配者の一人『須佐之男命<sup>スサノオノミコト</sup>』であつた。

そつ、『三貴子<sup>ミハコ</sup>』である。

「……やるぞ」

「「ああ」」

『我が母なる大地よ 太陽の力を用いて この地を滅ぼせ』

『我が母なる大地よ 月の力を用いて この地を滅ぼせ』

『我が母なる大地よ 神々の力を用いて この地を滅ぼせ』

『三貴子<sup>ミハコ</sup>』が詠唱準備に取り掛かる。

「おい！！何だあいつらは！！」

「あいつらが……支配者……」

上条当麻たちは、外へ出てきて支配者の姿を確認していた。

『我が母なる大地よ 太陽の力を用いて この地を滅ぼせ』

『我が母なる大地よ 月の力を用いて この地を滅ぼせ』

『我が母なる大地よ 神々の力を用いて この地を滅ぼせ』

「ッ！？来るぞ！！全員防御体制！！」

『太陽拳』

『月光拳』

『神霄拳』

オレンジ、黄色、白の光線がレジスタンス本部に向かって、向かつ

てくる。

「超電磁砲!!」

「反射!!」

「魔女狩りの王!!」

「七閃!!」

「原子崩し!!」

「竜の息吹!!」

レジスタンスメンバーもそれぞれ対抗する。

しかし、あまりに支配者は強すぎる。

（な、何なのよこれ!! 格が違いすぎるじゃないの!! クツ……  
……十夜……助けて!!）

すると不意に、二方向からの攻撃の間に入るものが居た。

そのものは黒いローブを被り、真つ黒で気味の悪い仮面を被った全身が黒で統一されたものだった。

そのものが中に入った瞬間、攻撃は止んだ……否、打ち消された。

「……貴様……何者」

そういったのは誰だったか……月の神『月読命』だった。

「……」

しかしその者は答えない。

「……この頃我等の同胞を亡き者にしていると言うのは貴様か!!」

「……」

しかしその者はまたしても答えない。

上条当麻はその者に懐かしみを感じていた。否、上条だけではない。  
ここに居る彼に関わったものは全て……

（懐かしい感じがする……何かを忘れていた……）

・  
)

同じく御坂美琴も感じていた

(・・・・・・・・十夜・・・・・・・・？・・・・・・・・)

「答えんか貴様!!」

「・・・・・・・・我が名はダークネス。この世界の審判者・・・・  
・・・・・・・・貴様らの同胞を消したのは我だ。そして次は貴様らの番  
だ」

その声はどこか機械的な声だった。

## 第二十四話 非情

「ダーク・・・ネス・・・・・・・・俺はアイツを・・・・・・・・知ってる？」

俺、上条当麻は自問自答していた。知っているのだけれど、肝心なことが思い出せない

「上条当麻、君もそう感じるか。僕も彼とは話さなければいけない気がしてならないんだ」

ステイルもそう言っている。他の者も感じているのではないのだろうか？

ふと、御坂を見る。

御坂は俯いたまま、自分の拳を力強く握っている。

「ダークネス、と言ったか？貴様のしているその仮面をとったらどうだ？」

「嫌だ、と言っただら？」

「力づくでもとってもらうぜ！！」

「やめろ月読命！！」



ツクヨミと呼ばれた男は、ダークネスに向かって飛んでいく。

「あいつ、やばいぜよ!!」

「……大丈夫よ。アイツなら……」

今まで俯いていた御坂が顔を上げてそう言った。

「なにか……知ってるのか？」

「……見てれば分かるわよ……」

御坂は上空に顔を上げる。その瞳には涙が溜まっていた気がした。御坂につられて俺たちも上空を見る。

「……サービスだ。」

ダークネスは仮面を取り、地面に捨てる。

しかし、此処からだとかダークネスの顔がロープに隠れて見えない。

「うがががああああ!!」

いきなり上空でツクヨミは騒ぎ出す。

「どうしたツクヨミ!!」

「うが……が……」

ツクヨミの体が消滅していく。

そしてダークネスの体が光っていく。

「……貴様……ツクヨミに何をした!!」

「さあね、まあお前たちもすぐにあいつの所に行くのだから大丈夫だ。いまさら気にすることではない」

そうダークネスが言った瞬間、一人の男が黒炎に包まれ、もう一人の男が巨大な何かに切り裂かれていた。

「ぐはっ!! な……何なんだこの力は!!!!!!!!」

「……醜いな、お前たちをやっているのはお前ら自身だよ」

「なっ!!……まさか……この炎は……あま……  
……てらす……」

「こっちは……スサノオ……だというのか……  
!!」

「ああ、そつだよ。死ね!!」

グシャッ！！　ゴォ！！

スサノオはスサノオに、あまてらすはあまてらすにそれぞれ倒される。

するとまた、ダークネスの体が光った。

sideダークネス

支配者の始末も完了した。

後は帰るだけ……………

俺は“扉”を開く。

そして、その中に……………

「待つて！！……………待つてよ……………」

俺は思わぬ人物の鼻を嚙った声に立ち止まる。

「……………」

「十夜……………なんでしょ？」

……………俺は闇より生まれて孤高を貫かなければなら  
ない存在……………

「十夜……………！！神崎十夜！！俺の友達で……………仲間……………  
……………なんで今まで忘れてたんだ……………」

「ただど……」

「俺は歩き出す。」

「扉に向かって……」

「待つてよ！！十夜ああああ！！！！」

「最後のほうは泣き声になっていた美琴の声」

「俺は扉に入る」

「十夜！！」

「十夜ああああああ！！」

「神崎十夜！！」

「俺が繋げた先は美琴の目の前だ」

「……もう、いいよな。俺にはこんなにも仲間が居る」

「そして……」

「俺は美琴の前に出て、美琴を抱き寄せる。」

「……ただいま。美琴」

「……おかえり……十夜」

「……こんなに幸せだから」

「はっはっは！！やはり戻ってきたか。この程度ではくたばらん奴だとは思ったが……流石だな。是非とも私の仲間にお誘いたいものだ」

「嫌だな……シヴァー！！」

「ハハハ……君には私の城に来て貰うとしましょうかね」

「安心しろ。俺もそっちにいるあいつに用があるからな」

「これは困りましたね。すでに真実にたどり着いてしまわれましたか。」

「……つたり前だろ。お前が俺のことを消滅させなければもっと早かつ

たはずだよ」

『くつくつく。つくづく面白い人ですねえ君は。ならば此方も全力で迎えましょう』

それだけ言って、シヴァの気配は消えた。

「・・・十夜いくの？」

「ああ」

「なら私もついて・・・い・・・く・・・」

俺は美琴に眠りの霧を掛けて眠らせる。

俺は眠った美琴をお姫様抱っこして当麻のところまで歩いていく。

「美琴を頼むよ。“彼氏さん”？」

「俺らの付き合いごっこは終わったよ。お前がちゃんと面倒見てやれ」

そんな事を言いながらも、受け取ってくれる当麻。

「・・・行くのか？」

「ああ」

「・・・そうか。・・・死ぬなよ」

「当たり前だ!!」

俺は再び“扉”を開く。

「じゃあな」

そして扉の中に入る。

俺は向かう・・・シヴァの居るこの世界の中枢区へと

「くつくつく。やっぱり奴は生きておったか」

「はっ、しかと確認しました。どうして生きてたのかは分かりかねますが……しかし、何故其れほどまであの男に拘るのでしょうか？」

「……預言に出ていたのだよ。メルセディウスの預言の書にな。次に“あの座”に付くのは神崎十夜だとな。」

「……あの書にですか。それでは貴方様はもう“あの座”をお譲りになるのでしょうか？」

「ああ、もう疲れた。少しの間、隠居したくてな」

「そうですか。……むっ、来たようです」

「そうか。ならば総勢力で掛かれ。最悪潰れてもかまわん。潰れれば所詮そこまでの男だったということだ」

「はっ！！御意に！！」

そしてシヴァは去った。

残ったヤツは一人呟いた。

「すまんなアテナ。そしてこの世界の住人、神界のみなよ」

「うおおおおおお!!」

「てめえら掛かれ!!」

俺が当麻に美琴を預け、扉を開いた先に居たのは支配者とその手下・  
．．．．．合計7  
億あまり

「くっ、一体一体じゃあ拉致があかねえ!!」  
どうする．．．どうする?

ザン

俺は翼を出し羽ばたいた。

「氷撃殺!!」

辺り一帯が一気に氷結していく。

「失せろ 氷流激!!」

そして凍った奴らが一気に碎け散る。

バリイイイイン!! ガシヤアアアン!!

氷が砕け、7億ほど居た敵も1億ちよつとに減った。

「まだまだあ!!」

俺は二振りの剣を王の財宝から取り出す。

この剣は斬殺刀と闇光剣という剣だ。

斬殺刀は俺が此処に蘇る前に、俺のほうへ何故か向かつてきた劔だ。闇光劔はその名の通り闇と光の狭間にあつた劔だ。

この二振りの剣は使用者を選ぶようで、ずっと使用者が見つからな  
いまま放置されていたらしい。

「天擊靈戒痛神斬！！」

ズガガガ！

一気に1万ほどを切り伏せる。

「天魔神劍！」

ザシュツ！！

さらに切り伏せ続ける。

「雷光冠月殺！！」

グシャツ！！！！

また切り伏せる。

しかしなかなか敵は減らない。

其ればかりか増えている気もする

（やはり此処は一氣に決めるべきか？）

俺はそう考えていた。

ドガアアアアアン！！

しかし、大きな爆発音で考えを一時中断した。

「てめえら、みんな纏めてかかってきやがれ!!」

アレは……一方通行！？

「オラオラ！！神やんは俺らが助けるぜい！！」

「もう、十夜を失いたくなんて無い!!」

土御門に美琴！？

「てめえら何で来た！！」

「俺らだけじゃないぜい、レジスタンスメンバー全員集合だぜい！」

!

才才才才才才才才才才！！！！！！！！

土御門たちの後ろには沢山の人々が居た。

しかし……

「てめえら……退きやがれ……邪魔だ……」

「なっ!!」

「……えっ？」

「神崎十夜は死んだ……俺はダークネスだ!!」  
ボオン ボオン ボオン

俺の周りに黒いいくつもの闇が現れる

「行け」

そして闇は支配者どもではなく……美琴たちを飲み込み始めた

「何しやがんだ!!十夜!!」

「……じゃあな……当麻。お前はいいやつだったよ」

そしてレジスタンスメンバーが全員、闇に飲み込まれた。





## 第二十四話 非情（後書き）

感想待ってます!!

## 第二十五話 決着

『クックク良かったですか？仲間を殺して』

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

俺は無言で飛び立つ。

そして・・・・・・・・

パチン

指を鳴らした。

・・・・・・・・ たった其れだけで

ズドドドドドン！！

地面が陥没した・・・・・・・・否、そこに居た全ての者が消え失せた。

『なっ！！一撃で！！何をした！！』

「・・・・・・・・力の一部を解放しただけさ。簡単なことだろう？」

『力を解放だ~~~~~』

俺は騒がしかったので、音を断絶した。

そして俺は向かう。シヴァと・・・・・・・・ゼウスがいるであろう部屋へと。

俺は部屋までたどり着いたが、其れまで支配者が誰も居なかったのに何かを感じた。

俺は最初から力を全て解放し、部屋の扉を開いた。すると思ったとおり一斉に支配者が攻撃を放ってきた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

俺は動かない。

俺に攻撃が着弾した瞬間、全ての支配者が消えた。

反射を常時発動させておいたのだ。

「くつくつく。やはりお前はこんなもんじゃ倒せんか」

「・・・・・・・・・・・・・・・・ゼウス・・・・・・・・か。」

俺は人差し指を立て、ゼウスに向ける。

「斬結弾」

そして技を放つ。

「なっ！？ガハッ！！」

ドゴン

ゼウスは斬結弾をまともに受け吹き飛ぶ。

「早く若い奴らに任せて引退したほ格拉ブッ！！」

いつの間にか前に居たゼウスに蹴り飛ばされる。

「まだまだ若いモンには負けんわ！！」

「へっ・・・上等！！」

そして俺らはまたぶつかり合った。

「うつ・・・ここはどこ？」

「さあな・・・俺たちにも見当が付かない」

タッタッタッタ

そこへ複数の足音が・・・

美琴や当麻は顔を上げる。

するとそこに彼女は居た。

「アテナ！？」

「美琴さん！？どうしてここへ！？ここには人間達がこれるはずは・・・十夜さんですか」

「はい、私達は十夜にここへ飛ばされたの。」

「……………十夜の居場所は分かりますか？」

「はい、座標は……………です。」

「では、私達はそこへ向かいます。美琴さんたちはどうしますか？」

「もちろん行くに決まってるわ」

「……………分かりました」

「ちっ！！やるな神崎十夜！！」

「お前こそなゼウス！！」

「ハッ、面白い！！」

ガギイン

ガグイイイン

ゼウスの雷霆と俺の断罪の剣がぶつかり合う。

「そろそろ決めるか！！」

「此方もそう思っていたところだ！！」

二人は距離をとって止まり、力を溜め始める。

桁外れの力がその部屋に集まる。

「これが」

「俺の」

「「全力全壊だあああああ!!」」

「The last flame!!」

「ビックバンアタック!!」

何億何兆度にも燃え上がった炎がゼウスが放った巨大な金色の玉とぶつかる。

そして………

ズガガガガガガガガガガガガ!!

俺の炎がゼウスの攻撃に打ち勝った。

そして炎は衰えることを知らず、ゼウスを飲み込んだ。

「十夜危ない!! 避けて!!」

「えっ?」

俺はその声に驚きつつも言われたとおりに避ける。

ズドドドドン!!

すると俺が居た場所に大きなクレーターができた。

「なっ!?!」

「ちっ、はずしたか」

「てめえはシヴァ!?!」

「ふん、神崎十夜。俺が何故、ゼウスなんかの下に思っていたと思

う？教えてやる、そのほうが圧倒的に神界を支配するのに有効だつたからだよ」

「きさま……………」

「黙れ老いぼれ。俺はお前を倒して最高神の座を奪い取ってやる」  
「……………悪いな、こればかりは譲れないんだ」

俺がパチンと指を鳴らすとシヴァを取り囲むように魔方阵が展開される。

「な、何だこれは！！力が、力が抜けていく！！」

「終わりだ。お前の幻想はとつくに終わってたんだよ」

「そんな馬鹿な！！」

「俺を標的にしたときからお前は終わってたんだよ」  
さらに魔方阵が展開される。

そして

「終わりだシヴァ。お前の野望は終わった。そしてこれから先もかなえられることは無い」

パチン

俺が指を弾いた瞬間全ては粉々に砕け散った。





## エピソード

「これでワシも安心して隠居ができる」

「まさにジジイの言い草だな」

俺はジジイもといゼウスに向かって言い放つ。

そんな俺の後ろにはローマ正教やイギリス清教、天草式十字凄教など今まで戦ってきた奴らが居た。

「ジジイ言っな！！まあ神界は任せるぞ。」

「勝手にしろ」

俺は適当に答える。

「十夜さん。私は一度神界に帰って手続きをしてきますね。神界の皆様も十夜さんの実力は認めています。」

そういつてアテナは神界へと戻っていった。

「さて、ワシもそろそろお暇するかのう」

そういつてゼウスは消えた。

「さてと、ここもずいぶん荒れちまったなあ」

直すか？などと思っていると一人の少女が此方へ向かってきた。

法の書事件で俺に話しかけてきた少女だ。

後ろでは天草式の連中が「がんばれ五和!!」「ぶちゅつとかまし  
ちやえ!!」とか何とか叫んでいるが、まったく意味が分らん。

「あ、あの!!」

「何だ？」

「あの……目を瞑ってください……」

「ん……こうか？」

なんだろうと思い、目を瞑って気づいた。

このパターンは……

チュツ

右の頬に柔らかく、温かいものが触れた。

それが五和と呼ばれた子の唇だと気づくのに時間は必要なかった。

「あー!!五和!!抜け駆けは許さないわよ!!」

そういつて真横に転移してきたのは淡希。

そして反対側の頬にも柔らかく温かいものを感じる。

「なっ!!?お、お前ら!!?」

「ず、ずっと好きでした!!」

何で告白!?

「わ、私も助けてもらったときから……」

……どう突っ込めばいいんだ?

そう困った顔で美琴を見ると

「いいじゃない、いまさら一人や二人。」

貴方許しちゃうんですか!?

「……もう、何もいわん。付いてきたい奴だ  
け付いて来い!!」

俺は“扉”を開き神界に繋げる。  
着いて来たのは美琴、秋沙、淡希、五和の四人だった。

これから近い未来、彼女達は十夜の妻となるのだが、そのことを十夜はまだ知らない。



## エピローグ（後書き）

一応完結です

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7557o/>

---

とある世界の異世界目録

2011年1月23日18時27分発行